

二〇二二年度 第三回

泥流地帯

作文コンクール
応募作品集

WEB公開版

主催 『泥流地帯』映画化を進める会
協力 三浦綾子記念文学館
上富良野町教育委員会



二〇二二年度

第三回 泥流地帯作文コンクール作品集

募集期間 二〇二二年六月～九月

応募資格 特になし

応募作品数 35作品(うち9作品は短文投稿の部)

△選考委員▽

三浦綾子記念文学館 館長 田中 綾

上富良野町教育委員会 教育長 鈴木 真弓

上富良野町郷土をさぐる会 会長 中村 有秀

上富良野町図書館ふれんど認定ゴールドミウラー 岩男 香織

(選考委員長)『泥流地帯』映画化を進める会 会長 青野 範子

主催 協力

『泥流地帯』映画化を進める会

三浦綾子記念文学館

上富良野町教育委員会



目 次

△はじめに▽	1
△優秀作品選考審査結果▽	2
△一般の部▽	
■ 試練を超えて / (P.N) みんみん	4
■ 香也子の泥流地帯訪問記 / (P.N) 神楽岡 マイ	5
■ 生きるということ / (P.N) 山有 正	8
■ 星光の見えぬ夜から拓一ものがたり / (P.N) すい	8
■ 拓一くんと生きる / (P.N) ニモ	17
■ 思うこと / (P.N) カオリン	18
■ 「泥流地帯」と出会えた奇跡 / 松野 富子	19
■ 泥流地帯1956〜悪人の言い分 / (P.N) まるごとドリアン	20
■ どう生きるか『泥流地帯』から / (P.N) happylayer	26
■ バイプレイヤーズ / (P.N) おぼんです田谷	28
△児童生徒の部▽	
■ 泥流に生かされて / 高畠 菜央	40
■ 節子 / 寺西 紗世	41
■ 福子と節子の泥流トドロロ物語 / (P.N) 金平糖	41

■ 涙 / (P.N) 健康茶代表 烏龍茶	43
■ 深城と石村の家族の愛の違い / (P.N) ダオ	44
■ 拓一と福子の心情 / (P.N) かみきゆうた	45
■ いあいあ深城 / (P.N) 深き者	46
■ 「深城節子の価値観」 / (P.N) さかもと	48
■ 節子の魅力 / (P.N) ち。	49
■ 五郎と先生 / 鈴木 琉聖	49
■ 泥流 / (P.N) たかしま	51
■ 果てしなき泥流地帯 / (P.N) ちよもらんまつばさ	52
■ 静止した闇の中で / (P.N) 大きなトップの古時計	53
■ 耕作が中学に進学していたら / (P.N) おーすー	54
■ わたしが好きなのは…… / 堀田 滯	55
■ 祐太の冒険物語 / (P.N) クマの子	57
■ 終泥流地帯 / (P.N) ゴキジェット	58
△Twitterの部▽	59
△資料編 史実としての『泥流地帯』▽	61
△資料編 泥流ギャラリー(AI彩色写真集)▽	63

■はつめい

『泥流地帯』作文コンクールは新型コロナウイルスが猛威を振るい始めた二〇二〇年、自宅で過ごす機会が多くなったことを機に三浦文学、特に現在上富良野町が実写映画化に取り組んでいる『泥流地帯』『続泥流地帯』の原作小説を多くの人に読んでいただけることに期待を込めて企画がスタートしました。

児童生徒の皆さんはもちろん、「大人の作文」も楽しんでいただくため、対象年齢や文字数、内容に関する制約を一切取り払い何でもアリの募集を行った結果、第一回、第二回ともに予想を大きく上回る数のご応募をいただいたことから、この度第三回コンクールの開催が実現し、短文投稿の部を含め35編のご応募をいただきました。

昨年同様ごの応募作品も三浦文学愛、泥流地帯愛にあふれ、さまざまな視点から深くていねいに読み解かれたものばかり。読者同士で互いの理解を深めること、また『泥流地帯』を未読の方にも本を手にとる大きなきっかけになるのではないかと、この期待から、ご応募いただいた皆様のご理解とご協力のもと、作品集発刊のはこびとなりました。

実写映画化を間近に控えた今、本作品集が原作小説『泥流地帯』『続泥流地帯』をお読みいただく、または再読いただく機会となることを心から願っています。

■実写映画化プロジェクト

小説『泥流地帯』『続泥流地帯』の舞台となった上富良野町では現在、実写映画化のプロジェクトとして官民連携した取り組みが進められています。

実写版『泥流地帯』は民間事業者による全国公開の興行作品として製作される一方で、ふるさと納税により企業・個人から広く資金を募っています。

映画本編エンドロールにご寄附いただいた皆様のお名前を掲載するほか、エキストラ出演やイベント参加特典などをご用意しています。皆さんも映画作りに参画してみませんか？

三浦綾子

みんなで、撮影する

百年先のために
——青白い炎が灯る死の土地に
再び鏡を振るつた上富良野の開拓者
先人が譲り遺してくれた
美しく豊かな故郷の物語を
全国のスクリーンへ——

みんなで、出演する

実写映画化プロジェクト

北海道 上富良野町 / (協力) 三浦綾子記念文学館

「泥流地帯」映画化を進める会 / ロケサポートかみふらの
 <事務局> 上富良野町役場企画課工務光課 (071-0916 北海道 上富良野町 2-2-11)
 0167-45-0983 deiryu@movie-kanifurano.com

ふるさと納税で
もらえる！
泥流地帯文庫型
スマホケース
※各機種対応

公式Twitterで
情報発信中

©twitter

映画化
プロジェクト
webページ

優秀作品選考結果

一般の部

最優秀賞 星光の見えぬ夜から

～ 拓一ものがたり～ (P.N) すい

【選評】▽思慮深い耕作に比べてやや単純で直線的な印象の強い拓一にも、逡巡の一時期があったとは――。内面や背面にも矛盾がなくすぐれた人物考察ができていると感じた。▽石村家の家族に焦点をあて、祖父の言葉の伏線にたどりつく文脈は見事▽ともすれば英雄視される傾向のある拓一を弱さや迷いの人物として創作。作者自身の思いは不明だが、偶像視の危険性を考えるヒントとなる良作▽拓一の置かれている環境と人間性を描き、耕作、市三郎を含めた周囲の人たちとの会話を適切に挿入し細やかな発想と展開に感動

優秀賞 香也子の泥流地帯訪問記 (P.N) 神楽岡マイ

【選評】▽現代の、現実の上富良野の観光ガイド。しかも、バスガイドふうの語りではなく「香也子」独特の興味、関心に沿った語りであり個性的で楽しめた。実用的で参考になる▽三浦綾子文学への愛着により泥流地帯現地の様子やインタビュー等により分かりやすく表現されている▽小説「泥流地帯」の上富良野町巡りを景観・歴史・食・人等についての確に紹介している。小説を再読し訪問されれば、尚楽しく深みのある道中は必至

優秀賞 泥流地帯1956 ～悪人の言い分～

(P.N) まるごとドリアン

【選評】▽三浦作品の中でもとりわけ印象的な悪役の深城の内面に入り込み、一人称で語らせた「ピカレスク物語」。その發送自体がユニークで目新しい。興味深く読むことができた▽深城鎌治の生き様を通して善悪の深淺が表現されている▽深城の視点で作品の後日談を描いた二次創作。歴史的背景も描きながら、深城の心情や行動の理由がよく描かれており、斬新。楽しく読んだ▽「1956」―三十年前の「1926」は十勝岳爆発の時。深城の自己中心の性格と言動が的確。余韻ある結びに感嘆

佳作 拓一くんと生きる (P.N) ニモ

【選評】▽言葉を紡ぐこと。小説を読むこと。想像すること。「読書って必要？」という揶揄するような風潮に対する一つの答えがここにあり▽自殺を思いとどまり、生きることに迷っていた時に「泥流地帯」を読んで、拓一の困難・試練を乗り越える姿に勇気を貰う

佳作 「泥流地帯」と出会えた奇跡 (P.N) 松野富子

【選評】▽自身のルーツや三浦綾子作品との出会い、作品への思いが等身大のことで綴られているのが好印象▽自分の生い立ちや、家族構成等が類似した本との出会いを奇跡と捉え、苦難と試練は時代が変わっても存在し、その中で生きることを感じた



最優秀賞 泥流に生かされて

高畠 菜央 (成蹊中学校／東京都)

【選評】▽アメリカで過ごした小学生時代、9・11の当事者から「サバイバル・コンプレックス」の話聞き、それを『泥流地帯』に重ねた点に説得力がある。菊川先生のセリフとの接点も的確な指摘で、読解力のある生徒さんと感じた▽作品を読んで感じたこと、考えたことを自身の体験をもとに素直な筆致で描かれているのが魅力的▽「泥流地帯」の災害と「9・11」のテロ事件から生き残った者の義務(使命)と責任(役割)が心に響いた。菊川先生・拓一・耕作・母の引用が良い

優秀賞 いあいあ深城 (P.N) 深き者 (上富良野高)

【選評】▽ファンタジーのジャンルで、深城の心中や狙い、考えを動的に描き、日記体小説としての構成も巧みである。自在な発想、ゲーム世代のおそれない表現力を前向きに評価したい▽読後に強い余韻を残す創作。作者自身が楽しみながら書いているのが伝わる良作▽日記形式で大正6年から大正15年の十勝岳爆発までをリアルに書かれ、発想の凄さを特に感じた。強欲な深城鎌治の生き様と、「てけ・りり」が脳裏に残る

優秀賞 深城節子の価値観

(P.N) さかもと (上富良野高)

【選評】▽「親ガチャ」など今日的な話題をふまえながら、冷静に分析している点に注目した。その上で、節子は節子、自分は自分、とクールに「価値観」を考察しており、他の作文よりも一歩抜いていると感じた▽何故節子を魅力的に感じるのかが、自分との比較を通して飾らない言葉で描かれている。最後の一文がよく、「本はともだち」ということを感じさせてくれる作品

佳作 節子 寺西 紗世 (成蹊中学校／東京都)

【選評】▽節子は育った環境に流されず、素直な人間性を持ち続け、辛い境遇でも強い信念を持つての行動を訴えているのが印象的

佳作 深城と石村の家族の愛の違い

(P.N) ダオ (上富良野高)

【選評】▽二家族の生き方を通して、家族愛が人を育てることを表現されている▽石村家と深城家の比較、大正と令和との制度の比較は他作品にない良さ



最優秀賞 Tomomo @tomomo_journal

【選評】▽家族の思い出と歴史、そして小説「泥流地帯」を繋げる色。登場人物が思い描いた百年後の豊かなふるさとの象徴である「紫」を通じて本作が上富良野の現在と密接につながる物語である(ことをあらためて気づかせてくれる)つぶやき

一般の部

試練を超えて

(ペンネーム) みんな



「もうすぐ読み終わりそうだから寂しいの」

それは私が小学四年生だった時の母の言葉だった。母の枕元には「泥流地帯」というタイトルの本があった。その当時、母は少しずつ毎日大切にその本を読み進めていたのであった。今でもありありと、母の枕元にあったハードカバーの表紙を思い出せる。

その幼い日の思い出、そして自分が北海道に生をうけた事、札幌のミツシヨンスクールに進学した事もあり、三浦綾子は私にとって特別な人となった。

中学に上がった頃から、「氷点」「この土の器をも」「塩狩峠」などの三浦文学を読むようになった。それは大学生、そして社会人になるまで続き、私の人生観に大きな影響を与えた。幼い日の思い出を大切にされた為か、「泥流地帯」だけは読んでいなかったのだが、今回の企画で初めて手に取ることとなった。

小説の世界に引き込まれ、読了まであったという間であった。途中何度か涙がこぼれた。

「見返りも結果も求めることなく、人は人を愛

し、正しく生きていくことができるだろうか」

本書が問いたいのは、究極はそこなのではないだろうか。理不尽な境遇や運命、貧困、災害の中で、人はどう生きるか。その瞬間その瞬間の言動は、各自の選択に委ねられている。口先だけではなく、実際にどう行動にうつすか。誰かが見ているとか、報酬を貰えるから、見返りがあるなしではなく、思いやりを持って正しく生きることができ、人が最も強いのだと、上富良野町の人々に教えられた気がする。

泥流地帯には多くの人々が登場するが、皆それぞれに試練の中で懸命に生きていた。

苦しみや悲しみからも得られるものはある。過去の話になるが、私はこの世で最も愛する弟を自死という形で失った。弟はまだ大学生であった。その日から数年間、涙を流さない日はなく、言葉で言い表せない程辛い日々を過ごした。出口も見えず、どこまで続くのか分からないトンネルの中にいるような日々であった。しかし今振り返ると、たくさんのものを与えられた日々でもあった。目に見えるものもあれば、目に見えないものもあった。そしてそのどれもが、経験しなければ決して得られないものであった。あの苦しかった日々、今は感謝している。

人生で起きることに無意味なことは何一つなく、一つ一つの経験が、その人の魂を磨いていくと信じている。たくさんの試練が襲った日進部落の人々だけれど、彼らを通して今を生きる私達

が得られることはたくさんあると思う。

私達の人生は一冊の小説のようなもの。最初から最後まで平々凡々とした幸せが続く小説より、涙あり笑いあり、幸せもあれば試練失敗もある、そんな起伏に富んだ人生の方が遥かに価値がある。試練や涙の果てに得るものもあると、上富良野町の人々に教えられた夏だった。

香也子の泥流地帯訪問記

(ペンネーム) 神楽岡 マイ



私の名前は橋宮香也子。いまさら自己紹介するのもなんだかけど、旭川を舞台にした三浦綾子さんの著作「果て遠き丘」のヒロインとして、お茶の間の皆様にもすっかりおなじみかと思う。今回はその「果て遠き丘」と同時期に発表された「泥流地帯」の舞台となっている上富良野を、ぶらりひとり旅してみようと思ってる。別に友達がいなくて、いわけじゃなくて、「買物公園を歩けば誰もが振り返るような美女」ってよく言われるんだけど、そんな私もたまにはひとりになって考える時間が欲しいと思っただけ。もう一度念押しするけど、友達がいなくていいわいじゃないの。ここ大事。

出発は旭川空港から。ここ旭川空港は「果て遠き丘」にも何度か出てきたスポット。最近、空港の名前もいろいろあって、鳥取県なんか、鳥取空港が「鳥取砂丘コナン空港」、米子空港は「米子鬼太郎空港」なんて愛称がつけられていて、同様に「北海道のまん中・旭川空港」とさかれているらしい。「北海道のまん中」なんて表現、美瑛とか富良野とか芦別とか新得の皆さんに突っ込み入れられるような愛称よりも、すつきりと「旭川果て遠き丘空港」とか「旭川香也子空港」という愛称にしてもいいんじゃないかと思う。これをツイッターに書いたら、たぶん「いいねー」が10万ぐらいつくわね。そしてロンドンやパリから直行便が来ること間違いなし。

それはそれとして、話を先にすすめましょう。旭川空港から上富良野に向かうには、ハイヤーかバス。ハイヤーは私がいとも使う交通手段で、一度事情があつて市内中のハイヤー会社に片っ端から電話したこともあつたっけ。バスは旭川市内行のバスのほか、旭川と富良野を結ぶ「ラベンダー号」という路線が1日8往復あつて、時間が合えばこれがなかなかおすすめ。他には富良野線の千代ヶ岡駅まで5kmぐらい歩くという手もあるんだけど、そこまで富良野線に愛着もないし、たまたま江別市の大麻ドライブインスクールで取得した自動車免許を所持しているので、今日はレンタカーを借りてみました。

最近のレンタカーはナビもあつて超快適！縦に配置された信号機、除雪を考慮した広い路肩、その路肩の上に配置されている紅白の矢羽根。私も含めた北国に住む皆様にとつては当たり前前の景色でも、内地の人が見るとアドレナリン出まくりで、運転中も舞い上がってしまうそうです。そんなことを千葉在住の知り合いのおじさんが言っていた。舞い上がっても安全運転で。

富良野国道と呼ばれる国道237号線を南下し、最初に訪れたのは深山峠。ここは「続泥流地帯」で、遠足にきた耕作たち一行が十勝連峰や大雪山、「波打つ大地」と描かれた丘の起伏を眺めた生徒が、「すばらしいなあ！」と声をあげた場所。泥流地帯、続泥流地帯のなかでも個人的に一番心に残ったシーンの舞台です。当然、耕作たちが見た景色を期待して車を降りただけけど、この

日はあいにくの曇天。まあ、思っていたのと違う眺めでも、「現地を訪れて耕作と同じ空気を吸った」ということが大事な。深山峠からの良い眺めはたくさん撮影されていて、インターネットで検索すればたくさん出てくるけど、「曇天の深山峠」という写真はあまり見かけないでしょう？晴天の写真を100回見るより、曇天の現地に一度訪れることのほうが有意義かと思う。私のようなピュアハートを持っていけば、心の目にステキな山並みが見えるの。別に負け惜しみじゃない。

深山峠を下ればいよいよ上富良野市街。上富良野は「市」じゃなくて「町」なんですけど、それでも「市街」って表現でいいのかとか、そんなことを考えながら向かった先は某焼肉店。ここ上富良野は「豚サガリ」が有名なんだとか。豚サガリ？聞いたことなかったんだけど、横隔膜に近い部位を「サガリ」というらしいのね。肉と言えば神戸ビーフか〇尾ジンギスカンしか口にしない私が、「名物というからは余程美味しいんでしょね！」と、上富良野からの挑戦を受けて立つことにした。待つことが嫌いな私は、11時の開店と同時に入店し、秒速で豚サガリ＋牛カルビ定食のランチメニューを注文。なんと、カウンターの席でも七輪が準備されていたのはびっくり！それほど待つこともなく提供された豚サガリを箸にとり、七輪の上に乗せる。じつくり焼き上げてからいただく。いやあ、驚きましたね。口にした瞬間、お口の中で醤油ダレとあふれる肉汁がこんには。程よく柔らかく、しかし噛み応えもある肉は一切れだけでも満足感ハンパない。二切れ目は焼けたお

肉を醬油ダレ経由でごはんの上にオンザライド。美味い！ 美味すぎる！ ああ、これ、海原雄山（マンガ「美味しんぼ」）に食べさせてあげたいわ。一緒に提供された牛カルビももちろん美味しかったのですが、豚サガリの満足感が圧倒的に上でした。拓一が根気強く開拓したここ上富良野で、こんな美味しいものを食べられるとは、感無量であります。ありがとう、拓一。ありがとう、市三郎おじいちゃん。

美味しい焼肉の満足感を引きずりながら、次に向かったのは上富良野町郷土館。この日は行ってみると入口に鍵がかかっている。「入館希望の方はインターホンで」と書いてある。呼び出してみると、小雨降るなかをナイスミドルがやってきて早速入館。入口を入ると大きなクマの剥製がお出迎え。このクマさん、本物なんだとか。展示室は1階と2階にわかれていて、2階に泥流地帯の題材にもなった大正15年に発生した十勝岳噴火の記録がありました。この展示がまたすごい。泥流でぐにやりと曲がってしまった富良野線の線路がそのまま展示してあるのです。泥流でここまで曲がるの？ と驚いたのなんの。また、当時の記録映像も見ることができました。個人的には、救援として入ってきた富良野線列車の客車がダブルルーフの車両だったことが印象的。古い車両もかき集めて救援に来たんだなあ実感しました。鉄オタは必見です。あと、日新小学校の屋根裏に保存されていたという、在校生の犠牲者が書かれた木版が展示されていました。日新小学校！ 泥流地帯の登場人物が卒業したあの日新小学校です

よ！ 学校は被災後に再建されたそうだけど、こうしてずっと大事に保管されていたんですね。他にも、入植当時に使われていた日用品や用具の展示が充実していました。1階には近辺で発掘された土器などが展示されていました。土器を見るとドキドキしますね！ 帰りがけ、ナイスミドル氏とお話した際「ジオパークに認定されたので、もう少し立派な建物でお迎えしたい」というなことをおっしゃっていたんだけど、ガワより中身だと思っただけです。観光に来られる方や泥流地帯を読んだ方は、ぜひ訪れてもらいたいと思います。入館料は無料。本当に無料でいいの？ ここ。

前述した郷土館のナイスミドルのおすすめで、お隣にある上富良野町立図書館ふれんども訪問してみることにしました。「ふれんど」までが施設名なのね。「ふれんど」、あまり私にはなじみのない言葉ね。複数形の「ふれんず」だったら、よく聞くけどね。あ、これ、レベッカの名曲ね。また話がそれちゃったので元に戻しますが、このふれんど、入ってみてびっくり！ まず、三浦綾子著作の多さ。さすが、ミウラー認定を主催しているだけあるわね。「ミウラー」っていうのは、三浦綾子作品が描かれたチェックシートの結果によって、認定バッジがもらえるという仕組み。私はシルバームィウラーでした。棚一本まるまる三浦綾子作品とか、三浦綾子記念文学館の図書コーナーほどではないにしろ、これ、いつでも好きな作品読めるじゃん。私の「果て遠き丘」も3冊ほどあったから、3人同時に読めちゃう！ 果て丘を3冊も所蔵

している図書館、他にある？ 加えて、北海道の歴史関連の図書の多さに大満足。もうね、ハートにストライクな本が多々あって、「住みたい。ここに住みたい」と心底思いました。受付のおねえさん（私ぐらいの美女）も親切だったなあ。お子様向けの図書も充実していて、訪問した日もお母さんに連れられたお子様たちが本を借りていましたね。いつか「果て遠き丘」も読んでね。

図書館を後にして次に向かったのは上富良野開拓記念館。ここは被災当時に村長をされていた吉田貞次郎氏の住宅が復元されていて、館内には開拓にかかわる資料が展示されているらしい。「らしい」としたのは、私が入っていないから。この記念館の開館期間は5月から10月で、訪れたのは4月下旬。残念、本当に残念。フランスのロンドン競馬場で行われた2012年凱旋門賞のオルフェールと同じぐらい残念。きつと中には大変勉強になる資料がそろっていることだと思う。記念館のそばにはピカピカに磨かれた「泥流地帯の碑」があつて、なるほど、ここが舞台なんだと実感できます。

お次は「富良野平原開拓発祥之地」へ。ここは富良野線の車窓から何度か見たんだけど、訪れるのは初めて。広大な畑の片隅に大きな看板が立っているだけの場所、と思いきや、近くに寄ってみると「憩の楡」と書かれた石碑がある。楡？ 楡って、あの三重団体が入植当時に野宿をしていたという、あの楡の木があった場所？ そういえば郷土館に、楡の木で休んでいる人たちのリアルな展示がされていたっけ。あれがここだったのです

か！ここから頑張って開拓してくれたおかげで「泥流地帯」ができたのですね。過剰な説明がされていない分、なんとというか時代をさかのぼった想像を膨らませることができました。「泥流地帯」を読んでいなければ、ここまで思うことなかっただろうな。ありがとう、泥流地帯。ありがとう、青(馬)。

最後に訪れたのは、少し離れた場所にある日新尋常小学校跡地。しばらく人家のない道をナビに沿ってすすみ、「ここ？ここに小学校があったの？」と思えるような静かな場所にありました。「泥流地帯」を読んで、一番訪れてみたかった場所がここ。看板がなければ跡地とも気づきません。目に入るのは林と土と草木と未舗装の道路、そして頼りなきような細い電信柱。近くには小さな川が流れていました。大正時代からこの川はあったんでしょうか？この川には橋が架かっていて、コンクリート橋かと思いきや、橋げたが木製であることに気がつきました。かなり古くから架かっている橋なのでしょう。子供たちの声はもちろん、人の気配さえしないこの跡地にしばらく佇んでいました。

旭川空港から飛行機に乗りますと、運が良ければ左手に上富良野の町が眼下に一望できます。郷土館の展示パネルで泥流被害にあった場所を知っていましたが、実際にこの目で見てみると、その広範囲さに驚きます。それと同時に、この広い場所を開拓したということ、泥流の被害を乗り越えて、二度目の開拓があったことを感じました。

この「泥流地帯」を読んだ方はたくさんいらっしゃると思いますけど、もちろん読んだだけでも大変面白く、感動し、学ぶことも多いのですが、読んだ後にぜひ上富良野を訪問していただきたい。そして作品の舞台を五感で感じたあと、もう一度読み直していただきたい。同じ作品で二度感動できること間違いありません。ぜひぜひ、この楽しみ方をおすすめしたいと思います。

あ、いま気がついたんですけど「果て遠き丘」との差はここなのか！感動要素ないもんなあ、果て丘。義経鍋とか、三浦綾子記念文学館の氷点ラウンジで味わえる香也子のパウンドケーキ(商品名は「くるみたっぷりパウンドケーキ」といったグルメ要素や、サスペンス要素なら負けてないし、なんならこちらはドラマ化されてるんだけど、「泥流地帯」の圧倒的感動要素が強すぎ。そりゃ映画化も決まるわ。「泥流地帯」は上富良野町が全面的にバックアップしてるのに対し、旭川市は果て丘よりも「氷点」推しだもんね。「氷点」連載当時、「(氷点の)陽子ちゃんを救ってあげて！」という投書がたくさんあったそうだけど、「(果て遠き丘の)香也子ちゃんを救ってあげて！」という投書は一通でもあったのかしら。こんど三浦綾子記念文学館で聞いてみるとしますか。「泥流地帯」と果て丘、どうしてここまで差がついたのか」という研究、どなたかやってみませんか？

(完)

生きるということ

(ペンネーム) 山有正



今、富良野や美瑛を表す形容詞は「美しい」以外にはなかなか出てこないでしょう。「北の国から」では、美しさだけではなく自然の厳しさも伝えようとしていましたが、それでもやはり美しい季節の流れと大地の魅力が心を占有してしまっています。

この美しい土地が大泥流に埋め尽くされた歴史を知っている人はそれほど多くはないのかもしれませんが、遅れてやってきた開拓民が最大の困難のちによりやく拓いた十勝山麓の土地を一瞬間のうちに呑み込んだ大正泥流。大自然の力は不条理なほど大きかったといえますが、よく考えれば人が住む土地の多くは、泥流や土石流、洪水の氾濫などによって運ばれた土砂で造られているわけなので、私たちの生活はつかの間の安寧の時期に営まれているに過ぎないと気が付いた方がよさそうです。

もちろん耕作たちはそんなことは知らないのですが、拓一は復興を決心した時にその自然の輪廻に思い至ったようです。しかし、拓一や福子の苦難は大自然の不条理に遭遇してしまっただけではなく、時代の不条理にも翻弄されたものといえそうです。現在の日本では人は(基本的に)平等に認められ、人権も尊重されていますが、少し前の日本では現在とは違う価値観で社会が形成されていて、そうではなくなったのは敗戦という偶然によるものだったのかもしれない。日本人は現在の日本の価値観の方が拓一たちの時代の

ものよりも絶対的に良いと感じるに違いないのですが、世界の半分以上の国はそうなっていないという現実、今の日本人が当然のこととして享受している自由な生活はそれほど確固たる安定性を持っているものではないのではないかと疑わせます。

「泥流地帯」「続泥流地帯」は、人が生きている基盤は不条理と隣り合わせの不安定なものであることを思い起こさせてくれます。不条理を背負って生きざるを得ないとき、耕作のように世の中は「善因善果・悪因悪果」に創られているわけではないと達観することは、心が折れてしまいそうなきに大きな助けになりそうです。このようなものは宗教の役割に属するのでしょうか、「悪因悪果」を持ち込むことで弱っている人を引き込もうとするのは本当の宗教の形ではないとも言いがててくれているようです。この小説は、人はありとあらゆる「人・もの・こと」のつながりの中で生かされているのであり、そのバランスの中で自分が必要な役割を見つけることが生きることである、と教えてくれているようです。



石村拓一。

のちに上富良野を襲った未曾有の大災害から復興を成し遂げる人物であるが、そこへと至る彼なりの道は、何も見えない「暗闇」から始まる。

拓一は明治の世、北海道上富良野町にある開拓農家、石村家の長男として生を受けた。

拓一は生まれついた時から、土に馴染み山を駆け回り馬と遊び、まさに開拓者が紡いできた命そのものであった。誕生して早12歳。健やかに育ち家の仕事も手伝う立派な男児となった。

そんな拓一には苦手なものがある。夜の暗闇だ。家の便所は外にあった。拓一は夜中便所へ行く為に、闇の中をビクビクと警戒しながらそと進む。遠くに小さな灯火が見えれば狐火ではないかとギョツとして体が固まってしまう。

また、暗いところに一人していると不思議なことに父の顔がうすぼんやりと見えるような気がするのだ。

亡き父の顔はもう正確には思い出せない。だから父の顔が見えるはずなどない。それなのに何故だろう、こんな闇の中に想像してしまうなんて、と拓一を悩ませた。とにかく真つ暗闇を進むのは彼にとつて、とても恐ろしい事であった。

父がこの世から去ったのはもう4年も前のことになる。ある日の夕方だった。

拓一はじめ兄弟の子供らだけが残されていた家の外が妙に騒がしい。子供らが不審に感じたその時。

「ガラツ」

土間の戸が開いて祖父の市三郎が入ってくる。子どもらは驚いて戸のほうを見た。

「拓一、ちょっと来い」

市三郎が小声で呼んだ。拓一はただならぬ雰囲気を感じ取り大人しく市三郎に従った。そして二人はひと気のない場所まで立ち止まった。

背を向けていた市三郎が振り返り拓一の肩をがっしりと掴む。

「な、なんだべ：じつちゃん：」

「拓一、お前は一番兄ちゃんだ。石村の長男だ。だから最初にお前だけには言う」

「：うん」

拓一はいつに無く真剣な顔つきの市三郎に気圧され、生唾を飲む。

「あんな、拓一。落ち着いて聞け。お前の父さんな、造材の仕事で木の下敷きになっちゃった」

「!？」

「それでな、みんなで助けようとしたけど、間に合わなかった」

「…え？」

間に合わなかった、その言葉で拓一は子どもながらに何かを悟った。市三郎は拓一の不安をまさに現実の言葉にしようとしている。言わないでくれと願うと同時に心臓が早鐘を打つ。無言のま

まお互いに目が潤む、そして市三郎が開き震える声で告げた。

「死んじゃったんだ」

まさに青天の霹靂であった。

慌ただしく通夜が行われ父は共同墓地の焼場へ送られる。子どもたちは呆然と見ていることしか出来なかった。

それからというものの、家中がやけにしんみりとしてしまい、特に母・佐枝は笑顔をあまり見せないようになった。拓一は母の胸中を察した。

幼くとも拓一にはどうやら父はもう居ないという事は理解できた、そしてこの世から人間を奪い去る「死」というものに漠然と初めて恐怖と疑念を抱いた。

拓一はある日の夕食後、市三郎にそつと問いかけたことがある。市三郎はストープのそばで小刀のさやをマキリで削っていた。

「なあ、じつちゃん…」

「なんだ、拓一」

「父さんはなんで死んだべ」

市三郎がゆっくり振り返り拓一を見る。

「何でって…事故さ」

「危ない仕事だったんだべ、造材なんて…」

しなれば良かった、と言いかけてやめた。聡い拓一はその稼ぎで今まで食べてきたことを理解していたからだ。市三郎はジッと拓一の目を見て言った。

「父ちゃんは畑に居たほうがよがったってか？」

「そんなこと…でも父さん居なくなつて皆元氣無いつもん、俺も…。それに死ぬって怖いべ。父さんはかわいそうだ。なんで父さんだけ死なないといけ

ないんだ」

「…拓一」

「だつてさ…父さんはもう何もできないべ、食べたリ、寝たり…好きなこと何もできん」

市三郎は少し考えてから言った。

「そりゃあ食べたリ寝たりはできね。んだば、おめの父さんはもつと違つて事を考えて生きてきただろさ」

「？」

「父さんが今まで何をしてきたか、考えてみれ。何も意味の無い事をしてきたと思うか？」

「…」

「食べる、寝る、それが父さんのしたかった事だと思うか？」

「…うーん…。分からん」

拓一は眉間にシワを寄せて考え込んだ。

「そうか。ま、だからって義平が犠牲になつていいつちゆう話じゃねえ。でもなあ、あいつが残していったものは誰かが守らんといいかん」

「残したもの？」

拓一は顔を見上げた。祖父はそんな拓一を見て目を細めた。

「そうさ、そうでないと無念だ」

「？」

拓一は市三郎の言う意味がわからずきよとんとした。

「…ふ、拓一にはまだ難しかったか、はっはっ…」

そう言つて祖父はまたストープに向かい直した。

(父さんのしたかったこと…?)

拓一は釈然としないままであつた。が、しかしその時の市三郎の言葉は何故だかとても印象的

だつた。

その後、父の居ない生活が日常となりなんとかやつていけるようになった頃。

今度は母・佐枝が子どもたちを残し単身髪結い修行の為に家を出ていつてしまったのだ。幼い子どもたちにとっては父に次ぎ母までも居なくなる事は耐え難い事であつた。

(母さんまで…！)

拓一は悲嘆に暮れた。だが当時10歳になつてた拓一には現実を直視する力も既に備わつていた。家に残されたのは年老いた大人と泣きべそをかき子ども4人である。年上の姉も居たが男手が足りない。先の生活を想像すると、拓一には不安が募つた。

(俺がしつかりせねばいかん)

拓一は、いつか母が帰るまで家を守るという事を強く意識するようになった。

それからは祖父母とともに暮らし、母の帰りをひたすらに待った。幸い一家は息災ではあつたが、非情にも母は戻らぬまま歳月は過ぎていった。

—

(母さんに早く会いたいなあ…)

夜、便所から帰つて眠りにつきながら、拓一はなんとなく母のことを思い出す。家の働き手になつたと言つてもまだ父や母に甘えたい年頃であつた。

また、父もおらず母も去つた事で、心無いことを言う大人がとたま居た。

その一人に深城という者がいる。友人らとヤマ

ブドウを採取しに山へ入った際に初めて出会ったのだ。

山中でヤマブドウの所有を巡って深城と口論となり、弟の耕作が居合わせた深城の娘に怪我を負わせてしまった為に深城を激昂させた。そうして深城は石村家に怒鳴り込んできた。家では市三郎が娘の手当をしてやり、怪我をさせた弟の耕作も素直に謝罪をしたが深城の怒りは収まらない。

その時の市三郎と深城のやり取りを見て、拓一は驚いた。

市街では有名な料亭の主人らしいが、その振舞いは、農家を馬鹿にし、人の弱みにつけ込み、自分以外はどんなに良い、自分の為すことは全て正しい、まるで独裁者のようであった。

(店の主人で偉くて…家もきつと金持ちだろうに…)

この深城という人間は一体何なのだろう。

生きてゆくのに精一杯の小作農暮らしをしている拓一にとっては、生まれて初めて触れた人間の強烈な我欲であった。

その夜、家では「人間の偉さの尺度」という事が話題になった。やはり、深城のように金や物を沢山所有していることや、権力を持っていることが人間の偉さを決めるのか…家族でそう話したが市三郎はそれを否定した。そして家族の前で「サルカニ合戦」の話の話を聞かせた。

祖父は家族へ問う。

「おにぎりと柿の種落ちていたらどちらを拾うか？」

拓一はすかさず答えた。

「にぎり飯だ」

すると市三郎は「目に見えるものが欲しくなるのが人間だ」と説明する。柿の種には見えない命がある、なぜなら成長すれば木になってまた実がなるからだと言った。

拓一はそこで気づく。

(あれ?じゃあにぎり飯が欲しい俺はあのフカギという奴と同じという事なのか。そんな訳あんめえ…)

認めたくはなかった。

(でも…もしも死ぬほど腹が減っていたら…どうする)

拓一はひと晩中考えても答えを出せなかった。

季節は流れ、父母が不在のまま幾年も経った。

拓一は高等科へ進み冬になると造材の仕事も始めた。

亡き父のあとを継ぎたい、そんな気持ちも無くはないが耕作と比べて学には弱い自分のやれる事を選んだ。曾山家の長男である国男も一緒の現場で働く事が多かった。

拓一は国男としばしば雑談をする。拓一には最近思う事があり、ふと国男に聞いてみた。

「なー、国ちゃんさあ」

「なんだべ、拓ちゃん」

「俺達さあ、木い運んでさ、手当もらってさ、ずっとそれで良いんかな」

「何言ってる。家の為にやらんといかん」

「うん…国ちゃんの言う通りだ。この仕事も嫌じゃないんだ。でも目の前の手当の為に働くのって

さ、なんか先が見えないっていうかき…」
「ふうん。俺んちは食べていかんとならん。手当があれば当分は食べていけっぞ」

国男は何でもないというような顔で言う。

「…だべな。みんな食うので精一杯だもん…うん、今はこいつを頑張らにや」

「そうだべっ」

国男はヨツと木の運搬の為に体に入力を入れる。

—それが父さんのしたかった事だと思うか？

昔、市三郎に言われた言葉が突如脳裏に蘇る。

食う為に。それで人生が終わるのだろうか。拓一は仕事をしながら先程の続きを一人考えた。

市三郎は東北からまだ何も無い北海道に渡り、原始林を切り拓き苦労して人の住める土地を作ったと聞いた。拓一は実際に造材の仕事をして、初めて木を切り出す作業の大変さを知った。しかし、開拓における林野の開墾の大変さは恐らくこの比ではなかっただろう。

そして父・義平は、この土地に生まれ育ち、人々の生活を守りこの土地に暮らし根付かせた。

拓一は山で兄弟や友人と全力で遊んだ事、畑で獲れた作物の味、雄大な自然を相手に毎日を暮らしてきた事を思い出す。

思い返せば上富良野のどれもが、自分を形作ったものだった。そして、そのどれもが開拓者達の苦勞や希望と切り離せないものであった。

普段祖父父母が開拓の苦勞をあげっぴろげに話すことはない故、拓一は開拓の具体的な話はある

まり知らない。しかし祖父母を始め、自分の知らない開拓民達やその次世代の者と共に切り拓いて守ってきた土地が自分を育ててくれたと思うと、ただ生きる糧を得るのに精一杯の自分に違和感を覚えるのだった。

金の亡者かのごとく深城の姿が目にもちらつく。

(…とにかく俺が働かなばいかん)

拓一は気がそぞろになっていつの間にか突っ立っていた。

「そこ、手止まってるぞー」

監督者の声が飛ぶ。拓一は慌てて走り出す。

(しかしこれでいいのだろうか。自分はこれから何をしたら良いのだろうか)

拓一は内心、家計と将来への焦りで揺れていた。

造材の仕事には様々な人が集まってきていた。

大金を得ようと無茶な働き方をして命を落とす者、出稼ぎに来たはいいものの怪我をして出戻る者、給金を全て遊びにつき込んでしまう者…。

時々拓一に「サボらないか」と持ちかけてくるような輩もいた。

拓一はこういつた大人達を見ていて、市三郎の言葉を常々思い出していた。「人間は目に見えるものが欲しい」と。

自分の為、目の前の事しか考えられなくなる者が少なからず居ることを目の当たりにした。

しかしそのような者ばかりでないことも知った。気配りが上手な者、後輩を気にかけてくれる者、他の者がやりたがらない事を率先して行う者…。

果たして自分はどっち側の人間だろうか。

拓一は密かに前者を嫌悪し、後者のような人間

でありたいと願った。

だが金は必要だ。

何しろ自分が大黒柱として働く事に家族の生活がかかっているのだ。それはただ目の前の事しか考えられていない、という事なのだろうか。

拓一には自分という人間が分からなくなっていた。それはまるで夜の帳が下りるように自身の姿も見えなくしていった。

—それから。

不作為。どうしても食べ物や市街で購入する事に頼らざるをえない年があった。

村の農家の大人たちはこの年をどう乗り切るか、毎日難しい顔をしていた。石村家もまた、例外ではない。

拓一は相変わらず造材の仕事を続けていたが、なんとか収入を増やせないか悩んでいた。一番下の妹の良子はまだ小さい。しっかりと食べさせてやらねば…。拓一は自分の出来る事なら何でもしたいと思っていたが、まだ若く経験も浅い為

にすぐ収入に繋がるような話は何処にも無く、ひとり途方に暮れていた。

そんな時であった。運搬した木を横流ししたほうが儲かると、顔見知りの者に持ちかけられたのだ。それを手伝えれば分け前をくれてやるという話だった。

(これはズルだ！ やっちゃいけない)

頭ではそう分かっていた。が、拓一は理性に反し何の言葉も出てこなかった。迷ったのだ。

(断るんだ！)

家族の痩せた顔が、貧しい食事が目に浮かぶ。

(目の前のものが欲しくなるのが人間…)

拓一は黙り込んだ。

「なんだあ？ おめがやらのなら他のやつだっていいんだぞ。早く決めろ」

「…ま、待ってください！」

より多く金を手に入れる事は家族を、親族を救う為だ。自分にそう言い聞かせた。結局その話に加担してしまった…。

「ほうら、おまえの取り分だ」

拓一にはなんの達成感も無かった。不安と後悔で心がぐちゃぐちゃになってしまった。

(これでいいのか、これでみんなが喜んでくれるのか…)

拓一の手は震えた。

家に帰りこっそり市三郎へ臨時の手当てが出たと言つて金を渡した。

祖父はすぐさま何かを悟つて声を荒げた。

「拓一！」

普段穏やかな物言いの市三郎が拓一に厳しく問う。

「こんな事ばあして…わしらと義平がしてきた事が分からんか！」

拓一にとっては己の正しさが打ち砕かれたように感じた。拓一は胸の内を暴露した。

「父さんは造材で死んでしまった、死んだらお金が無意味だ、意味が無い！ 家族のためを思ってやったことなんだ、何がいけないんだ！」

「死んだら稼げない？ 無意味だどう？ おめ、いつからそんなこと考えるようになった！ 頭ばあ

冷やしてこい!!」

(…分かってもらえないのか!)

拓一は悔しくて堪らない筈なのにそのまま何も言わずに家を飛び出した。

(分かってる、俺は悪い事をしたんだ…でも!)

それで褒めてもらえれば拓一は救われる気がしていた。だが拓一にはそれが正しい結果なのか分からない、暗闇の底にいるような気持ちであった。行くあてもなく、ただただ自身のやりきれなさを鎮める為歩き続けた。

数時間かブラブラとしただろうか。座り込んでいると道の向こうから田谷のおどと修平叔父がやって来た。

「おおい。聞いたぞオ、拓一」

「拓ちゃん、つらかったべなあ。ちよつと一緒に来んか」

(もう広まってるのか…)

拓一は観念したように素直に2人の大人のあとをついていった。黙々と歩くとそこは深山峠であった。田谷のおどは気持ち良さそうに息を吸う。

「きれいだあ!」

深山峠から見渡す上富良野は美しかった、大雪山連峰に抱かれた大地。拓一の大好きな上富良野の景色だ。拓一は一瞬、今日あった事を忘れた。

その時修平が誇らしげに言う。

「これはじつちやまが拓いて父さんが守ってきた場所だべ」

景色に見とれていた拓一はハツとして修平を見た。

「…じつちやと父さんが…」

「そうだ。大変だったんだぞう。俺が小さい頃は、

畑耕しても耕しても今より実りが悪くてな」

「んだ、わやだあ。よおく今までやってきたア」

「みんなで助け合ってよ、どうにかやってこれたんだべなあ」

田谷のおども交じって思い出話に花が咲く。

拓一はその会話を一人ジツと聞いていた。会話のはしりから、自分の知らない歴史や思いが眼前の景色に込められていると感じた…。

すると拓一は段々、人々と汗と涙の染み込んだ上富良野の土地が、自分を見つめているような気がしてきた。急に自分の行いがあまりに愚かに思えて拓一は恐ろしくなり気持ちを吐露し始めた。

「おじさん…俺、本当に悪い事したと思ってるよ…でも、俺どうしたらいいか分からないんだ。俺が頑張らにやいけないの…俺が金を持ってこないとみんな食べてかれん。だから…こんな、しやうもないことしてしまった」

拓一はいつの間にも涙声になっていたが、大人2人はそれを静かに聞いていた。

「俺は自分が恐ろしい、目の前のうまい話に飛びついてしまった」

拓一は遂に涙をぼろぼろと流し始めた。

田谷のおどはしゃがんで拓一と視線を合わせた。

「拓ちゃんば、父さん母さん居なくなつてよ、本当に大変だったな。そこにこの不作よ。みんながどうしていいか分からない」

「一人で抱えこんだのか。俺たちが追いつめてしまったか」

拓一は頭を小さく左右に振りつつ呟く。

「…俺は、深城と同じかな」

田谷のおどと修平は驚いて顔を見合わせた。

「俺が…本当は深城みたいな人間だからこんなことを!」

拓一は最も恐れていることを吐き出した。しかし田谷のおどは呆れた顔をして、

「なに言つちよるか。拓ちゃんのこと、子どもの頃からよう知つとるよ。優しくって、人の気持ちの分かる子だア。今回だつて、じつちややばつちやにラクさせたかつたんだろ。耕ちゃん達におまんま食べさせたかつたんだろ」

そう言った。おどは真剣な声色で続ける。

「これだけは言つとくがな、それは決して深城とおんなしじゃないぞお」

修平もあとに続ける。

「みんな誰だつてよ、何かしら欲はあるんだ。開拓だつて、貧しくって自分の土地が欲しいからした事なんだ。でも大事なのはこの土地をどう使うかよ、間違えてんのが深城みたいなことよ」

「だべなあ。欲があるのは悪いこととは言えん、でもそれを叶えるやり方を間違えたらいかん。例えば木材を横取りしたら誰かが困る。誰かがおまんま食べられなくなるかもしれないね。どう思う?」

田谷のおどは拓一に問うた。拓一は即答した。

「そんなのは絶対にだめだ!」

「ほうら、やっぱり拓ちゃんだべな」

おどは拓一の真つ直ぐな目を見てニコツと笑う。「そんなの深城とおんなしなわけアなかんべ。あいつあ、自分さえ良ければ良いと思つたら」

修平はケツと吐き捨てるように宣うた。

おどは拓一に神妙に向き合った。

「拓ちゃん、よく聞けな。ズルしたことはよおく謝れ。間違つて手に入れたお金も返すんだ。しばらく仕事はさせてもらえんかもしれん。でも真面目に生きてる姿は誰かがきつと見てるからな」

修平が付け加える。

「んだな。これあ、俺たち大人が背負わせちまった責任もあるしよ。お前だけが責められる話でもない」

拓一はそれを聞いて心の苦しきから段々と解放されるのを感じた。

(誰にでも欲はある…。でも俺はその上で真面目に生きたい)

許されるのならおどの言う通りにしようと思つた。

「じつちは…自分と父さんのしてきた事忘れたのかって俺を叱ったよ」

「？」

「それは、じつちやと父さんが真面目に生きてきた事を蔑ろにしたからかな」

おどと修平は二人ともすぐに合点がいったように「ああ…」という表情をした。

「親父は普段昔のことは言わんからなあ」

修平はクツクツと笑いを堪えるように言う。「ま、じつちやまも義平さんも苦労をしたからなあ。本当は子どもらに苦労かけたく無いんだろウキ」

「子どもらには苦労をかけずに、自分らの作った土地でのびのびおがっつてもらつてよ、日進を好きになつてほしいんだへ」

拓一は初めて市三郎らの胸の内を聞いたよう

な気持ちになった。

(そんな風に思つてたのか…)

拓一はまだ幼かった頃を思い出す。

—

「兄ちゃん」

「なんだ、耕作う」

小さい耕作がおぼつかない足取りで兄のあとを追つて野原を歩いてくる。

「おぶつてよお」

「しつかたないなあ耕作はあ」

兄としての面倒見も良く、甘える耕作に拓一はしゃがんで背を向けておぶつてやった。

拓一は歌を歌つてやる。

「かーらすないたーかーえーろー…」

「かーかーかー」

続いて耕作が歌う。

「なんだ、歌う元氣あるのか」

「へへ…」

「甘えただなあ耕作は」

「兄ちゃんはぬくいなあ」

耕作がギュッと抱き付く。

「ちゃんと掴まれよ。さーて、今夜のおかずなんだべなあ…」

「そうだなア…」

2人は土間で母の佐枝が煮炊きをしている姿を想像した。

帰れば母が温かく迎えてくれる、そして祖父母や父に今日の出来事を披露するのだ。拓一にはそれが楽しみで仕方ない。

(こんな日がずっと続けば良いな)

拓一はそう思いながら耕作とともに家路についてた。

—

(俺はあんな日々が大好きだった)

拓一は再び己の目の上富良野の景色に目をやり、その目にしっかりと焼き付けて田谷のおど達と帰宅した。真つ先に市三郎へ神妙に過ちを認めて、正直に今回の事を謝つた。

それからというもの、拓一は真面目によく働き、同僚や家族のためによく尽くした。

耕作は進学を断念したが家計を助けつつ勉学に勤しんだ。

市三郎は無償で人の為に薬を提供したり、相談事を受けたりした。

姉は祖母を助け、家を切り盛りし、そして嫁いでいった。

良子は貧しい暮らしの中でも明るさを絶やさなかった。

家族だけではない、村には見守つてくれる大人がたくさん居た。

(よおく見れば、みんなこんなにも親切で一生懸命だ…)

拓一はこの小さな生活の中に、人のあたたかさを感じた。何をして生きれば良いか迷い真つ暗だつた心の中に少しずつぬくもりが宿つた。(そうか、俺はこれを守っていきたいんだ…)

その矢先である。

十勝岳の大噴火。大規模な山津波が拓一の暮らしたを奪い去った。人が、家が、土が、何もかもが流されてゆく。耕作と二人、信じられない光景を見た。

そしてその瞬間、咄嗟に家族の救助に向かったが自身も濁流に飲み込まれ、自分だけ生き残ってしまった。

一旦は失意の底にいた。この土地はもうおしまいだと誰も彼もが囁いた。土地から離れる者も多かった。それは賢明な判断だ。土が燃える、それを見たら誰だって絶望しか感じないだろう。

しかし拓一は塞ぎ込んだままではいられなかった。深山峠から見た景色と、この土地で過ごした時間や人々の事が次々と思い出された。

(ここで断ち切っているのか)

みんなが努力して開拓して保ってきたこの村は拓一にとっては自分の存在そのものである。この土地を諦めるということは、何もかも過去がなかったことになるのだ。自分は生きていても心の一部が消えるようなものだ。あまりに無念だ。

(誰かが守らなくては…)

図らずも、かつて父が亡くなった際、市三郎がこぼした一言と同じ想いを胸に抱いた。

拓一は復興を志した。

そしてこの時ようやく気づきを得た。自分がやらなくてはいけないのは、自分が食べて暮らしていく事ではない。育てるのだ、たとえ一からでもこの土地を。

(この土地に生きた全ての命を無かった事になん

てするものか)

しかしそれは予想以上に苦勞の連続であり、拓一自身にもこれが正しい道なのか分からなかった。ただ不思議なことに、心の暗闇の中にうつすらと灯火がポツポツと灯り始めたような感覚があった。

(この灯火はなんだ?)

拓一は子どもの頃に恐怖した闇を思い出す。

(でも…あの時とは全然違う)

拓一はこの暗闇がいつか晴れる日が来ると信じてきた。夜ならば夜は明ける。しかし心は一向に闇のままであった。

その代わり、小さな灯火がいくつも宿り始めた。

拓一は、それは命の輝きなのかもしれないと感じた。これまで拓一と共に過ごした大切な人々の、動物の、植物の命の灯火。

(この中に、じつちやや父さんの火もあるだろうか)

拓一はそれを道標に歩んだ。まるで導かれるように。それでも復興は殆どの者が危ぶむ厳しい道のりであったし、自身もまた迷いながら苦しみながら歩むしかなかった。

しかし幼なじみの福子は言った。

百年後、二百年後の人が、拓一の今の苦勞によつて、おいしいお米が食べられると。

拓一はその言葉で救われた。自分もまた、次世の人々の幸せの為に苦勞が出来る。これはきつと良い未来へと繋がる苦勞だと確信できた。

福子の存在は、拓一の心にとつとりわけ明るく光であった。

「もうすぐ収穫だね、兄ちゃん」

「うん」

オレンジ色に輝く夕陽を受けた耕作と拓一は眼前の豊かな光景を見つめていた。

もう何度この季節が巡っただろう、稲は今年も順調に育ち実をつけた。

(本当に奇跡のようだ…)

拓一はこの美田を見るたびにそう思わずにいられない。

泥を被ったこの地で稲作が成功するかどうか自分でも半信半疑であった。どうなるか分からない復興への投資が反感を呼び、嫌がらせをする者も多く居た。しかし復興に協力を惜しまない者も実際に居た。吉田村長や青年団の者たち、兄弟や友人…また、災害後に帰着して静かな目で見守ってくれた母。

そんな中で愚直に農と向き合つて生きてきた結果、米が実り…ありがたいことに暮らしむきも安定した。

「なあ耕作、子どもの頃じつちやがサルカ二合戦の話してくれた時のこと、覚えてつか?」

「ああ、そんなこともあったべなあ…」

「おめ、あの時にぎりめしと柿の種、どっちが欲しいと思った?」

耕作はちよつと言ひ淀んで答えた。

「…にぎりめし」

「はははっ、だべなあ…」

実は耕作も、亡き祖父が言っていた事をずっと忘れてはいなかった。

「兄ちゃん、俺あの話を覚えていたはずなんだけ

どき…いつの間にか自分は周りに流されていたよ
うな気がする。この田んぼだつて…最初はまた農
家をやるうなんて思えなかった。でも兄ちゃんは
違った。じつちやの話、すっかり覚えてたんだね？」

「そんなわけあんめえ。耕作の頭じゃあるまいし」
「えっ」

「じつちやの話を覚えていたから、土地を復活さ
せようとしたわけじゃない。ただ、種もおがれば
木になって実をつけるって、こういう事だったん
だなあつてよく思うんだ」

（そして実つたものは、米だけじゃない。俺の中に
はたくさんの灯火がともったんだ）

日が沈み、あたりには濃紺のカーテンが広がり
つつある。いつの間にかリーリーと虫の音が盛ん
に遠くから聴こえる。拓一は秋の音を感じなが
ら呟く。

「暗くなつてきたな…帰るべ」

「…うん。そろそろなんも見えなくなるなあ」

二人は並んで帰路についた。あたりには一気に
暗がりが出る。

拓一は雲の無い夜空を見上げながら言う。

「電灯も結局無いからなあ…ここははずっと暗い
まんまだ。それに比べて市街は明るい…東京なん
て昼間みたいに明るいんだろうなあ」

「そしてみたいだね」

「でも俺は思ったよ。どんなに電灯が明るくても、
人の心の中まで照らせない」

「…」

耕作は拓一の言葉に耳を傾けた。

「生きてるのは暗闇の中を歩いてるみたいなもの
だな。先がどうなるかも、何をすれば正しいのか

何も見えん。稲も…初めて粃蒔きした時はダメ
になったもんな」

「うん…」

耕作はあの年、拓一が自分をかばつて足に怪我
と後遺症を負つたことを思い出した。

「でも、不思議な事にな、くらーい中に時々いい
光が見えてな、それを頼りに探り探り歩くん
だ。そんで…歩くしかない」

「…」

「でな、それを辿つていけば現実でこんなに良い
景色が見られるんだなあ…つて…。はは、あとか
らじゃなんでも言えるべな」

拓一は照れくさそうに笑つた。しかし耕作は目
を丸くして真面目に聞き返す。

「ちいこい光つて…兄ちゃんにはそんなものが見
えてるのか？」

「見えるというかなあ…自然と感じるのさ。誰か
が俺の心の中を照らしてくれるんだ。俺はな、耕
作。真面目に生きたい。でも俺一人じゃどうして
いいか分からん時もある。そんな時、一人じゃな
くて誰かの光を感じて…頼つて生きようつて、そ
う思つたんだ…」

「兄ちゃん…」

「へへ…柄にもないこと言つちまった。うまく説明
できなくてすまん」

耕作は、拓一には何か拓一にしか見えない物が
見えている、そんな気がした。

きつと拓一の目にはいつでも稲田がこがね色に
輝いていて見えているのだろう。

「兄ちゃん…。案外兄ちゃんの言う通りかもしれ
んよ」

耕作は、拓一の常に損得の無い行動の理由に少
しだけ触れた気がした。

「そう思ってくれるのか、耕作。おめも今年も頑
張つてくれてありがとな。さ、もう真っ暗になる。
早く帰るべ」

「うん」

兄弟2人、田んぼの畦道を縫つてゆく。

外は闇だった。

星光一つ見えない。

しかし今の拓一には沢山の星光が心の中で煌
めいていた。

(了)

—後記—

拓一はいつも自分より他人を優先する愛情深い立派な人です。泥流地帯本編では少し特別視されるような人物でした。

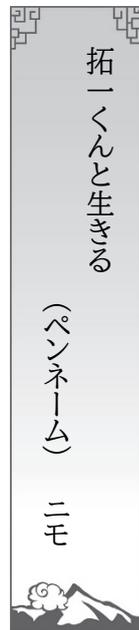
しかし私は、果たして拓一は生まれながらにそうであったのだろうか、本編を読み返した際に、拓一が幼い頃には夜を怖がったりサルカニ合戦の話でおにぎりを選んだりと意外と普通の子どものようだったと気づきました。

拓一も最初は普通の子どもであった、それが作者・三浦綾子氏の意図と合っているかは分かりませんが、ですがその普通の子どもが大変な復興を成し遂げるあの拓一へと成長する過程はどのようなものであったろうと自分なりに考えてみました。そうして出来上がったのがこの作文です。

拙作ですが、最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

拓一くんと生きる

(ペンネーム) ニモ



仕事終わりに時々電車で揺られてモールへ買い物に行く。電車がモールのある駅に入る直前、広くはないがそれなりの面積の田んぼが窓から見える。薄緑色と金色が混ざった田んぼが、ちょうど落ちようとする日の光にきらきらと照らされて、とてもきれいだ。この時期モールへ行く時の楽しみの一つになっている。

拓一くん達は最初に収穫したお米を食べたのだろうか。硫黄の混ざった土に客土して、一度は苗がうまく根付かなかった田んぼに、ついに実ったお米。家族三人で涙しながら、語り合いながら食べる様子が目に浮かぶ。きつと食べただろう、そして手伝ってくれたたくさんの人たちにも少しずつ持つていっただろう。そんなことを考えると胸が詰まる。だって拓一くんは、ただ田んぼにお米を実らせたというだけではないのだ。困難に、試験に立ち向かって乗り越えて、金色の稲穂とともに目に見えない宝を手に入れたのだから。

生きるのならそんな風に生きたい。二年前に自殺を思いとどまったとき、続泥流地帯を読み終えて泣きながらそう思った。思いとどまっただけで、二年も経つのにまだ人としてあまり前には進めていない。積極的に生きようという思いはそれほど強くない。それでもこうしてまた泥流地帯と続泥流地帯を読み返して、拓一くん達がつないでくれた今を大事にしたいという気持ちになる。私が生きる今が、誰かからつながってきて、また別の誰かにつながっていくことを考え、困難に負けてばかりはいられないという気持ちになる。

上富良野町からいただいた缶バッジには「自分がなりたいと思った者になれたら、それが成功者だ」というじつちゃん金の金言がプリントされている。じつちゃん自身は、自分がなりたい者になれたのかなど考える。そもそも人は自分がなりたいと思った者になれたのかどうか、わかるものなのだろうか。「一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではなくて、われわれが与えたものである」続氷点にある名言を思い出した。じつちゃんやばつちゃんが成功者だったかどうか、二人に育てられた拓一くんと耕作くんの生き方を見ればわかる気がする。

旭川と上富良野に行きたいとずっと思っていて、まだ実現していない。上富良野のお米は、去年頂いた。とても美味しかった。拓一くんの田んぼが百年続いたのだと思うと、お米を噛みしめながら胸がいつぱいになった。

深く描かれなかった悲しみについて考えることがある。小説はおおむね耕作くんの目線で話が進むため、どんなに近くにいる人でもその心の奥まではわからない。佐枝さん、節子ちゃん、福子ちゃん、権太くん、武井さん、菊川先生……他にもたくさんの登場人物たちが、心に抱えていただろう悲しみは、書かれていること他は想像するしかできない。けれど著者の綾子さんは全部知っているのだと思う。綾子さんが見ている泥流地帯の世界を見てみたい。一人ひとりが主人公で、これまで続いてきた道がそれぞれある。中学を諦めた耕作くんのためにたくさんの人が泣いてくれたように、それぞれの抱える悲しみや喜びに誰かが寄り添ってあげてくれればいいと思う。

私は拓一くんのようにはなれない。弱くてすぐ

に折れてしまう。未来を見据えて行動を起こす
 ということが怖くてできず、一日ずつを生きるこ
 としかできない。しかしだからこそ拓一くんにそ
 ばにいてほしい。人目を気にしてばかりで小さな
 ことですぐ打ちのめされる自分のそばにいて、拓
 一くんが試練の只中でどんなだったか思い出さ
 せてほしい。前回と前々回の作文コンクールで、
 「いつも心に拓一を」という題の作文を書いておら
 れる方がいた。私の心にも拓一くんに住んでほし
 いと思う。いや、多分もう住んでくれている。そう
 信じて毎朝拓一くんの手を握って仕事に行く。拓
 一くんや耕作くんや節子ちゃん福子ちゃんに少
 しでも「よくがんばった」と言ってもらえるように
 一歩ずつ進む。拓一くん達がつないでくれたから
 こそある今が、未来の誰かの今につながっていく
 と信じて今日も生きる。

泥流地帯と続泥流地帯ありがとう。

思うこと

(ペンネーム) カオリン



東海地方以外では、大きな災害、地震、豪雨、
 洪水等が発生しているが、なぜか避けられている
 ように思える。南海トラフや地震が控えているの
 に。

どんなに準備さしても、それ以上のものが発生
 する事はある。無力だ。

大切なことは自分に耐力と体力があるか否か
 だと思う。もちろんお金もだが。

体験できていない今、疑似体験できるものに子
 供らをつれていくようにしている。もちろん、そ
 れだけで準備できるとは思っていないが、大切な
 ことだ。

「泥流地帯」と出会えた奇跡

松野 富子



「北海道の歴史はな、昔、ご先祖さまが内地(本
 州)から入植をして長い年月、命がけで田んぼや
 畑を開拓してきた『賜物』だよ」

子どもの頃、祖父母が昔話のように、よく聞か
 せてくれた。その時はまだ小学校に入学前の年
 齢だったから祖父母が言った「内地・開拓・賜物」
 の意味は理解できなかったが、何故か「命がけ」と
 という言葉だけは、強烈なインパクトで伝わった気
 がする。自分が生まれ育った家も同じ稲作の水
 田農家だったから。

父母が朝早くから夜遅くまで家族のために泥
 と汗まみれになって働く姿を見て、農作業
 は大変だなあ……と幼心にも分かった。

―やがて時代が昭和30年代、60年代になると
 世相は、ようやく好景気になり電気掃除機・冷蔵
 庫・洗濯機が三種の神器となっていた。

このころになると自分も高校生に成長し、学
 校が休みの日は弟や妹たちと一緒に父母の農作
 業を手伝うようになり、暮らし向きは少し良
 くなった。けれども家で同居をしていた祖父母が病
 に倒れ、相次いで死去した。

大切な人が亡くなってしまふことがこんなに
 悲しく辛いことなのか……と生まれて初めての感
 情を自分は高校二年の時、経験した。

少し時が経つと一時間を見つけて学校の図書
 館で読書をするようになっていた。静かな場所で
 何より落ち着くことが出来たし本棚で読みたい

本を探す時は、心がワクワクした。

当時は残念ながら未だ『泥流地帯』と出会うことが叶わなかったが(本の出版が昭和52年、自分の高校卒業後だった)高校の在学中に一度、国語の先生から読書感想文を書いてコンクールに応募をしてみないか?と自分に勧められたことがあった。その時の課題図書が三浦綾子さんの「塩狩峠」。これが最初の三浦文学作品との出会いとなる——先生から「とりあえず本を読んでみて、君が感じたことを文章に書いて見せて下さい。」

そう言われて早速、その日から読み始めたが、物語は実在した長野政雄氏をモデルに鉄道事故によって殉職した主人公の物語であったので、自分も一気に引き込まれるように読んで深く感動をした。しかし感想文にまとめる作業が容易ではなかった。うまく文章が書けなくて指導の先生から原稿の添削を何度も重ね、ようやく感想文を清書した。その際、教師に助言をされたのは、自分自身の感性を磨く努力をすること——読書は思考力を養い系統を考えながら読むと効果的だと。

それから瞬く間に、時は流れて——自分は大人になった。年を重ねながら昔、体験した祖父母の「死」が強烈に蘇って、「生きる」とはどういうことなのか…と改めて考えるようになったが明確な答えは出ていない。

「泥流地帯」と「続泥流地帯」は偶然にも二年前に上富良野町主催の作文募集で知ったのが、きっかけであった。三浦綾子さんの著書だと分かり、直感で「書いてみたい!!」と強く思った。高校時代に読んだ「塩狩峠」から胸に迫ってくる臨場感を

三浦さんの作品で初めて経験したので、あの感動は忘れられない…それと同時に懐かしく思い出したのは、高校の図書館で過ごしたことや苦勞して何度も書き直した「読書感想文」。先生から勧めてもらったことが契機となり、文章を書くことにも関心を持つようになった。

今回の「泥流地帯」の作文も先ず作品を読むこと——そこから始まった。大正15年の北海道の上富良野。農村の田園風景は、のどかで庭先の鶏が鳴く声も聞こえてきそうだった。昔、自分が子どものころの生家・懐かしい家族の顔を次々と鮮やかに思い出した。

「泥流地帯」は、自分の人生に符合しており、この本と出会えたことは奇跡である。さらに物語に登場する石村家の人々の家族構成が、自分と似ていた——祖父母(市三郎・キワ)と暮らしていたし、母の佐枝は髪結修業のために函館で生活していたけれど、きょうだいが4人(長女…富、長男…拓一、次男…耕作、次女…良子)の人数は同じしかも富は自分と同じ名前だ。

「泥流地帯」の前編では拓一と耕作を中心に分教場や市街で出会った菊川先生や同級生の福子、深城節子との関わりをつうじて、拓一と耕作が子どもから大人へと考え方が成長をしていくのが伝わった。時折、祖父の市三郎が拓一や耕作に聞かせた言葉も忘れられない。「人間の偉さはな、物をどれだけ持つてるかというところで決まらん」——さらに

「いんや、金の多い少いは人間の偉さには関係はねえ。金持ちにも貧乏人にも、馬鹿もいれば立派なものもある。問題は、目に見えるものが問題じゃねえ。目に見えないものが大切じゃ」——この言

葉を聞いた時に、亡くなった祖父が昔、話してくれた姿に重なった。

時代は違っても人間の普遍性は変わらない——そう思った。

やがて大正15年5月24日。「ドドン」と大音響とともに大爆発。ものすごい勢いで泥流が村に押し寄せる。耕作の目前で、市三郎、キワ、良子が泥流に呑み込まれてしまった。

後編の「続泥流地帯」では失意の村葬から始まる——願いもむなしく石村家では市三郎、キワ、良子、武井家に嫁いだ姉の富まで亡くなってしまった。奇跡的に拓一や福子が助かって喜んだが30年余りを開拓した水田が一瞬で、流木と硫黄の泥田に化した。もう駄目だ…と耕作が拓一に抗議した時に同意をするだろうと思ったのだが、拓一の言葉は、

「んだなあ。土は死んだかも知れんなあ。だがなあ。土と人間とはちがう。土つてのはふしぎなものだ。あの泥流の上に客土してよ。そして、あの泥流の水は抜いたら、生き返るかも知れんのだぞ、耕作」と言ったのだ。

その信念は強く、後の上富良野起債反対同盟の村民大会でも拓一は、

「三十年前、一本々々の木を伐り倒し、あの土地を肥沃な畠に変えた祖父母たち、その苦勞を思えば、ぼくは、復興せずにはいられないんだ!」という訴える場面に感動した。

その後、拓一は無我夢中で働き流木の除去や客土・暗渠など気の遠くなるような苦勞の末に、とうとう2年目に稲を根づかせた。

復興までの道のりで、拓一や耕作を温かく見守り支えたのは、母の佐枝や福子、深城節子であ

つたと思う。大正時代の世相の中で、福子のように家の事情で置屋に売られた場面を見て切なかつたがラストシーンの「汽笛」の章で、節子の手助けにより福子が自由の身になれた——ことが未来への希望に繋る。

最後に三浦綾子さんが上富良野の史実に基づいて「泥流地帯」と「続泥流地帯」に込められた「生きる」とのメッセージは、本の終わり部分で佐枝が語ったように思う。

「人間の思いどおりにならないところに、何か神の深いお考えがあると聞いていますよ。ですからね。苦難に会った時に、それを災難と思って歎か、試練だと思つて奮い立つか、その受け止め方が大事なのではないでしょうか——この言葉を自分は大切にしたい。」

泥流地帯1956 く悪人の言い分く

(ペンネーム) まるごとドリアン



「ふざけんな、生まれこのやろう！」

おおよそ堅気のそれとはかけ離れたドスの効いた声だ。かつて村の誰も彼も震え上がらせたその声は、どこに響くでもなく闇の中に——伸ばした手にねっとり絡みつきそうな深い闇の中に吸い込まれていく。

それでも老人はそれを力づくで止めようと瘦せ細った手を必死で振り回し続ける。確かに届いているはずの両手は霧を掴むように素通りするのだが、老人は特に不思議に感じていまいなかった。まるでその様子を嘲笑うように回りをくると、まるでその様子を嘲笑うように回り続けるそれが、臨終の際に見るといふ走馬灯であることを老人は十分に理解していたからだ。

つい先刻、彼は突如として天地がひっくり返るほどの猛烈な頭痛に襲われた。助けを呼ぼうにも「旭川にだってこんな立派な家があるもんか」と日頃自慢していた洋風の大邸宅には彼一人が住まうのみだ。

小さな飲食店から始まり、賭場や女郎屋で築いた財産を元手に戦後のヤミ市で跋扈し「道北の穀物王」と呼ばれた彼も、五年ほど前に社内クーデターに遭い、莫大な財産や利権のほぼ全てを失っていた。彼が創業し育ててきた会社もろとも、全てを奪い去ったのは実の息子であった。

僅かに残された家財や骨とう品を売り払って食い繋ぐほど落ちぶれた彼の元を訪ねる者も殆

どない。

かろうじて身の回りの世話をしてくれていた遠縁の婦人も、先日ついに罵詈雑言を浴びせ遠ざけてしまっていたし、五十年來の付き合いである飛沢医師の忠言にも耳を貸さないどころか難癖をつける始末で、いつしか往診も途絶えていた。半刻ほどのたうち回り、やがて呻き声を上げる力さえ尽き果てた頃によくやく、苛烈な頭痛から嘘のように解放された。と同時に、彼の身は今いる深い闇の中に置かれていた。

驚くほどすんなりと己の死を受け入れた。もう少し生に執着があると自分自身思っていたのだが、目の前に走馬灯が現れぼんやりと明かりが灯った時も、むしろ世に言う走馬灯に何が映し出されるのか、欲しいものは全て掴み取り、或いは奪い取ってきた人生の、その集大成とも言えるエンタテイメント・ショウの開幕に心を躍らせたほどだ。

しかしそれは老人が期待していた豪華な人生絵巻とはかけ離れたものであった。

ろうそくの灯に照らされ真っ暗な空間に何度も何度も繰り返して映し出されるのは、蔑むようにこちらを一瞥し、背を向け去っていく美しい女の姿だった。

女は老人の実の娘だった。常日頃反抗的な娘ではあったが、亡妻の容姿と気性を色濃く受け継いだ娘を老人は殊更に愛していた。

三十年ほど前、老人が経営する女郎屋の遊女の脱走をその娘が手引きした。連れ戻すため子飼いの牛太郎に追わせたところ、遊女と恋仲とな

つていた若い農夫に見事返り討ちに遭ったのだが、
 こともあろうに逆上した牛太郎が刃物を振り回
 し、遊女と農夫、さらには老人の娘やその恩人
 ある医師の命までも脅かす大事件を起こして
 しまったのだ。

後日、普段なら形の良い眉をきりりと上げ嘸
 み付くような剣幕で叫び散らす娘が、能面のよ
 うな顔で縁切りの口上を手短かに述べ、去って
 いった。走馬灯が繰り返し映し出すのはその日の娘
 の姿だ。娘はそれ以来三十年、一度たりとも顔
 を見せていない。

老人は——深城鎌治は走馬灯を止めることを
 諦め、深く長いため息をついた。

ちくしよ、最後の最後にこんなもん見せつけ
 やがって。

ああ、くそ。娘よ、節子よ。何だってそんな目で
 俺を見るんだ。何で俺を毛嫌いしやがる。いった
 い俺が何をしたってんだ。必死で生きてきただけ
 じゃねえか。お前さんの母親が早くにくたばった
 時によ、俺はこのかわいい娘を、可愛い節子を必
 らず立派な大人に育てるんだってよ、どこかの御
 曹司でも婿にとつて、村の奴らが全員ペコペコし
 て、議員や村長だつてアゴで使うような立派な娘
 に育ててよ、幸せにしてやろうって、俺なりに決
 心したもんだぜ。それを何だ、貧乏教師の嫁で産
 婆だど？ 親の気持ち子知らずでもんだなちく
 しようめ。

ん？ 何だあんた。俺は今くたばりたてで忙
 し……俺を迎えにきた？ 俺のことを何でも知っ
 てるだつて？ 何を訳の分からねえこと言つてん
 だ青い顔しやがって。え？ ああ、あんた、閻魔さ
 んの使いつてやつか。そーいや鬼みてえな顔して
 るな。何だよお迎えつてあんた一人？ 手え抜き
 やがって。まあいいや、こんなけつたくそ悪いモン
 見てるぐらいならさつきと閻魔さんとこ行こうぜ。
 ん？ 普通は四十九日過ぎたら審判？ じゃ何
 で迎えに来たんだよ。何い？ 俺はどうせ地獄行
 きだから審判は省略？ おい冗談じゃねえぞ！
 節子といひあんたらといい、どいつもこいつも一
 体何だつて俺を悪人扱いしやがるんだ！

くそつ、まあいい。じゃあゆつくりさせてもら
 うぜ。俺にも言い分てやつがあるからよ、閻魔さん
 が聞いてくれないならあんた代わりに聞いていけ
 よ。

とにかく俺は必死に働いてきただけだ。どんな
 に嫌われようが金になる仕事は何でもした。金
 を持つてりやどんなゲス野郎にも悪党にもペコペ
 コ頭を下げたよ。博徒相手にだつて一歩も引かな
 かった。囲まれて袋叩きにあつたこともあるし刃
 物向けてくる馬鹿もいたよ。俺は俺で与太者集
 めて対抗した。抗争が収まるまでの間は金一も
 節子も札幌の親戚に預けた。人質にでもとられ
 ちや敵わんからな。だがそうやって富良野のやく
 ざからも旭川のカクサなんかからも上富良野を
 守つてみせたんだ。言つてみりや英雄だよ。村の

奴らもちよつとは俺に感謝してもいいだろうよ。
 誰が悪人だつてんだよ。

高利貸しだつて？ ああ、そうだな。バカみて
 えな利息つけて貸したよ。よくもまああんな高
 利で金借りると思うね。でも勘違いすんじゃねえ
 ぞ。俺は必死にすがりつていきたく奴に「俺の金を
 貸してやったんだ。大した善行だと思つて。確
 かに取り立ては容赦しなかつたよ。あたり前さ。あ
 つちは借りた金を容赦なく踏み倒そうとしてん
 のに、何で俺だけ取り立てを容赦しなきゃならね
 えんだ。もちろん真面目に返済する奴から取り
 立てなんてしねえよ。ニッコニコのペコペコで送り
 出すぜ。まあ俺の客なんてのは殆どが酒か博打で
 借金作つてよ、結局借りた金も飲むか打つかしち
 まうようなクズばかりだからな。そりやもう徹底
 的にやるんだ。そりやそうさ。「金返せなかつたけ
 ど泣いて土下座して靴を舐めたら勘弁してくれ
 たぜ」なんてぬかされてみる。一瞬だよ、一瞬で
 も気を抜いたら、少しでも舐められたらおしまい
 だ。節子の婿——くそ。奴らの顔は思い出すたび
 に胃がキリキリしやがる。あの婿みたいによ、ガ
 キみてえな目をキラキラさせてのほほんと商売し
 てみな。次の日にやハイエナみたいな奴らに全て
 持つてかれちまうんだ。

だいたいよ、あんたさつきから俺を高利貸しの
 悪人つていうけどよ、低利貸しの善人とやらがと
 つとと貸してやりやあ誰も俺の処になんて来やし
 ないと思つて。そいつらが貸さなかつたせいで俺
 みたいな高利貸しに手え出したんだらうよ。で、
 俺が貸さなかつたらきつとそいつは俺よりもつと

高利で悪い金貸しにすがりついたろうな。まあ、
てめえの稼ぎより余計に費っちまう貧乏人が山
ほどいるんだから、俺らばかり責めても仕方な
えやな。

あ？ 真面目に働いても貧乏な奴がいるのに悪
どい俺が儲けてたつて？ 真面目と貧乏関係ねえ
だろ。儲からねえことを真面目にやろうが不真
面目にやろうが貧乏は貧乏だ。だが悪いのに儲
けてるつてのはそのとおりだな。悪い「から」儲
かるつていうのが正解だがよ。そりゃ清く美しく
商売するのがいちばん儲かるつてんなら、もしか
したら俺もそうしたかもな。いや、しねえか。ま
あどつちにしろ人に嫌われて後ろ指さされてよ、
命まで狙われながら誰もやらない仕事、要する
にあんたらが言う悪い仕事つてのをしてるから
儲かるんだよ。やりがいがあるの、誇りがどうの
つてよ、誰にでも好かれて尊敬されるように生き
たいなら勝手にすりゃいいよ。だけどな、その上
貧乏が嫌だのなんだのつてのは虫が良すぎるんじ
やねえのかい？ まあ俺だつて詐欺や泥棒で稼い
だわけじゃあない。悪どかろうが何だろろうが、お
上にもお天道さんにも憚ることなく真つ当な商
売してきたんだ。貧乏が嫌なら俺みたいに嫌われ
てでも稼げばいいだけの話だ。

味噌汁は詐欺みたいな値段で売っただろつて
て？ おいよくそんなこと知ってるな。ああ、そう
だ。あの時はたかが味噌汁一杯十八銭で売ったか
らつて鬼だの火事場泥棒だの言われてよ、え？
二十銭だろつて？ 冗談じゃねえ二十銭は卵つ

けた値段だ。まあどうでもいいが詐欺つてのは聞
き捨てならねえな。俺は騙したわけでも押し売
りしたわけでもなんでもねえ。その値段でも「こ
の味噌汁くれ」つて店先に並んだ奴にだけ食わせ
たんだ。みんながみんな「そんな高けえ味噌汁い
らねえよ」つてそっぽ向いてみな。誰がそんな値
段で売ろうつてんだよ。無理矢理売りつけたわけ
じゃねえ、買いたい客に売った。ただそれだけだ。
なにしろ糸屋銀行がぶつ潰れちまって、そうだよ。
今でも思い出しただけで肝が冷えるぜ。硫黄山
が噴火したあの日、俺の預金が一瞬で吹っ飛んだ
んだ。

いいかい、百姓どもは田島が流れちまったかも
しれねえがな、俺たちは預金通帳が突然紙屑に
なつちまったんだ。しかも災害で将来どころか明
日どうなるのかだつてわかつたもんじゃねえつて
のによ。そんな時にヘラヘラ愛想しながら仏みた
いな商売しろつて？ 冗談だろ。だいいち客は札
幌だの旭川だのから集まった奴らだぜ。被災者ど
ころか村の者でもねえのに何で貴重な食料をいつ
もどおりの値段で食わせなきゃならねえんだ、馬
鹿も休み休み言えつてんだ。まあ、何日もしない
で市街のババアどもが集まって炊き出し始めちま
ったからな。俺の役目はどつちにしろそこまでき。

人買いの女郎屋？ あんた何でもかんでも俺
を鬼みたいに言うよな。あんたこそ鬼だろう。そ
のツノ本物？ いてっ！ ああ悪かったよもう触
らねえよ。まあなんだ、女たちは割と自由にさせ
てたつもりだぜ。ちよくちよく親元にも返してや
ったしな。福子？ ああ小菊か。忘れやしないぜ、

恩を仇で返すようなマネしやがつてよ。まあそれ
でも稼ぎ頭だったからな、それなりに大事にして
いたさ。なんなら石村の家に泊まるつてんで送り
出したこともあるぜ。普通そんなことあ許さねえ
だろ。もつともそんな緩いことしてたおかげであ
のママ、まんまと足抜けしやがった訳だからな。
そりゃ反省したさ。

村の娘を働かせたのが悪いつて？ そんならど
この娘を働かしや善人で、小菊がどの町のどの店
に売られてりや幸せだったつてんだ。おいおい、旭
川や富良野の女郎屋なら「マシ」だったなんて言
わねえだろうな。勘違いするなよ、そもそも悪い
のは俺から借金してよ、返しもしないで自分から
娘を売りに来た曾山の馬鹿だろうが。俺が秋か
ら料理屋を始めるつて聞きつけてよ、野郎、「う
ちの娘が丁度学校出ますんでね、へえ、へへ、その
よかつたら使つてやつてくだけせえ」なんてヘラヘラ
して借金申し込んできたんだぜ？ そりゃ他にも
そんな奴いたけどよ、俺よりよっぽどイカれてる
と思わねえか？ 俺が地獄行きなら先に逝つた
あいつはどうなつたんだよ。え？ 転生？ 何
に？ お、おう、ははは本当かよ、永遠に？ そり
ゃ地獄より酷えな。さすがに気の毒な気もする
がまあ、ありゃ自業自得だわな。

まあいいとにかく、兄貴の国男をタコに売つて
もいいしそもそもあの馬鹿が夜逃げでもしてりや
いくら俺でもお手上げだったわな。でも奴は俺の
賭場に通い続けたくてテメエから進んで娘を差し
出したわけだ。

石村の家に迷惑かけた？ ああ、石村か。石村の爺いな、とにかくあれは苦手だった。俺も誰だつて金か力かで黙らせたし言うこともきかせてきたのよ、何でもわかったようなツラでこの俺に説教たれやがる。あの目でじいっとみられるとよ、どうも調子が出ないんだよ。節子がこんまい頃、あその孫によ、まあ、くそ婿だよ。節子が奴に石をぶつけられて怪我したことがあってよ。怪我つていっても顔だぞ？ 上富小町って言われた別嬪の顔に石をぶつけやがったんだ。ああそりゃ怒つたよ。当たり前だ。その時もなんだったかな。ガキに石を投げさせるようなことを言った俺が悪いとかよ、娘の顔の傷よりてめえの孫の心の傷の方がどうのとかよ、今考えると滅茶苦茶じゃねえか。女の子が顔から血い流してるんだぜ？ でもなぜか言いぐるめられちまうんだ。

しかしあの家の人間は誰一人俺の思い通りにならなかった。息子の、何だったかな、違うよ修平じゃねえ。まあアイツも嫌な野郎だが、早くに死んだ兄貴のほうの、そうだ義平、義平だ。あの野郎もいけ好かない奴だった。いつかほら、すげえ豆景気があったろう。あの時小銭稼いだ百姓どもから全部捲き上げてやろうと息巻いてたらよ、あの野郎が博打漬けになりかけた百姓どもを片っ端から説教して引き上げさせやがったんだ。残ったのは曾山の馬鹿みてえな小物ばかりよ。大損こいてはらわた煮え繰り返ったよな。くたばっちゃまえて毎日思ってたよ。まあ、あれだ。なにもよ、本当におつ死ぬこたあねえけどよ。

お佐枝さんにしたってそうだ。貧乏小作農家の後家が童っ子四人も抱えてよ、いくら舅がああ妖怪みてえな爺いでも何せあの野郎、金を稼ぐ気があるでねえもんだからよ、何かありやたちまち露頭に迷うのは目に見えてるわな。それにほら、なんだ。俺だって最初の女房亡くしたばっかりだよ。寂しいっていうかまあ、あれだよな。ガキが何人くっついていようが育てる金だつてあるしよ、困つてやりたくないのはそんなに悪いことかね。それにあんたもお佐枝さんの器量知ってるだろ。いや若い頃だよ。なんていうか、もともと別嬪さんだろ。それが何とも言えない血の気のない寂しげな顔しやがってよ。俺だけじゃねえ、女房が元氣いっぱい生きてる奴でさえおぼせあがってたんだ。豆腐屋の親父だつて村議やつてた若浜だつてそうだろうが。あんたも、ん？ あんた男？ 鬼つて性別あるのか？ そうか、だったら…うん、そうそう、そういうことだよ。わかってるじゃねえか鬼のくせに。まあ仕方ないことだよな。俺が悪いわけじゃ…変な噂を立てた？ ああ、舅と怪しいってな。そりゃそんなネタ聞いたらあちこち吹いてまわるさ。けど最初に言ったのは俺じゃないぜ。広めたのが悪い？ ああ、悪いよな。そりゃまあそうだ。聞き齧りで他人の噂を流すのはよくねえな。

「ひどい手口で金を巻き上げたらしい」

「二十円で味噌汁を売ったらしい」

「変な噂を立てたらしい」

「娘が家出したらしい」

「店に博徒が入り浸っているらしい」

つてな。村の連中はすいぶんらしい、らしいって楽

しんでくれたもんだがな、善人の石村の噂は良くないが俺みてえな悪党の噂なら良しってか？ まあ根も歯も無いってわけでもねえし気にもしねえがな。いや、わかっているよ。手ごめにしようとしたのはまあ、さすがに悪いことしたと思うぜ。正直いうと脈があると思つてたんだよ。うるせえな気持ち悪いとか言うなよ鬼のくせに。それにしてもあんなにおつかねえ顔されると思わなくてよ。それでまあ、ひっぱたかれてお仕舞いよ。ああ、そうだ。本気出してりやみすみす迷がしやしねえよ、俺を誰だと思つてるんだ。

誰よりあいつだ。拓一だ。奴にや本当に参つたぜ。

奇跡の復興を引っ張った英雄だつて？ 冗談じゃねえよ奇跡つてことはマグレだろうが。失敗して当たり前、奇跡頼みのマグレ当たりなんだよ。村長の吉田や石村の倅がやったことはただの博打なんだよ。俺に言わせりや博打うつ奴なんざみんな大馬鹿野郎さ。俺はそんな馬鹿を集めてテラ銭で儲けていたんだ。自分じゃ博打なんて打たねえよ。絶対に勝つ勝負しかしねえ。でもあの時は百姓どもの分の悪い博打に俺が、いや村ごと巻き込まれそうになったんだ。そりゃどんな手使つても止めようとするぜ。

いいか？ 俺だつて村が廢れることを望んでいたわけじゃねえぞ。稼げなくなっちゃまうからな。わかるよな？ 山は噴火するわ、辺り一面泥と大木で埋め尽くされるわ、預金は消し飛んじまうわ、とにかく村が無くなってもおかしくない状

況だつてのによ、似たような時期に似たような場所
所で噴火したらまた同じ山津波に吞まれちゃう
んだぜ？ それを同じ場所でまた田んぼ作るな
んで、正気じゃねえだろ。他所にや未開墾地だつ
て山ほどあったんだ。そりゃあ結果的に復興して
よ、今のところ山津波も来てねえがな、もし稲が
実らなかつた、もう一回流されちまつた、なんて
ことになつてたらと思つとゾツとするぜ。そりゃ
拓一の野郎なんかは借金なんていくらでも返し
ただろうよ。最悪な野郎だがまあ甲斐性無しつ
て訳じゃねえ。だが他の百姓はどうだ？ 二回も
山津波に島ひっくり返されたらどうなつてたん
だ？ 今度こそ全員、あんたのどこにお世話にな
つていたと思つぜ。

とにかく、石村のモンに迷惑かけられたのはこ
つちなんだよ。まあ今となりや気にしちゃいねえ
よ。奴らには奴らの正義があるんだろうよ。あん
たらだつて「悪い奴」とやらを片っぱしから地獄に
送るのが正義なんだろう？ 同じき。俺にも俺の
正義つてもんがあるしよ、それなりに貫いて生き
てきたつもりだからな。

もういいや、言いたいこと言つてすつきりした
よ。俺が悪人で地獄行きつてんならそうすりゃい
い。それぐらい腹括つて生きてきたからな。地獄
でもあんたら鬼相手にひと儲けしてやるぜ。

だがよ、だがね、そんなことはどうでもいいの
き。俺はよ、節子によ、一人娘の節子によ、え？
金一もいるつて、いちいちうるせえな。やつぱり俺
はよ、節子に愛想尽かされたまま逝くわけにはい

かねえよ。なあ、頼むよ。最後に節子に会わせて
くれよ。あんなのがよ、あんな目で見られたのが
最後つてのはよ、あんまりじゃねえか。せめて俺
がくたばつちまつたことを知らせてやつてくれよ。
だだっ広いだけでよ、のたうち回つたつて掴まる
もんさえ無い空っぽの家でよ、一人で無様にくた
ばつてゐるつて伝えてくれよ。そうすりや幾らなん
だつて節子も敷居を跨げるだろうからよ、三十
年ぶりの涙の対面つてやつだよ。

だつておい、見てみろよ、俺の周りにや誰れも
いねえんだよ。何にも残つてねえんだよ。何でだ
よ。あんなに稼いで、命懸けで奪つて、死に物狂い
で守つてきたつてのに、俺にや何にも残つてねえじ
やねえか！ せめて家族によ、血を分けた娘に涙
のひとつも流してもらわねえと帳尻が合わねえ
だろうが！

バチが当たつたつて？ どれにだよ！ 冗談じ
やねえぞ。俺のしてきたことがどれもこれも悪だ
つてんなら、その都度小まめにバチ当てりやよか
つただろうが！ 節子に愛想つかされる前によ、
病気なり事故なり空き巣なり色々あつただろ！
お前らが怠けてただけじゃねえか！ 上司連れ
て来いこの野郎！ 違うよ大王じゃねえよ丁度い
い奴連れて来いつてんだよ！

クソっ！ いや悪かつたよ。もう地獄でもなん
でもいいからよ。何なら曾山と同じ目に遭つても
いいき。罰を受けろつてんならいくらでも受けて
やるぜ。まとめて来いよ。でもその前に節子にだ
けは会わせてくれ。なあ！ おい！ なんて俺が
こんな目に遭うんだよ！ 待てっ待てっ話し合お

うぜ！ じゃあせめて四十九日まで待てつての！
おい！ やめろよ！ 触るなよ！ おい！ 待つ

冥土と呼ばれるその暗闇に再び静寂が訪れた。
交代で入ってきた赤い顔の鬼が大きく伸びをし、
気だるそうに次の走馬灯を用意する。

闇に照らし出されたのはのどかな農村の風景
と、陽に焼け眉間に深い皺が刻まれた婦人の姿
だ。

常に不機嫌そうで時折誰かを怒らせるか傷つ
けるかすることがあつても、物を盗むこともなけ
れば人を殺めることもない、極めて平凡な人物
に見受けられた。

(本人には何のことも解らないだろうな)

閻魔の前でキョトンとする女の姿を思いながら、
赤い顔の鬼が少し声を張る。

「次の方ー、武井きーん、武井シンきーん」

(了)

どう生きるか『泥流地帯』から
(ペンネーム) happylayer



1 三浦綾子作品の魅力

三浦綾子生誕100年の今、改めて三浦綾子作品に向き合うことを今年の私の課題とした。

三浦綾子作品の魅力は沢山ある。壮大なテーマはもちろん、エピソードの一つ一つに深い意味が込められていると感じる。主人公が立ち止まって考える日常の些細な出来事にハッとさせられる。特に『泥流地帯』の主人公耕作は感受性が強く、周囲が当然のこととして受け入れていることに幼い頃から疑問を抱く。

その度に立ち止まって考える耕作と共に、読者である私達も一緒に考えさせられる。

さらに、この作品では現代にも通じる数々の問題提起をしている。ヤングケアラー、人権問題、災害被害等。今ようやく問題視されるようになったこれらの問題を、『泥流地帯』ではさりげなく指摘している。それも決して非難するのではなく、過酷な時代を懸命に生きる者に寄り添うように、優しく描く。作者の視線は細やかでかつ鋭く、温かい。『泥流地帯』は十勝岳の噴火を題材にしながら、どう生きるかを問う珠玉の作品である。

2 「因果応報」の残酷さ

因果応報とは「過去における善悪の業に応じて現在の不幸の果報が生じ、現在の業に応じて未来の果報が生ずる」という意味の仏教用語である。悪行は自分に返ってくるからしてはいけない

と私自身にも漠然とすり込まれている。意識的でなくとも、私達の中に意外と因果応報の考えが浸透していることに気付く。それは本文に登場する「罰が当たる」等、因果応報を基にした考えを当然のこととして受け取れることから分かる。

しかし、私はどちらかという因果応報を良い意味に捉えていた。善行を心掛け悪行を慎むのであれば、特に問題とすべき点はない。ところが、この作品を読んで、因果応報が場合によっては非常に残酷になることを教えられた。石村家に降りかかった厄災、父の死や母の不運や病、泥流災害を思うと因果応報という言葉で片付けることはできないからだ。

苦しい状況でも家族で助け合い誠実に生きてきた石村家が次々と不幸に見舞われるのを、当然のことと納得することはできない。姉富の姑シンの「自分たちはよほど心掛けがいいのだ」という発言に怒りを覚えない人はいないだろう。さらに泥流で被災した人々に対しても、心掛が悪かったのだから仕方がないなどと済ますことは決してできない。

「因果応報」が時に何と残酷な言葉になるのか。そのことに気付かされた。全てが因果応報であるはずがない。それで納得できる訳がない。病や予期せぬ事故・災害等で苦しむ人にとって、私達の中に浸透している因果応報という思想が、いかに残酷に響くか。病に苦しむ生涯の中で、作者はそのことに気付き、警鐘を鳴らしていたのかもしれない。

自身を律するために因果応報に基づき善行を

行い、悪行を慎む心掛けはよい。しかし、それを人に当てはめるべきではない。決して全てが因果応報によるものだとして解釈してはならない。このことに気付き自身を省みること、理不尽なことに苦しむ人の視点を得た。

3 人はいかに生きるべきか

私はこの作品全体で「人はいかに生きるべきか」と問われていると捉えていた。泥流災害を乗り越えてどう生きるのか？ という大きなテーマと同時に、小さなエピソードそれぞれにおいて、この場面でどうするか？ と問われることの積み重ねが、最終的には、どう生きるかにつながっている。

遅刻よりも家族を優先させること、人にわからなくても誠実に行動すること、嘘をついても人のために詫びること。いろいろな登場人物が語る自身のちよつとした心掛けが、たとえそれが子どものものであったとしても、立派な人生観と言える。古き良き日本の倫理観とでもいうものが随所に表れている。

様々な形でどう生きるかを問われるが、結局人は幸せになるために生きるべきだと私は考えている。遅刻して自分が怒られるのが嫌だから具合の悪い母や家族を放置した時、自分は後悔しないのか。掃除をさぼっても人に分からなかったら、そのことを喜べるのか。娘を売って酒を飲み博打をすることが楽しいのか。周囲の人を苦しめても、お金を沢山稼ぎ贅沢な暮らしができればいいのか。周囲を誤魔化すことはできても、自分自身を欺くことはできない。だからこそ、自分が

嫌悪感を抱くような行いをするべきではない。どんなに言葉で言い繕って正当化しても、自分の心を納得させることはできないのだから。

人によって幸せの感じ方は違う。だが、幸せを感じるために必要なのは、金銭等の表面的な成功でも、たまたま訪れた幸運でもない。

人が幸せを感じるには、周囲の人に愛され、愛することが欠かせないのではないか。誰かのためには頑張れるし、誰かに必要とされることで喜びを感じる。家族や友人や職場の仲間等、周囲の人との関係の中で幸せは築かれるものだろう。石村家も皆、貧しくても互いを思いやりながら家族のために頑張っていた。泥流被害で絶望する耕作も、目の前の人を救うために必死になれた。教員としての立場を思い出すことで、生徒のために頑張る気力が湧いた。自分一人だけだったら、どうなっていたのか。やはり、人は助けたり助けられたりする、そういう関係の中で生きることによって幸せを感じられるのだと思う。

4 それぞれの役割

恥ずかしながら、この作品を通して上富良野地区の泥流災害を初めて知った。北海道で生まれ育ったにもかかわらず、現代においても毎年のように災害で大きな被害が生じ、復興に苦労している。この時代であれば尚更、復興がどれだけ大変なことか。愛する者を失った悲しみと共に、先の見えない状況に絶望的な気持ちになるのは当然である。

しかし、耕作と拓一兄弟は、きつと乗り越えるだろう。理知的で情に厚い耕作と純粹で忍

耐強い拓一。対照的な性質の二人だが、それぞれに与えられた役割があるはずだ。二人が誠実に生きることこそが大切であり、周囲にも及ぼす影響は大きいに違いない。

物語の最後の方で、理不尽に起こる不幸に対して耕作が「真面目に生きていても馬鹿臭い」と言う場面がある。それに対して拓一は「馬鹿臭いとは思わない、生まれ変わっても真面目に生きるつもりだ」と言う。ここにどう生きるかというこの本質が表れている。

迷うことなく即座に真面目に生きることを選択する拓一は、正しい道を進むことを体現する人物だ。迷う時があってもきつと真面目に生きることを選ぶ耕作は、迷う要素に対する疑問や反発を、将来改善につなげる知性のある人物だ。それぞれが担う役割を全うしようとする努力の姿に、感動と共感が生まれる。

苦しくても辛くても報われなくても正しく生きるか、目先の利益や楽な方法を選んで狡賢く生きるか、どちらを選択するかは大きな別れ道だ。現代でもこの別れ道で後者を選び、詐欺等の犯罪に手を染め楽に生きようとする者もいる。犯罪ではなくても、安易に楽な道を選択し後悔する場合もある。そこで立ち止まって考えるべきだ。自分にとっての幸せを。

5 最後に

『泥流地帯』は、とても簡単には語り尽くせない読み応えのある作品である。小説の中の言葉には無駄がないので、細部にまで拘り、感想や考察を誰かと語り合いたい。特に祖父市三郎の語る真

理を捉えた言葉は魅力的で、道徳教材としても非常に説得力がある。

そして、この作品を多くの人に読んでほしい。北海道に住む人、悲しみに暮れる人、多くの子どもたち。不自由で理不尽な時代があったということや、貧しさや困難の中でも正しく誠実に生きる人がいたことを知ってほしい。そして現代において豊かになったものと失われたものの両方を感じ、未来をどう生きるのか、ぜひ考えるきっかけとしてほしい。

バイプレイヤーズ

(ペンネーム) おぼんです田谷



(一) 坂森五郎 CV:神木隆之介(子役)

——母ちゃん、母ちゃん、あんな、おれ今日から三年生になったんだぞ。

したらな、先生だれだったと思う？ 前にき、四郎兄ちゃんがとうふやで会ったって言うってた石村先生だったんだ。

おれき、びつくりして「とうふや！」って言ったんだ。おれ本当はき、「兄ちゃんがとうふやで先生に会ったって言うってたぞ」って言いたかったんだけどな。先生もびつくりしてたな。

——母ちゃん、あんな、母ちゃんと一緒に一郎兄ちゃんと三郎兄ちゃんも死んだべ。しばらくして、おれ一年の時だつてな、知らん小母さんが「三人も死んだんかい。うちは五人だれも死んだらんわ。心がけがいいんだべね」って言ったんだ。他の兄ちゃんたちと、これから心がけよくせんばならんって言うってたけど、そのあと次郎兄ちゃんも死んだべ。したら四郎兄ちゃん、おれたちの心がけが悪いせいだつて。父ちゃん元から笑わんに、兄ちゃんまで笑わなくなったもな。

——母ちゃん、あんな、おれゆんべ、まんまたいたんだ。

だんだん上手くなってきたんだぞ。ゆんべのは少しこげたけど、みそつけて食ったら、うまかつ

たなあ。父ちゃん、ほめてくれんかったけど、「明日もお前がたけ」って言ったんだぞ。

——母ちゃん、あんな、石村先生とこも母ちゃんいないで育ったんだつて。父ちゃんも死んでるんだつて。先生も心がけ悪かったんだべかな。そうは見えんけどな。

あとな、母ちゃん居なくなったあと、姉ちゃんがあまりしゃべったり笑ったりせんくなって、それもさびしかったんだと。おれとおんなじだもな。

——母ちゃん、あんな、おれ今日、耕作先生んちにあそびに行つたき。したら先生、家の畠で仕事してたんだ。天気の日はいそがしいんだと。おれは手伝えんかったけど、先生のじいちゃんとか兄ちゃんたちといっしょに昼めし食べたんだ。いっぱい笑つたなあ。楽しかったなあ。

——母ちゃん、あんな、おれまた耕作先生んちにあそびにいくな。でも兄ちゃんに言うの忘れてたな、おこられるかもな。ほんとは昨日、日よう日に行きたかったけど天気だったもな。今日は雨ふりだからな、先生畠に出ないから遊べるかな、へへ、楽しみだな。ほら、先生の家が見えてきつ、うわびつくりしたな。すごい音だったな。

——母ちゃん、あんな、

母ちゃん？ あれ？ 母ちゃんだな。あははは、母ちゃんそんな顔してたのか、四郎兄ちゃんとそつくりだ。え？ おれもそつくりなのか？ へへへ。そうか、知らなかった。うれしいなあ。うれしいなあ。

一九二六年五月二十四日 坂森五郎(10)

(二) 武井富 CV:黒木華

母ちゃんが居なくなった日：ですか？ はい、とてもよく覚えています。本当にはつきりと。

いとこの家で遊んでいたら、叔母さんが「あんたらの母さん、もう家におらんわ」って。はい、突然に。第二人と慌てて飛び出しました。私は小さい妹を背負ったまま。半里ほどですか、家までの道を全力で走つたんです。あんなに必死に走つたのは最初で最後かもしれませぬ(笑)

でも、走りながら色んなことを考えてしまつて。拓ちゃんも耕ちゃんも「絶対嘘だつ」って、あ、弟です、拓一と耕作。何回も何回も叫びながら走るんです。でも私、きつと叔母さんの言う通り、母ちゃん居ないんだらうなつて。きつと家に帰ったら誰も居ないんだらうなつてわかつてました。だつて変ですもの。急に修平叔父さんの家でお米のご飯食べてこい、なんて。子供たちだけで絶対おかしいのに、お米が食べられるって聞いて本当に嬉しくて美味しくて。すっかり釣られてしまいました。

母ちゃん、以前からじっちゃんやばっちゃんと話し込むことが多かったんです。私たちが寝た後で。修平叔父さんがたまに加わって大きい声出すもんだから、きつと何かが起きているんだろなってことはわかりました。でもみんなが私たちに、子供に心配かけないようにって気をつけてくれているのに、聞けないです。どうしたの？何があったの？うちはどうなるの？なんて。

それに居なくなる前の日に母ちゃんが私の耳たぶをずっと触ってきたんです。前から私の耳たぶを触るのが好きだったんですよ。亡くなった父ちゃんと耳の形がよく似ているんですって。いつもよりずっと長く触っていたんです。私くすぐったくって、あんなに笑ったのは初めてかもしれないですけど、母ちゃんもすぐく笑っていて、私、母ちゃん笑いすぎて泣いていたんだと思ってたんです。馬鹿ですよ。

そんなことを思い出しながら走っていると、やっぱり母ちゃんが居なくなっているってことは覚悟してしまっただけ。それでも家に着いて、誰も居ない家の中を見回したら頭の中が真っ白になりました。家具が減っている訳でもないですから、見た目は何も変わらないうえに、母ちゃんが居ないって思ってみると、不思議なものです。元々何も家の中が本当に空っぽに見えませんでした。空気もとても冷たく感じて。

少し落ち着いてくるとようやく背中が良子が大きな声で泣いていることに気づきました。耕作

も床に突っ伏してわんわん泣いていますし、外からは拓一が母ちゃんを呼び続ける声も聞こえます。それはもう大騒ぎです。いつもなら母ちゃんが出てきて収めてくれるんですけど、肝心の母ちゃんが居ないって騒いでるもんで。あれ、これは私が収めるのかなって、ぼんやりと考えました。良子をあやして、耕作を慰めて、拓一を励まして。もちろん母ちゃんの代わりなんてできません。幸いばっちゃんも元気で、私がすぐに母ちゃん代わりなんてできなくても問題ないんですけど、それでも私、石村の長女ですし、拓ちゃんだつてまだ小さいし、頑張らなきゃって、今思うと毎日緊張していたような気がします。母ちゃんみたいなしなきゃって。母ちゃんはいつも静かで、優しく、落ち着いていて。私もそうしなきゃ弟も妹も寂しがるんじゃないかって。そしたら私、あまり喋れなくなってしまう。結局余計に寂しがらせちゃいましたよね。私、無口と思われがちなんですけど、元々はおしゃべり大好きなんです。

学校にも通って、お友達と色々なお話をしたかったなあって、時々思います。実は私、高等科に進む予定だったんです。農家の子には行けない子も多かったですし、女子生徒なんて本当に少ないんですけど、父ちゃん、私が小学校に上がったぐらいから、富は高等科に行かせるんだっていつも言っていて。私、勉強好きだったから、とても嬉しかったんです。

でも修平叔父さんなんてカンカンに怒っちゃって。農家の娘に学問なんてどうのって。でも父ち

やんは「勉強したい子供に勉強させてやるのが大人の務めだぞ」って笑って、相手にしなかったみたいです。

もちろん父ちゃんが亡くなったので高等科なんて行けなくなりましたけど、心のどこかで「もしかしたら」なんて思っていたんです。分教場の卒業式も終わって背中には良子を背負っているのに、もしかしたら四月から市街の学校に行けるんじゃないかって。可笑しいですよ。母ちゃんが居なくなると、ようやく諦められました。

あ、違うんです。高等科に行けなかったことが悲しいとか、そういうことではないんです。私、何も言う資格がないというか。

もう五年も前になりますけど、耕ちゃんが旭川中学に合格したんですね。しかも一番で。でも、あの子入学式の日からずっとお腹が痛いって布団から出られなくて、何日か後に結局中学に通うことを諦めてしまったんです。そして耕ちゃん、泣きながらじっちゃんに言ったんです。「姉ちゃんをお嫁に行かせてー!」って…

はい、確かにうちにお金はありませんでしたが、中学に五年間通わせるとなると、さすがに私の嫁入り支度は難しかったと思います。だから、耕ちゃんは自分が中学諦める代わりに私を嫁がせてくれたって言うんです。

…でも私ね、気づいてたんです。

自分が中学に行くのと私の嫁入りが遅れるなんて、あの子とっても賢い子なんですけど、まだ六年生でしたし、そんなこと考えないですよ。は

い、本当に賢い子です。でもそういうった機微には疎いというか、器用な付度ができる子じゃないんです。ましてや毎日毎日、中学で思う存分勉強できることとか、新しい友達ができることとか、寝られないぐらい興奮して。家族みんなにありがとう、中学行かせてくれてありがとうって。本当に毎日ですよ。中学生生活のことに夢中だったのに、ある日急に思い詰めた顔をするようになったんです。

だからあの子が「姉ちゃんをお嫁に行かせて」って言った時、すぐに気づいたんです。あの日の私たちの話を聞いてしまったんだって。耕ちゃんが中学に行くのと私が嫁に行けんって、納屋で私と隆司さんがそんな会話しちゃったんです。きっと耕ちゃんそれを聞いていて…。私たちの残酷な会話を耕ちゃんに聞かせてしまったせいで。自分のせいで私が嫁にいけなくなるなんて、そんなこと考えさせたのは私たちだって。わたし…。気づいていたのに！蓋をしたんです！耕ちゃんが自分から気を遣ってくれたんだって！自分でそう決めただって！私がそうさせたのに…。心に蓋をして！気づかないふりをしたんです！

だから、絶対に、絶対に幸せにならないといけないのに、耕ちゃんが中学を諦めてまで嫁がせてもらったのに！だから私が精一杯幸せな姿を見せて、そして謝ろうと思っていたんです。お礼を言おうと思っていたんです。皆んなのおかげで幸せですって。

だけど、いつの年かのお盆に、耕ちゃんと良子が不意に訪ねてきてくれて…。嬉しかったし、懐かし

かったし、飛びっきりの笑顔を見せて安心させなきゃって。でもどうしても笑えなくて、私、自分では我慢強い方だって自信があったんですけど、駄目ですね。笑うどころか口を開けたら何か真っ黒いものでも出てきそうな気がして、息もできなくなつて…。笑顔どころじゃないですよ、あまりにも耕ちゃんに申し訳なくって、あの子たちの前で泣いてしまったんです。情けなくて、悔しくて、申し訳なくって。

「ごめんなさい、私また泣いてしまつて。でも今度は大丈夫なんです。隆司さんと一緒に、硫黄山の採掘場で働らせることになったんです。石村の家にも夕べ挨拶に行ってきました。これから出発します。もう一度、耕ちゃんに幸せな顔を見せられるように、よく笑ってよく喋る富姉ちゃんに戻れるように、二人でやり直します。そして今度こそ耕ちゃんにしっかりとお礼を言います。私の幸せは耕ちゃんたちから贈られたものなんだって。

硫黄山に行く本当の理由、誰にも言わないでください。ね、お義母さんにまた怒られてしまいますから。

あつ、はい、今行きます。

「ごめんなさい、それじゃ、出発しますね。はい、私は幸せになります。隆司さんと二人で、みんなに心からお礼を言えるように、幸せになります！」

一九二五年五月二十五日 武井富(23)

(三) 武井隆司 CV:山田孝之

…で、石村の家では俺のこと何か言ってたかい？ うん、義理欠いちまつてな、俺のこと恨んでると思つてき…。そうか、あそこの家はみんな優しいもな。

その点うちは色々複雑でさ。知ってるかもしれないが、うちのお袋は後妻でさ、弟四人は皆連れ子ってやつなんだ。

うちは元々芦別で小ぢんまりと馬具屋やっててさ、親父は二代目なんだけど、とにかく不器用で全然儲からないんだよ。物心ついた頃からずっと貧乏でさ。それでもお袋、本当のお袋が死んでからもしばらく、父子二人でまあ仲良くやってたんだ。

ある日親父が、母親も兄弟もいなくて寂しいだろうって、いきなり今のお袋と子供四人連れてきたんだよ。目ん玉飛び出るぐらいびっくりしたよな。突然知らない奴らがズカズカ上がり込んで好き勝手始めたんだ。

俺だって一丁前の歳だったし、冗談じゃねえ寂しくなんかねえよって猛抗議したよ。そしたら親父がさ、実は寂しいってのは建前で、この母子は亭主が借金で首括つちまつて、放っておいたら野垂れ死んじまつて言うんだ。

いや、そうだとっても親父が助ける義理はねえだろうって。そもそもそんな大人数助ける甲斐性もねえだろうって思ったけど言えないよね。死んじまつなんて言われたらさ。

だからまあ、新しい家族が増えて賑やかになるならそれもいいかなってさ、仲良くやっていくし

かねえなって思ったんだ。

だけど元々二人食ってのがやつとこせの貧乏暮らしに五人も増えちまったもんで、食わせるために親父が片っ端から商売道具質入れしちまうんだよ。またその質屋もアコギなもんで、たちまち首が回らなくなつてね。そんな時分にカジカの沢つとこで小作が一軒足抜けしたからお前ら農家やらないかって、上富良野の親戚から声かけられて、商売道具もあらかた失くして、その農家も居抜きで入れるつてんで、半分夜逃げみたいにして引越してきたんだ。まあ、何より農家やってりや食い扶持に困ることはないだろつて、今考えると本当に浅はかだけだな。

まあそんなことでカジカの沢に越してきたんだけど、部落のみんなが本当に良くしてくれてね。特に隣の修平さん、富の叔父さんにあたる人なんだけど、口は滅法悪いがとにかく面倒見のいい人で、農家のこと何にも知らない俺や親父に時間を惜しまずに教えてくれたんだ。

もちろんすぐには上手くできないよ。修平さんも、いや、これは誰にも言わないでくれよ、すごく熱心に教えてくれるんだけど、土の声を聞けとか、苗が何をして欲しいがってるか考えれとか、何せ独特というか、半分以上は何言ってるかわからないんだよ。いや本当に感謝してるんだよ。でも親父もただでさえ不器用だから、俺が覚えるしかないつてんで本当に大変だった。それでもこの家族に食わせていかなきゃつて俺も親父も踏ん張ったよ。

三回目の収穫が終わった時かな、十分な収量ではないけどまあ、何とかやっていけるかなつて思つた頃にお袋が言つたんだ。

「この畑はうちの子が継ぐから隆司は外で稼いで来い」つて。信じられないけどそう言つたんだ。「うちの子」に継がせるつて、そう言つたんだ。いや、たまげた。怒るとか傷つくなんてのは後からゆつくり追いかけてくるんだけど、とにかくたまげたね。

そりや言つてることは滅茶苦茶さ。でもお袋はいつも好き勝手なこと言い散らかして「具合が悪い」つて寝込んでしまうんだ。そうなるも俺も親父も駄目なんだよ、弱いんだよ。何にも言えなくなつちまうんだ。

まあ、それでもわざわざ硫黄鉱山で働らく必要はなかったんだだけだね。危険だし体壊す奴も多いし、碌に市街にも降りられないつてんで地元、村の者なんて誰も寄り付かなくて、内地から出稼ぎに来た若いのが殆どなんだだけだね、給金は抜群なもんで、聞きつけたお袋が行つてこい行ってこいつて、追い出されるように硫黄山に入ったんだ。

親父も俺も本当の家族だと思つて、いや家族に本当も嘘もないんだだけさ、沢のみんなにも、村の誰にだって後妻だの連れ子だの言つたこともないよ。家族は家族だから。そう思つて暮らししてきたんだ。

だから恩だの義理だのつてこともないんだよ家

族なんだから。そうなんだだけさ、貧乏でも親父と二人穏やかな暮らしを捨てた結果がこれかよつて。結局人間なんてのはさ、やってくれるのは当たり前で、恩になつて着ないもんだつて考えるようになつちまつてね。

富と結婚する前に、義弟の耕作が中学に合格したつて皆で大喜びしたんだ。したら富がさ、中学にお金がかかるから私嫁に行けんときたもんだ。ちよつと待つてくれよ、嫁入り諦めて中学に行かせたつて、耕作は姉ちゃんが犠牲になつてくれたなんて思わんぞ、いい気になつて威張るだけだつて、富に言つて泣かせちまつたことがあるんだ。あれは本当に悪いことしたよ。

うん、結局何で心変わりしたか知らんが耕作が中学の入学を遠慮したもんで、その年のうちに富とは結婚できたんだよ。ただお袋と弟たちがあんなだからさ、富には本当に苦労かけちまつたんだ。特に俺が山に入つてる間は酷かつたらしいんだけど、お袋にいくら言つても嫁と姑なんてそんなもんだ、自分も散々な目に遭つてきたつてケロつとしてんだ。話にならんもね。富は富で大丈夫です、大丈夫ですつて言うばかりさ。

それでもある時、鉱山事務所で炊事婦を募集するつてんで、誰か知り合いでもないかつて親父に聞いたらさ、富を連れてけつて、富をここから逃してやれつて言うんだ。いやさすがに山で暮らすのは嫌だろうと思つたけど、富に話してみたら天井に頭ぶつけそうな勢いで喜んで、嬉しい嬉しいつて飛びついてきたんだ。思いつき頭殴られたような気がしたよ。三年半の間、女房

になんて酷い目見させちまったんだって。自分の馬鹿さ加減に心底呆れたんだ。

善は急げでその日のうちに石村に挨拶に行つて、次の日には出発したんだ。そりやお袋なんてカンカンだよ。奴隷みたいにしてた嫁が逃げたってき。弟たちもアゴでゴキ使つてた義姉さんの代わりはどうすんだってオロオロしてやがった。

山での暮らしは本当に楽しかったよ。なにしろ富が日増しに明るくなっていくんだ。あんなによく笑つてよく喋る富は、俺も初めて見るほどだったな。

荒くれ者の飯の支度と生活の世話するだけの日々なのに、毎日毎日、今日はこんなことがあつた、誰々がこんなこと言つた、なんて本当に楽しそうに喋るんだ。休みの日に吹上温泉で遊んできた日なんか、次の休みまでずっと、ずうっとだよ、楽しかった、幸せだつて毎日笑つてるんだよ。うん、本当に毎日ね。幸せだ、幸せだつてき。自分に言い聞かせるみたいにな。

結局俺は富を嫁にもらうことばかり考えててき、何のために一緒になるかなんて考えてなかつたんだろうな。苦勞ばかりかけてよ。やつと夫婦になれたなつて思つたけど長く続かなかつたのは、俺のせいで飛びつきりのバチが当たつたつてことなのかもな。

うん、二年前の——五月二十四日だったな。鉬山に来て明日でちょうど一年だつて、その日の朝

に富から言われてき、そりや明日はお祝いでもしなきゃなつて笑つてたことまでは覚えてるんだ。うん、そこから先はダメなんだ。覚えていないし、思い出す気もない。

気がついたら吹上温泉で拓一や耕作と朝飯食つてんだ。したら懐に新聞紙で包んだ骨が、灰になつた骨が入つててき。いやアレは本当にたまげた。「誰の骨だこりゃー！」つて。耕作から姉ちゃんの、富の骨だつて聞いてまた氣い失つたもな。

何日か後にどうにかカジカの沢まで戻つてき、さすがに追い返されはしなかつたけど、俺が生きてると知つてお袋は仰天してたよ。「ありやあ！半分かよー！」つて。見舞金が二人分貰えるつてホクホクしてたらしいからな。いやお袋らしいなつてぐらいでき、驚く氣力もなかつたし、何てこともないよ。

まあ俺もすつかり弱つててき、畠仕事ができるわけでもないから邪魔だつたらうに、むしろ向こうは向こうで辛抱したんだらうと思うよ。それでも村葬の日の夜だつたかな、いい区切りだと思つたんだらうね、いつまで居る氣だ、そろそろ出ていくか金入れろつてお袋や弟たちに責められてね。まあ頃合いだし見舞金の一部でもあれば立て直せるかなつて思つたんだけど、そんなもん全部使つちまったから無いつて言われてき。もうどうでも良くなつたよな。面倒臭くなつてまた硫黄鉬山にき、別の鉬業所に転がり込んだんだ。

しばらく死人みたいな生活しててね、山からは一切下りないし村の復興だつて正直どうでもよ

かつたんだけど、ある日若い衆が休みで市街へ下りた時にき、面白半分て復興反対集会みたいなもの聞いてきたんだと。そしたら何百人と集まつてる反対派に向かつて、農家の若いのがたつた一人、堂々と復興を説いてその反対派を唸らせたつてんだ。聞けば三重団体の者らしくてき、自分も被災者だつていうんだよ。確かにあそこは立派なのがはいけど、それでも俺たちと同じ人間だよ。歳も俺よりずっと若いようなのがき、ほんの半年前にあんな目に遭つてるのにな、しつかり前向いて胸張つて生きてるんだつてよ。俺は自分の膝ばかり見てるつてのによ。

それを聞いてきた若い衆も翌日には荷物まとめて山を下りていったよ。自分も青年団に入つてあの男を助けるんだつてな。誰かも知らないのにき。

でも俺はまた頭殴られたような氣がしてな。下向いて生きていても腹は減るし屁も出るつてのに、俺は一体何を愚図愚図してんだつて。

それでようやく俺も顔上げてよ、前に進まなきてやつてき、いや急につてわけにはいかないよ、少しづつ、ほんの少しづつき、一寸でもいいから前に進もうつてき、そう思えるようになったんだよ。

まあそれから二年もかかちまつたけどき、俺今度、新しく嫁もらうことになつたんだ。その人も泥流で旦那から子供から、何もかも流された人でき、しみつたれた顔してたんだ。似たもの同士つてやつだけけど、二人でいりゃ何とか乗り切れると思ふんだよ。

さすがに山で暮らすのは怖いって言うし、カジ

力の沢にも帰る場所はないしき、俺思い切つて歌志内の炭鉱で働らくことにしたんだ。そりや危ないし辛い仕事さ。何十人も死ぬような事故がしょつちゆうあるよな。だけど俺は体が丈夫なぐらいつしか取り柄もないしき、硫黄も石炭も、誰かが採りに行かんと皆んなが困るんだらうさ。俺はとりあえず、俺が今できることをやるって決めたんだ。

明日朝早くに上富良野を発つもんでさ、今晚にでも石村の家に挨拶に行こうと思ってるんだ。いや、合わせる顔なんてないよ。実は何日も前から行かなきゃって思ってたんだけど足がすくんでさ、とうとう今日になっちゃったんだ。

向こうからしてみりや俺なんて、富を死なせた上に碌に連絡もしないでよ、ひよっこり現れたと思つたら新しい嫁もらつて村を出るなんてさ、出鱈目もいいとこだよ。拓一にぶん殴られるかもな。富のお袋さんなんか初めて会うつてのに、なんて話すりやいいんだかさっぱりわからんよ。まあ、まともに喋れる気もしないし、俺の決心なんて並べたところであだの言い訳だもんな。言わなきゃならんことだけ伝えて帰ってくるよ。逃げるようなもんだけど、勘弁してもらえるかかな。

よし、じゃあ行ってくるよ。長いこと話に付き合わせて済まんかったな。

うん、まあ、我ながら不恰好だけど俺はこれからも生きていくよ。生き残ったからには、とにかく生きていくよ。

一九二八年九月某日 武井隆司(28)

(四) 石村修平 C.V.:内野聖陽

「今年は謝らにやならんことがあつてな」

兄の急逝から明日でちょうど十五年、来年は十七回忌を迎える。

石村修平は毎年この日に、二メートル近く積もつた雪を漕ぎ進み、薯畑のやや奥、学校があつた沢の出口に面し十勝連峰を一望するこの丘を訪れている。亡き兄に一年の報告と、兄弟水いらずの対話—のようなものをするためだ。修平に似合わない感傷的な習慣を周囲に知られぬよう、あえて命日を避け、前日の二十日、最後に兄と言葉を交わした二月二十日にこの場所を訪れることにしていた。

十五年前、兄の義平が冬山造材の事故で亡くなった時、義姉の佐枝は三十一歳。石村家は大黒柱を失つた悲しみの傍で、四十九日を待たずに畑仕事が始まってしまふという現実と直面していた。十一歳の富はともかく、ようやく二年生になる拓一はいくら何でもあたま数には入れられない。幸い父の市三郎や母のキワは現役と違わぬ歳だったので、柄沢の奉公人である田谷のあんさんや部落の皆の手助けを得ながら何とか畠仕事は

維持できたが、義平が交渉し、その春から広げられるはずだった小作地の話は無念にも立ち消えとなつた。

次男である修平が分家できたのも、交渉に長けた義平があらかじめ方々に手を尽くし、狭い沢合のカジカの沢の田んぼと小高い丘の上にある畠を三町歩ずつ、どちらも農地として条件は良くないが合わせて六町歩を都合しておいたおかげだ。義平は弟の高い資質を踏まえ、多少条件の悪い土地ではあつたが来るべき分家の日に備えていたのだ。

修平は農業に関しては天性のものがあつた。極めて勤がよく、新しい技術も易々と取り入れ、他の農民が教えを乞うほどであった。市街の鍛冶屋—後に世界的農機メーカーに成長するのだが—などは新しいプラウを試作することに修平の意見を大いに取り入れた。

十年ほど前、後継に恵まれなかつた隣家の小作仲間が離農し、間もなく居抜きで芦別から来たという大家族が越してきた。後に姻族となるその家族の父親は目も当てられぬほど不器用であったが、長男は体軀も畠仕事の勤も良かったので、修平は惜しみなくその経験と技術を伝えようとした。

しかし感覚に大きく委ねる修平独自の、ある種天才的な農法を他人に理解させることは至難の業であった。なぜ伝わらないのか修平自身も理解できずに苛々を募らせ、つい元来の口の悪さも目立つようになっていった。辟易したのか結局その

長男は数年で畠を離れ硫黄鉱山で働らぎ始めた。口うるさく当たりすぎたかと修平は自らを責め、自己嫌悪を深めていった。

また、今では誰も知る者はないし本人も自覚しないが、実は修平は、勉強が良くできた。

北海道入植前、まだ修平らが福島で暮らしていた頃、学校で垣間見せる修平の頭の回転の速さは兄の義平さえ感心するものがあった。ただ修平は如何せん「産声からして不服そうだった」と母キワに言わしめるほど、すじ金入りのへそ曲がりだった。悉く教師に反抗し腕にも膝にも鞭の跡を絶やしたことがない。小学校の四年間、修平の学力に見合う評価をした教師は皆無であったし、輪をかけて優秀な兄を見て育った修平自身、自分が秀でていることも理解できていなかった。

同様に修平は、実は他より秀でている己の特性も、兄と比べることによって過小評価することが往々にしてあった。

修平の自己評価が低いことは義平も気にかけていたし原因の一端が自分にあることも理解していた。兄はことあるごとにそれを正そうとするのだが、へそ曲がりの弟は決してそれを容れず、そのやりとりは二人が大人になってからも続いていた。

ある日、四人目が生まれたばかりの兄がいつまでも危険な冬山造材で働らいていることを諷める弟に義平は「俺に何かあってもお前がいるじゃないか」と笑った。

冗談じゃねえ！俺なんか兄貴の代わりが務まるかよ！という、何十、何百と繰り返された

恒例のやりとりの翌日、兄は冬山に命を落とした。

兄の代わりなど務まらない。だが、そう努めねばならない。修平は兄が遺した幼い子供らを護り、導くことをいつの間にか己の心に課していたが——現実には果たしてどうであったか。

昨年の六月、甥の拓一が暴漢に襲われ大怪我を負った。だが修平はその事実を、町の噂として友人の田谷仙太から聞かされたのだ。さらに拓一の足は変形治癒となり二度と元のように歩くことはできなくなったのだが、そのことさえ退院の日に、拓一の痛ましいその姿を目にするまで知らされることはなかった。

命日を明日に控え、修平は十勝連峰を望むその真つ白な丘の上で、亡き兄に泣いて詫言。やはり兄の代わりは務まらなかった。拓一や耕作にとって自分は、相談することも泣き言をこぼすことも、頼ることもできない叔父だったということだ。悔しいわけでも腹が立つわけでもない。ただ、自分の不甲斐なさが情けなかった。子供たちや亡き兄に申し訳なかった。

「だから言ったろ、俺なんか兄貴の代わりは無理なんだってばよ」

短気で、へそ曲がり、口うるさい叔父に誰か心を開くというのか。自分の気性は百も承知だからこそ思い当たる節は山ほどにあった。

修平は拓一や耕作らの前で彼らの母佐枝に対する不満を口にするのが多々あった。今にして思えば長く離れて暮らし思いを募らせる母への誹謗は子供たちの心をひどく傷つけていたであろう。

拓一や耕作らの母、佐枝が札幌に旅立つ日、大人たちで示し合わせ、米の飯を食わせるという名目で子供たちを修平宅に遊びに来させ、その間に荷造りし市三郎とキワとで佐枝を駅まで送り出した。

「何も知らんで家に帰って母親が居ないのはあまりにも可哀想だ」と、妻のソメノと頃合を見計らって子供たちにその事実を伝えた。血相を変えて飛び出して行った子供たちの後ろ姿が今も忘れられない。

ただ、修平は佐枝の札幌行きには一貫して反対していた。

「何で嫂さんが！」

子供を寝かしつけた後の石村家に修平の声が響く。あらぬ噂を立てた深城は許さない。だがなぜ嫂さんが出ていくのだ！何のために!?手に職を持たせる、深城や世間の目から逃れる、いくら理由を並べられても、父親を亡くした子供を置いてさらに母親が出ていく理由としてはどれも理解し難いものであった。

また、佐枝自身が肋膜にかかり修行が中断した時さえ家族に迷惑をかけるからと帰らず、赤の他人に世話になっていたことも大いに不満であった。頼らない、迷惑をかけないなら何のための家

族なのか。家族とは一体何なのだ。

子供たちの寂しさを案じたにせよ、ことあるごとに、修平は独りよがりな佐枝への不満を吐き出し続け、子供たちを深く傷つけていたのだ。

心当たりはまだまだある。

修平は子供らをごとあるごに怒鳴りつけた。もちろん短気な気性によるものが大きいのが、誰かを、ましてや子供を教え導くことに関してはその素養を一切持たされなかった修平にとつてはそれ以外に方法がなかったのもまた事実ではあるが。

ある日、自分たち小作農家がこんなにも貧しいのに、地主が労せず多額の収入を得ていると、拓一や耕作が国のあり方を批判したことがあった。誰でもそう思う、至極真つ当な考えではあるが、時代は決してそれを許さない。

修平は震えるような気持ちであった。正しい主張が必ずしも正解なわけではない。若い兄弟の真つ当な主張は本人、いや一族の存亡さえ左右することがある。義平であれば、兄であれば穏やかにそれを説き、子供たちの信念を尊重しつつ安全な場所に導いたであろう。だがそれは修平に持ち合わせのない能力であった。

修平はただ怒鳴るしかなかった。理不尽でもなんでもいい、激怒する者がいる。逮捕、投獄される現実がある。ただそれだけ伝わればよかった。二度と、甥の口からそうした言葉が出なければそれで良い。もちろん修平は本能的にそうしたま

で、綿密に考えての行動ではなかったのだが、結果的に修平の「理不尽な」激昂は何度もこの兄弟を、特に耕作を社会主義者の誹りから救うこととなった。もともとそれは修平はおろか当の耕作さえ気づくものではなかったのだが。

また、中学入学を諦めた耕作に向けて修平は「百姓の子に学問は要らん」「貧乏人の分際でもんがある」と言い放った。農家に学問は要らぬ。随分と旧態然で愚かな叔父と映ったろう。

だが現在の農業、ましてや小作農家にとつて学問が直接的に役に立つことはほぼ無いし、農家を継ぐ子が畠仕事もせず勉強ばかりしていたら笑われるのは紛れもない現実だ。

もちろん、学問がいかに重要かを知らぬ修平ではない。彼を育てたのは石村市三郎だ。いずれ農家個人が、試験場の学者ばりの農学を身につけることが常識となる日さえ訪れるであろう。だが、今ではない。どんな理想を並べても、現状、上富良野の開拓農家は鋤を持ち続けなければ即刻飢えてしまうのだ。

何年前か前、市街の学校に札幌から新任の教師が着任した。情熱溢れる都会育ちの若い教師は農民にこそ教育が、学問が必要と熱弁した。

しかし残念なことに、明日も知れぬ貧しい小作農家に対して、市街の者が米の飯を食べながら「鋤を置け、教科書を取れ」と説いても響くはずもない。一言居士の修平はなおさら黙つていなくなった。

若い教師は顔を真っ赤にして反論したが口の達

者な修平らにとっては玩具のようなものだ。

もちろん若い教師の言わんとすることは判っていた。だが、その教育改革は今、北海道の貧しき開拓農村から始められるものではないのだ。

一方でまた別の現実もあった。兄の横顔を眺めながらよく考えたことである。兄が中学や大学に入っていたら、果たして農民としての人生を選択したのだろうか。その選択が許されたのだろうか。現実として、高い学歴を身につけた者は農家にはならない。いや、なれないのだ。

農民にも教育を——口で言うのは簡単だ。だが兄に限らず、吉田村長や小林八百蔵をはじめ、この村を政治経済共に牽引する優れた農民の存在は高等教育と併存し得たのか。どちらも大学でも出ていれば今頃東京や札幌で高い地位を得て暮らしていたら。甥の耕作とて同じだ。あのまま中学に行っていたら抜群の成績で卒業し、何らかの支援を得て大学にでも進み、国を動かすような要職に就いたかもしれない。

高等教育は「優秀な農業者」を村から奪う。残念ながらそれも現実だ。

耕作の素晴らしい学力を目にした視学が、耕作が農家の子であることを知り「なるほど、惜しいなあ」と漏らしたという。「惜しい」には様々な思いが込められていたが、農家と学問の関係はそれほどまでに、言い尽くせぬ隔たりが存在するのだ。

「はは、何を言ってるんだ俺は」

兄に謝ろうと訪れた丘で、いつの間にか甘えるように言い訳を思い並べている自分が急に可笑しくなった。修平はにが笑いしながら立ち上がり、尻についた雪を払い落とした。

歳こそ一人前ではあるが、石村家の子供たちからはまだまだ目が離せない。拓一も耕作もどうやら近い将来、かなり難儀な結婚問題が待ち構えているようだ。拓一は曾山の娘を、耕作は深城の娘を嫁にもらいたいと言う。

「なんとまあ、兄貴の倅どもは揃ってややこしいことを吐かすもんだ」

欲の権化のような深城から、稼ぎ頭である福子と愛娘の節子の両方を奪うというのだ。これから何十年と深城の深くどす黒い怨嗟を背負って生きていくというのか。そしてその深城が耕作の義理の父に、ましてや母の佐枝にとっては、かつて己を手ごめにしようとし、家と、家族と離れるきっかけを作った張本人と姻戚になる、ということだ。とても甥っ子たちの幸せな未来を想像することができない。世の親とは果たしてこのような結婚を認め祝福するものだろうか。

もつとも、いくら考えを巡らせても、修平の頭に浮かぶのはいつか節子にぶつけたようなあの言葉ぐらいなものだ。

「嫁をもらうときは親の顔を見れ」

——兄ならこんな思いやりも工夫もない馬鹿な台詞は吐かないであろう。兄ならきつとこのやや

こしい問題を誰も傷つけずに巧くきばくのだろう。

「もうやめた、無理だ無理だ」

修平は兄の死以後、柄ではないと知りつつも、“親代わり”というものに心が囚われていた。誰しも人の代わりなどできないのだ。皆それぞれに与えられた役割もあるのだろう。十五年もかかってしまったが、拓一の大怪我をきっかけにようやく目が覚めたような気がしていた。

「俺はさしずめ、間抜けで短気で口やかましくて物分かりが悪くて面倒臭え叔父、つてところか。確かに誰にも代わりはできねえな」

丘から十勝連峰に目を向けると、稜線を這うように低く照らす太陽の光が雪原に反射し、目も開けられぬほどに眩しい。ピシリと音を立てるに凍てついた空間では水蒸気が凍り幻想的に細氷が広がっている。

「お前がいる」

思い返すと兄はいつもそう言っていたが、決して「代わりがいる」とは言わなかった。修平は兄の言葉を反芻し、濛々と煙を吐く十勝岳に向かってつぶやいた。

「おう、俺がいるぞ、兄貴」

遠くで、二番列車の汽笛が鳴った。

一九二八年二月二十日 石村修平(45)

(五) 益垣公三 CV:津田寛治

益垣の苛々は頂点に達していた。元々の癖である貧乏ゆすりが一層激しくギシギシと職員室の古びた床板を鳴らす。同僚の花井澄子は益垣に顔が見えないよう背中を丸め眉根を寄せた。柔和でやや気弱な花井が他人を嫌ったり軽蔑したりすることはない。陰険で狭量な益垣を除いては。

陰険で狭量——そうした辛辣(ではあるが的確であった)な評価を受ける反面、彼の教育に対する姿勢は意外にも真摯なものであった。

自発性や個性を尊重し始めた若手教育者の時流とは一線を画しやや保守的な教育方針ではあったが、諸外国と並ぶ国力を養うことも、小さな村を豊かにすることも同様に、必要なのは教育に他ならないと確信していた。

父と同じく北海道庁の官吏である長兄、第七師団の主計中尉である次兄らと常に比較されて生きてきた。大学教授ならまだしも小学校の教師になりたいと、師範学校へ進学したいと打ち明けた日の、関心の薄さを隠そうともしない父の態度が脳裏に焼きついていく。

札幌を遠く離れ、辺境の村に赴任が決まった時はむしろ、己の理念の正しさを父や兄に知らしめる好機として意気揚々と駅に降り立った。

私の手でこの田舎の、上富良野の子供にも高い教育を——

益垣は高等科を卒業してなお九九ができない者がいるという現実を正面から受け止め、特に算

術の指導に力を入れ、数年後には校内外でその熱意と指導力を評価する声も高まっていた。だが一方で、村外れの小さな分教場の教師の評判を耳にすることが増えていることを看過できずにいた。その男、菊川政雄教諭は自分より五つも年下の農家の倅で、しかも教員免許さえ持たぬ代用教員だという。

「農家の倅」

それだけで見下す理由としては十分だった。益垣は農家が嫌いだ。しかし初めからそうだったわけではない。

上富良野に赴いてすぐ、農家の子の進学率が極めて低い現実を憂慮した益垣は、農家も多く寄る市街の集会で教育と学問の重要性を説いたことがあったが：「まずは食うもの作らんと学問も何もねえ」「なんたら金次郎じゃあんめえし」「勉強したらあんたみてえに頭でつかちになるだけだべさ」

農民たちは益垣を囁し立て、嘲笑した。

——農家に学問は不要である——

彼らが無知で愚かなのではなく、悲しくもそれはこの時代の現実であり常識であった。そしてその常識こそ益垣がその確たる信念に基づき打ち破るべき殻であったはずだが：彼はただ、狭量であった。以来益垣は、農民に対する偏見を隠さなくなつた。

去年の三月、益垣にとって忘れ得ない、苦々しい出来事があった。菊川の教え子の石村耕作が旭川中学に一番で合格したという。石村は農家の

子だ。自身も六年生を受け持ち、どうにか二人を合格させてはいたが一番どころか中位以上での合格は彼の悲願でもあった。こどもあろうに農家の倅が農家の倅を教え導き、札幌育ちの益垣の尊厳を粉々に打ち砕いたのだ。益垣が菊川と石村の師弟に深く暗い嫉妬の念を抱くのは自然なことであつた。

その石村がどういふわけか中学に進学せず高等科に編入し、なおかつ益垣が受け持ちになるといふ。

石村を憎んでいるわけではない。ないが、益垣は持て余していた鬱憤を無意識に石村にぶつけていた。一方で石村が活躍するたびに、褒められるたびに苛々を募らせた。それは純粋な嫉妬心でもあつた。

石村を受け持って二年目の夏、校長から石村を卒業後に代用教員として雇う予定であることを告げられた。益垣は憂悶した。菊川が石村を旭川中学に合格させ自分との格の違いを見せつけたあの悪夢が、石村によって再現されることを心底恐れた。しかしそれが免状を持たぬ代用教員であることが、石村の身分が紛れもない格下であることが、辛うじて益垣の正気を保たせた。

しかし今日、同僚の花井澄子が、石村耕作を師範学校に通わせるべきだ、費用は私が持つてもいい、と言いつ出した。

我慢の限界だつた。

石村が師範学校を出、自分と同じ正規の教員となる。これは益垣にとって「並べられる」ことでは

なくもはや「追い越される」に等しい感覚であつた。伏した龍に翼まで与える必要はない。しかし花井をはじめ校長、視学までもが石村を高く評価し、面倒を見ようとするとも益垣の黒く巨大な嫉妬心を大いに刺激した。

思わず花井に詰め寄っていた。一体なんなんだ、なぜどいつもこいつも石村に肩入れするんだ、気でもあるのか？ と。

何より許せないのが、石村に一目も二目も、いや三日も四日も置いてる自分自身だ。高等科二年の子供を、百姓の小倅を畏れ、尊敬しはじめた自分が何よりも許せなかつた。

益垣は貧乏ゆすりをびたりと止め、四時間目の授業に向かつた。石村を何とかして懲らしめたい。だがあの品行方正な男を叱責する理由など、朝からずっと考えていたがそう思いつくものではない。もう何でもいい。とにかく怒鳴りつけてやる！

——大人気ないだつて？ 何を馬鹿な、そんなことあるもんか。あの男に対しては真っ直ぐに、全力で俺の妬みと嫉みをぶつけてやる。

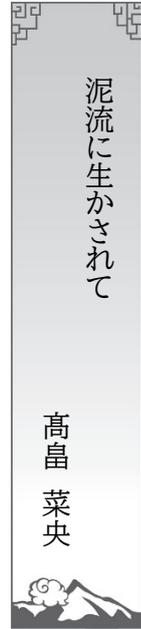
何が悪いというんだ。俺の人生で最も強力な好敵手を無条件で叩けるのは、奴が教え子である今を置いて他にあるまい。

一九二二年十月某日 益垣公三(28)

児童生徒の部

泥流に生かされて

高島 菜央



人間は大自然の前では無力である。しかし、どのような困難に遭遇しても立ち直ることができ、強さを持っているのも、また、人間である。「泥流地帯」「続・泥流地帯」を読み改めてそのような感じた。

貧しいながらも、正直に真面目に生きてきた拓一と耕作兄弟。そんな彼らの平穏な生活を、十勝岳の噴火は一瞬にして奪い去ってしまった。

「丈余の泥流が、釜の中の湯のように沸り、踊り、狂い、山裾の木を根こそぎ抉る。バリバリと音を立てて、木々が次々に濁流の中に落ちこんでいく。樹皮も剥がし取られた何百何千の木が、とんぼ返りを打って上から流されてくる。」この描写を読んだ時に目の前に泥流が迫ってくるようで、とても怖くなった。迫り来る泥流の中、必死で逃げ惑う人々を思うと苦しくなった。

泥流のせいで田畠は一瞬で石河原に変わり、その地は地獄と化した。村中の人が絶望を味わい、土地を去る者も多い中、拓一は復興に取り組み決意をする。そんな拓一の強さはどこからくるのであろうか？ 私にはそんな絶望を味わった時に、拓一と同じように困難に立ち向かう勇気が出るのであろうか？

私は災害にあったことも、拓一や耕作のように絶望を味わったこともない。拓一や耕作も十勝岳の噴火までは貧しいながらも平穏に暮らしていた。その平穏が目の前で崩れていく中で味わう絶望を乗り越える強さはどこからきたのか？

私は小学生時代をアメリカで過ごし、その際九一一と呼ばれている同時多発テロの生存者の方と知り合う機会があった。一人は、その日事件のあったビルに出社しなかった人で、もう一人は救助にあたった消防士の人だ。これは自然災害ではないが、人々の平穏な暮らしが一瞬にして奪われた事件だった。その方々が口にしてたのは、生き残った者の義務と責任ということだ。

自分がその日たまたまそこに行かなかったことで生き残ったことを「運が良かった」ですませていいのだろうか？ ビル内での救助に率先してあたり、戻ってくるのができなかった消防士達は日頃の行いが悪かったからなのか？これは続泥流地帯の中でも生存者達によって語られていたが、運や日頃の行いは関係ないのではないか？

九一一の生存者の方々は、最初、同僚や友人など多くの人々が亡くなった中で、「運が良かった」ではなく、自分が生き残ってしまったことに罪の意識を感じたそうだ。しかし、時を重ねるうち、自分が生かされたことの使命や役割を考え、罪の意識を乗り越えることができたそうだ。そして、一人はカウンセラーになり、もう一人は消防士を続ける決心をした。あの時の悲しみはなくならないが、自分の役割を考え、行動していくことで今生きる意義を感じていると二人共力強く語っていた。

「失ったものばかり数え上げてみても、生きる力にならない。自分に残されたものを、数えて感謝しなくちゃなあ」と続泥流地帯の中で菊川先生も言っていた。

普段、ぬくぬくと生きている私に困難を前向きにとらえ乗り越えようとする、そんな強さがあるとは思えない。だが、日々誠実に生き、「苦難に会った時に、それを災難と思って嘆くか、試験だと思って奮い立つか、その受け止め方が大事」と語っていた拓一と耕作の母のように考えたい。そして、運や心がけの良し悪しではなく、拓一のように試験に立ち向かう勇気を持ちたいと思った。

節子

寺西 紗世



「大人っぽいまなざしで、節子は耕作を見ている。「うれしいわ、わたし。わたしねえ、石村さんにだけは、誤解されたくないかったの。」

節子はとても魅力的な人物だ。節子は大人っぽくもあり、真っ直ぐな子供のような心も持ち合わせている。それは決して人を蔑むようなものではなく、節子の思いやりの心を感じさせるものである。私はそんな節子に憧れた。

節子は年齢からは想像がつかないほど大人っぽい。父親に対抗できる論理力を持っていて、自分に関わっている人々の本質を見ていると思う。このように節子が育ったのは親が経営していた深雪楼の影響だろう。深雪楼にいと、出入りする客を見たり、福子のような芸者たちに寄り添ったりすることが多くあったはずだ。その過程で、節子は様々な性格をもつ人々に出会い、人の心の奥底まで考えることができるようになったのだと思う。耕作と初めて会ったときのきつい目も、耕作のことを理解しようとする姿勢の表れだったのかもしれない。節子はまったく思いやりのない父親を嫌いながらも、「人間らしいことをさせたい。」と願っている。節子は人の本質を見られるからこそ、誰にでも思いやりをもって接することができるのだ。耕作は自分が人に寄り添うことが苦手だからこそ、それができる節子に惹かれたのではないだろうか。

節子は子供のように真っ直ぐで純粋な心を持っている。自分が嫌いな父親に石を投げつけた耕作

に対して「偉い。」と褒めている。心から感動できるからこそ、節子は人のことを褒められるのだ。このような真っ直ぐな心を持ち続けられるのは、父親のような曲がった性格になりたくないという幼いころからの思いが影響しているのだと思う。

父親は妻のことも平気で泥棒呼ばわりして家から追い出すような人物だ。誰のことも愛することができない父親をもっているから自分は人を愛したい。自分に愛する人ができたときには、後悔がないようにしなくてはいけない。そんな使命感があったのだ。それが嫌いな父親にできる数少ない親孝行だと思っていたのではないか。耕作に積極的にアプローチしたり、母親と家出したりした節子の姿がこれを裏付けていると思う。

節子にとっては苦痛だった深雪楼での生活は節子の真っすぐで達観している人格を作り上げた。辛い環境でも、乗り越えることができれば明るい未来が開けてくるということを節子が教えてくれている。

福子と節子の泥流ドロドロ物語

金平糖



とある平和な日、拓一はあまりの重労働の疲れに耐え切れず、魔法の粉(麻薬)に手を出してしまっていた。このまま吸い続ければ体が魔法の粉(麻薬)に侵されてしまう。そこで拓一はこう考えた。「毎日じゃなく週一くらいなら大丈夫だろ。」とすでに頭がおかしい考えに至っていた。

そして数日後、拓一はあのころと比べものにならないくらいやせ細っていた。拓一を心配していた耕作は、何をしてもいいかわからず、ただ、心配するしかなく、耕作も自分の不甲斐なきに病んでいき、拓一同様弱っていった。

二日後、二人を心配した福子と節子家が家を訪ね、中に入ったとき彼女達は衝撃を受けた。見るに堪えない姿で二人は寝ていた。彼女達は急いで布団に駆け寄った。

「拓ちゃん！ 大丈夫?!」

と焦って声をかける福子。と同時に節子も「耕作君！ しっかりして！」

「?!」

節子が異変に気付いた。

「っ！ 死んでいる！」

とそれに続くように福子も異変に気付いた。

「心臓が止まっている！」

二人は固まった。数日前まであんなに元気に暮らしていた二人が、知らないうちに衰弱し、死んでしまっていたという真実が二人を絶望へと誘った。

昭和三年 七月十九日上富良野町

拓一 耕作 衰弱死

葬式後、二人は静かな道を歩いてきた。とても話せる空気ではなかった。節子の口からふと言葉が漏れた。

「なんでさきにいつちゃったのお?!」

と唐突に涙声で叫んだ。叫んだというより絶叫に近かっただろう。それくらい酷く、鋭い声だった。隣にいた福子は驚いた表情を浮かべると思っただろう?

「うるさいなア」

福子が言った。それは彼女から到底出る言葉ではなかった。

「大体あんたがたてたラブラブ計画は大失敗じゃない! 耕ちゃんも、拓ちゃんも死んだ! 私の大切な人がアア!」

福子が絶叫した。

節子がたてた計画とは、拓一を麻薬で蝕ませ、耕作を精神的に疲れさせ、そこに女二人が現れ看病するという計画だ。説明が終わり物語が進む。

「全部、全部全部全部あんたのせいだ。あんたのせいでエエエエ!」

福子の感情が壊れていく。そして節子もひるまず、

「いいえあなたのせいよ。最初は一人でやろうとした。でも話を聞かれ仕方なく入れてやった。全部あなたがこの計画に入ってきたせいよ!」

二人の感情がぶつかり合う。

「もういいわ、そんな事言うなら!」

節子が森林に向かった。

「まやか!」

福子は焦って追いかけた。夜の森林を二人がかける。しばらくすると木造の家が見えてきた。

節子が急いでドアを開け家に入る。すかさず福子も家に飛び込む。節子が一人分入りそうな袋を持っている。

「それに触れるな! 汚れる!」

福子が大声で言う。節子が袋から何かを出す。その何かの正体は拓一の遺体だった。

何と節子と福子は、「二人の遺体は私たちが埋める」と皆に言い、その後遺体を木造の家に行ったのだ。

「この遺体は大事でしょう? 汚されたくなかったらここで自害しなさい!」

と刃物を持ち、遺体を切ろうとしていた。

「…分かったわ、望み通り死ぬわ。でも、私は自害するための刃物を持っていないから、その手に持っているのを貸してくださいませんか?」

と福子が言う。節子は、

「良いわ、貸してあげる」

と、あっさり交渉を受けた。

節子が六歩半位歩いた瞬間、福子がポケットから鋭く研がれた石ナイフを出し、節子の首目掛けて切った! 節子はギリギリ反応出来ずそのまま切れられ首が吹っ飛んだ。

節子の首を切った福子は拓一の傍に歩いていき、隣に座る。

「拓ちゃん、ごめんね、次こそは拓ちゃんを幸せにしてあげるからね。」

と言い、節子が持っていた刃物を持ち、自分に刺した。

その次の日、村人がたまたま見つけた家で、男

性二人の遺体と、女性二人の遺体が血まみれで見つかったという噂が村中に広がった。村人達は、「崇りにあったんじゃないのか」と言っているものが多かったが、結局真相は分からず、闇の中へと葬られたのだった。

エンド①ずっと永遠に

エンド②????????

エンド③????????

涙

健康茶代表 烏龍茶



拓一や耕作達に大切な商売道具の福子連れに逃げられて、深城は腹が立っていました。深城はどのような様子にして福子を取り返そうかと考えました。考えた末に出てきたのは、耕作や拓一にどこに逃がしたか聞くことでした。

深城は自分が聞きに行くのでは絶対に教えてくれないと思ったので、富良野の親分に力を借りようと考えました。

そしてすぐに富良野の親分のところに行きました。そこで深城は

「自分の商売道具が上富良野のガキに攫われた。手を貸してほしい」と言いました。博打中の富良野の親分は、
「自分で逃がしたんなら自分で探せ。俺は助ける気はないぞ。」

と言いました。

深城は富良野の親分が言った言葉にうんざりしました。そして深城は「もういい」と言って、その場を立ち去りました。

頼みの綱の富良野の親分に見放されて、帰る途中に沢山愚痴を吐き、そして冷静になって、どのようにして耕作や拓一から福子の場所を聞か考えましたが、方法がどうしても見つからず、これからのようようにして福子の場所を見つけようかと考え続けました。その時に、節子が福子を逃がそうとしていたので節子に聞くかと考えました。

深雪楼に帰ってから、深城は節子に話を聞か

うとしました。ですが、どこを探しても節子が見当たりません。そこで深城は福子と節子は一緒に逃げたのではないかと考えました。

自分の娘もいなくなってしまったので、より一層深城は腹が立ちました。もう我慢できなくなった深城は、耕作と拓一のところへ行きました。耕作と拓一は二人そろって、なんで深城がここに来たんだという顔をしました。

深城は来てからすぐに
「小菊と節子はどこに行つたんや。」と言いました。耕作は

「絶対に教えない」と言いました。深城はもつと腹が立って耕作を殴ろうとしました。耕作は、深城のパンチを躲しましたが、耕作にパンチが当たってしまいました。当たった反動で耕作がふらついてるところを深城はまた殴ろうとしました。その攻撃を拓一が耕作の身代わりとして受けました。そこでもう一度深城は、

「小菊と節子はどこに行つた？」と言いました。だが拓一は、「二人の居場所をいうくらいなら死んだほうがマシだ。」と言いました。

腹が立っていた深城は、拓一を殴りました。そして、その瞬間を佐枝は見てしまいました。佐枝は自分では何もすることができないので、旭川の佐野先生の所に電話をしました。その電話を聞いてしまった福子と節子は助けに行かないかと思いついた上富良野に戻ろうと考えました。ですが、上富良野に行くことは、佐野先生に言うこと止められる可能性があったので、置き手紙を置いて上富良野行きの電車に乗っていきました。深城は、拓一と耕作を殴って機嫌が悪くなり、

「このままで済むと思うなよ。」

と帰って帰っていきました。深城が帰った後に母が家の中からきて、拓一と耕作に

「殴られたところはいたくないかい？」

と聞きました。拓一と耕作は「少しだけ痛いけど大丈夫。」

と言いました。そして、母から

「拓一と耕作のことを心配して佐野先生のところへ電話したんだけど、急に福子と節子がいなくなったから、もしかしたら上富良野に帰ってきているかもしれない。」

と言われました。拓一と耕作は

「深城と会わせないように上富良野駅まで迎えに行こう。」

と話し合いました。

その頃、上富良野駅についた福子と節子は石村家に向かって歩いていきました。ですが、その歩いて行くところを富良野の親分が目撃しました。一度は深城を見捨てた富良野の親分ですが、急いで深城の所へ向かいました。親分から話を聞いた深城は、

「福子と節子が上富良野にいるらしいな。」

と言いました。

深城は、急いで、上富良野駅の方へ向かっていきました。

上富良野駅に行く途中で急に深城が足を止めました。その深城の視線の先には福子と節子がいました。深城はすぐに福子に声をかけました。

「小菊、今までたくさん悪いことをしたのは謝るから、もう一度もどつてこないか？」

その言葉に福子は、怯えていました。

深城が怯えている福子を無理やり引っ張ってい

こうすると、節子が

「お父さんその手を離して。福ちゃんは深雪楼が嫌だから逃げだしたんだよ。その気持ちわかってよ。」

と言いました。深城は娘に止められて、腹が立って遂に自分の娘に手をあげてしまいました。

ちやうどその時に拓一と耕作が来ました。

それを見た拓一と耕作は怒りました。

「なんで自分の娘なのに手をあげられるんだ。」

と耕作が言いました。その言葉に反抗して深城は

「逃げ出すのが悪いだろう。何ならお前たちだつて店の商品持って行ったんだ。お前たちもいわば盗人じゃないか。」

そういわれて拓一と耕作は何も言い返せませんでした。

深城は福子の腕を握ったまま、深雪楼の方へ歩いていきました。福子は何とかして逃げようと力を込めますが何もできませんでした。

ところが、福子が諦めたその瞬間に、また十勝岳が噴火したのです。

深城が十勝岳の方を向いているときに福子は深城の手を振り払って逃げることができました。

深城は、小菊一人より店の方が大事なので、福子を置いて深雪楼へ走っていききました。拓一たちも再び噴火するとは思っていなかったので腰が引けていました。

そこで節子が、

「早く逃げないと。」

といった言葉でみんなが立って走って逃げていききました。

だが泥流の速さは以前に起きた時の速さとは桁違いの速さで拓一たちを飲み込んでいきまし

た。そして、深雪楼に行った深城も行く途中に飲み込まれてみんな亡くなってしまうました。

みんな泥流に飲み込まれ、拓一や耕作、福子、節子、母の佐枝、そして深城も亡くなりました。

深城は、さまざま悪事を犯したので天国には行けずに地獄へ行ってしまうて、拓一たちはたくさん良いことをしたので天国へ行きました。そこで、良子は初めて母に会って髪を結ってもらって良子は喜びました。そして、拓一は福子と、耕作は節子と天国で仲良く暮らして、幸せになりました。

深城と石村の家族の愛の違い

ダオ

深城の家庭の愛はゆがんでいる。父親は損得のことしか考えない。店の商品である女性の価値がなくなれば捨てそうな冷酷な人間。

しかし、深城の妻であるハツはとても良い人だ。深城のことが好きではないのに、お金によって深城の妻になり、生きるために深城に従ってきた。しかし深城に捨てられて、生きる方法が限られた。深城とは違って、優しく強い心を持った人だとわかる。

兄の金一は深城と同じ人間かもしれない。小説にはあまり描かれていない。だが、母親であるハツが追い出されそうになってもその場をただ眺めていたと書かれている。もし、父の女性の扱いを見て育っているとしたら、きっと父みたいに女性を物として扱っだろう。だから福子は金一の嫁になることを嫌がっていたと考えられるかもしれない。

節子は心の強い人だ。小説では周りから深城の娘も悪い人だというその偏見から負けずに立派な人に成長した。そして節子は、深城のことを嫌っている。耕作の事が好きだった節子は、自分は深城のような人間ではないと必死に伝えた。ここから、とても芯が強く人に意見が言える女性だと分かる。

一方で、石村家の愛は深城の所と違って真つすぐな愛がある。母親である佐枝は身なりが美しく苦勞したが人前では泣いたり、悲しんだりしない人だ。とても強くて優しい人だ。

姉の富はとても心が優しい人だ。自分のことより、耕作のことを心配したり、いい人であることが描かれている。

兄である拓一は好青年だ。とても優しく、なにより福子のことを一途に思っており、弟の耕作や妹の良子とも仲が良い。泥流で流された田畑を復興しようとするほど心の強い人である。

弟の耕作は非常に頭がよい。頭がいいと言われているが、裏では苦労していることが小説でも描かれている。そして耕作は最初、節子に対して深城の娘だから……と偏見を持っていたが、その間違いに気づくとすぐに謝罪する素直な人だ。

妹の良子はとても女の子らしい人だ。母である佐枝が帰ってくると知った時の行動がともかわいらしい。母親に早く会いたくて待ちきれないことが描かれている。そこから、素直な人で小さな事でもとても喜ぶ人だと読み取れる。

最後に、両家を比べた時に一番分りやすいと感じたことは親の存在とその環境だ。これは現代でも通じていることかもしれない。貧しい家庭でも、子に愛情を込めて育てているとしたら、その子は立派な人になるだろう。逆に裕福だが、子に愛情を込めないで育てていると、その子は、何事にも無関心な人になってしまうだろう。

しかし、節子はこのケースに当てはまらない。おそらく、母親のそばで育ったからだと考えられるのではないだろうか。生まれ育った環境が人間に影響することは、昔も今もある意味、変わらないのかもしれない。

昔と今とで変わったことは、中学校に進学する際に、授業料免除や生活保護、支援金など、金銭

面の援助を受けられるようになったことだ。昔よりも住みやすく生きていきやすい時代になった。もし、現代に深城や石村の家族が存在して、噴火を経験したとしても、現代で使われている医療技術等で、きっと昔よりも長生きするだろう。もししたら、拓一と福子が結婚したり、耕作と節子が結婚する未来があるのかもしれない。

皆さんは、泥流地帯を読んで当時の環境、「愛」とは何か、家族の在り方について何を思いましたか？あまり深く考えていなかったことに視点を置いて考えてみると、現代の環境、家族のありがたさに気づくのではないのでしょうか？

拓一と福子の心情

かみきゆうた

私はこの小説を読んで、自分だったらすぐ自分の気持ちを伝えるが、耕作や拓一はなぜ自分の気持ちをすぐに伝えられないのだろうかと思議に思った。

なぜなら、耕作は福子と節子のどちらが好きなのかかわらないし、拓一は福子のが好きなのに思いを全然伝ええないし、福子はいつもネガティブで「わたしなんか」「そんなこと、わたしの口から、言う資格はないわ」などと言っていて、スッキリしないからだ。

耕作は福子から白い石を貰ったり、旭川に逃がすの手伝ったりしていたから両思いなのかと思つた。だが、福子は耕作ではなく、拓一と結婚するはずだ。逆に節子は耕作に対して一途で非常にいいと思つた。

私には付き合って九カ月の彼女がいる。自分から気持ちを伝えた。私の場合気持ちをすぐに伝えられたのだが、拓一や福子はなぜ、思いをすぐに伝えないのだろうかと思つた。特に拓一は演説で沢山話していたのに、福子の前では恥ずかしくなるのは、福子のことを一人の女性だと意識しているからなんだと思う。きっと恥ずかしくて言いたいことが言えないのだろう。

私は、笑顔が素敵なクラスメイトの女の子に恋心を抱いた。もちろん私も彼女のことを一人の女性と見ていたが、付き合う前から距離が近かった

ので、恥ずかしくなかった。そして十二月のある日、彼女を家まで送っている時に告白した。その日は彼女の誕生日で、かなり前からこの日に告白しよう決めていたのだ。その結果、付き合う事ができた。この経験から、言いたいことは、言うことが大切だと思う。

いあいあ深城

深き者



大正十五年五月一日、消えかけの電球、煙で三歩先も目視できない部屋の中。男は万年筆を走らせながら言葉にならない何かを叫んでいる。

大正六年十月一日 最近寝つけない夜が多いため手慰みにこれを書くことにした。

大正六年十月三日 今日、曾山の飲んだくれが「俺の山に山ブドウがどっさりある」と言っていたもんだから明日行ってみることにする。まあ金の足しにはならんが腹の足しにはなるだろう。

大正六年十月四日 小作の小せがれの餓鬼がうちの子の顔に傷をつけやがった。あんな家伝薬とやらで治るわけねえ。明日になつて傷が良くなってなかったら、あの餓鬼もろとも石村の老いぼれを……。

大正六年十月五日 朝、節子の傷の腫れが収まって痛みも引いてるときた。そんなわけないと思つたがあつた秘伝役は、中々効くらしい。

これは売れば金になる、と思ひ早速曾山の山に素材を取りに行った。ワシには、薬剤の知識はないがそこで一つ考えがある。秘伝薬の材料は、秘伝薬を作る石村の家の近くにあるに違いないと思ひ、家の周りを探しに行った。見つけた草を持てる限り持ってきた。明日早速調べてみるとうよう。

大正六年十月十日 作れども作れども秘伝薬のような物は出来ず。肌はかぶれ、時間も無駄にした。今朝煎つたのが駄目だったら、全て燃やしてしまおう。

大正六年十月十一日 まったく時間の無駄だったが、草を燃やしている中で、燃やすととても香ばしい香りの草を見つけた。これは、不幸中の幸いだと、寝る前にも燻しておくことにした。

大正九年六月二十三日 最近香の効き目が薄くなってきた、庭で育ててはいるが、使う量が増えて、収穫が追い付かん。仕事もあるからこれ以上植えることもできない。また、眠れない夜に戻ってしまった。

大正九年八月九日 金を取り立てに行くつと変わった見た目の男が、いま、金は渡せないが値打ちものをやると、見たことも無い文字で書かれた稀覯本とそれを翻訳したであろう一冊の手記を手渡された。

大正九年八月十一日 渡された手記を読み終えて分かったことがある。この本は、アーカムという町で作られたこと。この本には、何かを呼び出して使役するすが書かれていること。ばかげているとは思ふが、今はわらにもすがりたい状況だ。明日試す。

大正九年八月十二日 本当本当に本当に居た遭つた本当に本当だ……。

大正九年八月十四日 やつと落ち着いた。呼び出した。呼び出してしまった。泥のように蠢くものを。全身に目があるようなやつを。

出してしまったなら、利用するほかない。

大正十二年二月三日 一年と少し掛つたがこの泥の特長がつかめてきた。いつか処分しないとイケなくなつた時のために分かつたことを書いておく。一つ、普段は大きな泥の塊のようだが、小動物程度には化けられる。二つ、話すことは出来

ずてけりりと鳴く。三つ、どんな命令にでもこの本がある限り従う。この様子なら暫らくは安眠できそうだ。

大正十五年四月十七日 泥の中のうち一匹がでかくなつてきて今では、言葉話を話して人間に化けられるようになった。気味が悪い姿でな。そろそろ潮時かもしれん。

大正十五年五月一日

「どうやってこいつらを処理したものか」

深城鎌治は俯き記憶と思考の波に落ちる。

「何度か試してみたが、水で固まらず、刃を通さず、多少の火ではどうしようもない」。

そこで、鎌治は思い付いた。

「そうだ、火なんかよりも強力でバカでかいのが」。

思い付きすぐに行動に移した。蠢く泥たちに十勝岳の頂上まで登り、噴火口に飛び込むよう命じた。そしてひときわでかい、泥の塊に、この本と飛び込めと、あの稀覯本を投げ渡した。

「これでまた、安眠できそうだ」。

そう呟くと遠目に噴火口に身投げしていく泥の塊を眺め、己の完璧さに酔いしれていたのもつかの間、異変は、最後尾のあの本を持たせた奴だった。噴火口に飛び込まず、本を片手に何かを叫んでいるようだった。

「まっすい、逃げねば」

鎌治は意図的に思考を放棄し山を死に物狂いで下っていく。山から離れ足が痙攣して、動かななくなったころ、ふと山の方を見つめると頂上が一瞬日から輝いたかと思うと、

ドン

という轟音とともにゆっくりとそれでも着実

に、溶岩が溢れこの地上に迫ってきている。

それは、雪を溶かし赤くまばゆい光から、底の見えない漆黒の泥流となつて勢いを増して迫ってきている。

「そんな、有り得ない」

鎌治は流れる泥流の中刹那的ではあるが、確実にはつきりと、あの泥たちを見てしまった。

「こんな化け物に殺されてたまるか」

鎌治は、自室に走り机に着くと遺書を書き始めた。

消えかけの電球、煙で三步先も目視できない部屋の中。男は万年筆を走らせながら言葉にならない何かを叫んでいる。

「殺されてたまるか殺されてたまるか……」

「俺のせいじゃない俺のせいじゃない……」

一真孵卵に叫んでいたがふと

「テケ・リリ」

とあの泥たちの鳴き声が聞こえた。

「殺されてたまるか」

とつぶやきながら、棚や机を扉や窓に倒し、荒縄を部屋の天井に括り付け、わっかを作り椅子に乗って首にかけ、椅子を倒した。

(これで化け物共に殺されずに……)

そんな鎌治の心とは裏腹に、窓の小さな隙間から、扉の細いすき間から、タールでできたアメーバ状の泥が、玉虫色の泥が入ってくる

(逃げないと)

そう思うも縄はすでにかけれられ抜け出すどころか、意識を保つのがやつの状態だ。泥が集まり、毛の一本もない、あふれんばかりに膨張した腹がぱっくりと目の前で開き、そこから無数の手

や歯があらわになり、鎌治を覆うように……

大正十五年五月三日 今日も鎌治は仕事にいきしみ、この泥流を利用し儲けを出している。掻き出され集められた泥流の泥の山を前に鎌治は、不敵な笑みを浮かべ、

「テケ・リリ」と高笑いをした。

深城節子の価値観

さかもと



「ああいやだ、わたしがお父さんの子だなんて！金ならいくらでもある。裕福な生活を送っている深城はきつとそう言うだろう。いくら金を持っていたとしても愛は金では決して買えない。それに子は自分の親を選べない。そんな当たり前前のごとは誰しもが分かっている。でもやはり人というもの、無いものねだりをしてしまうのだ。なんでわたしは深城の娘として生まれてしまったのだろう。なんでわたしのお父さんはこんなにも金で全てを支配しようとするのだろう。なんで、どうしてわたしだけ…。そんなことを節子は胸に秘めていたのだろう。」

節子の自立心と行動力にはとにかく驚かされるばかりだ。どうせ深城の娘だと根強い見方をよくされている節子だが、実際はそうではないということもわかる。自分の思いに真剣に向き合っていたり、わぎわぎ耕作の仕事場まで尋ねて自分の思いを伝えたりと普通の人であれば到底できない行動をしている。自分が好意を寄せている人に会いに行つて単刀直入に好意を伝えないところも節子らしい。

「あなたはわたしがお嫁に行こうと行くまいと、そんなことどうでもいいと思うの？」と節子が耕作に向かって言った言葉がある。いかにも耕作に自分のことを好きだと言わせようとしているではないか！ ちょっと節子、積極的過ぎない？」

んなにぐいぐい来られたら引き下がれないだろうなあ。

「わたしより、勉強が大事なのね。」

「いや、あなたにふさわしい学力が欲しいから。」

どうせ深城の娘だろうと思っていたが、自分の気持ちに真つすぐな節子に惹かれていつている耕作。こんなにも積極的に行動をし、自分の思いも面と向かつてぶつけ、父の深城とは顔も声も性格もどれ一つも似通っていない節子。子は親に似るという言葉は覆すような発言と行動をする節子という言葉を覆すような発言と行動をする節子に、耕作も私も心惹かれてしまう。こんなに自分の意志がはつきりとした人がいるんだ！ なんて素敵な人なのだろう。と私は「続泥流地帯」を読んだ感じた。

自分だったら…と視点を変えて考えてみよう。節子のように自分の意志を貫き通せるだろうか。節子のように自分の思いを相手に伝えられるだろうか。節子のようにこんなにも好意を寄せている人に積極的にそして悔いのないように行動に移せるだろうか。考え始めたらキリがない。自分とは真逆な性格の節子だからこそ、私はこの本を読んでどの登場人物よりも深城節子という人物に惹かれたのだろう。自分が節子のようにになりたいとは思わないと全否定するわけではないが、そう思うには少し理解と時間がかかりそう。こんなにも自分に素直に、そして強く生きる事ができればいいなと痛感する。

泥流地帯の本を読んで私は相手に悪く思われ

たり、言われたりしても自分らしく自分の思うままに生きるということとはとても素敵なことなんだということに気づかされた。だが、多くの情報飛び交う今の時代を生きている私たちにはそう生きることは簡単なことではないと思う。SNSが急速に発達している現代社会では、デマや噂に振り回され自分の生きたいように生きることが難しい。節子が自分の意志を貫いて生きられたのは時代も時代だったからなのかもしれない。しかし、人生の半分も生きていない、そして次世代を担う私たちはいくら選択肢を間違えても修正することが可能だ。深城節子と出会って、自分の意志で自分の生きたいように生きようと感じることが出来た。大切なことに気づかせてくれてありがとう、節子。

まんま

ゆうべ

おれが まんまたいた。

ちよつと こげたけど、

父ちゃん おこらんかった。

あんちゃんも おこらんかった。

みそつけて くれた。

うまかったなあ、

おれのたいた まんま。

次の日、五郎の書いた詩が返ってきた。

「五郎のたいためし、うまかったべなあ。先生も食いたかったぞ。あんな五郎、先生もな、母ちゃんがないで育ったんだぞ。そして父ちゃんも死んでるんだぞ。仲よくするべなあ。」

と短評が書いてあった。五郎は石村先生のことを誤解していた。豆腐屋に勤めているとき、客だった兄に、

「母さん病気か？」

と尋ねたと聞き、石村先生のこと苦手だった。母ちゃんのいない哀しきや苦勞のわからない人だと思っていたのだ。しかし、石村先生には父と死に別れ、母のいない家庭で育ったという事実があった。

（おれが炊いたまんま。握って持っていこう。）

後日、五郎が飯を炊いた次の日。昼休みになった。生徒たちが一斉に、

「いただきます。」

と言った。五郎は石村先生の傍に寄った。

「どうした、五郎。」

「先生、これやる。おれがたいたまんまだ。」

五郎がさし出した。

「何？五郎がたいたまんま？」

五郎は恥ずかしかった。

「今日のまんま、こげんかった。」

「そうかあ、うまいべなあ。こつおうさん、五郎。」

手を握られた。五郎は恥ずかしく、自分の席に逃げて帰った。

この日、校庭で写生をした。石村先生は、

「校庭で風景を描くように。」

と言った。しかし、五郎の描いた絵はへ先生の顔だった。みんなが風景を描いている間、五郎は石村先生の顔を見つめていた。五郎はあの短評を読んだから石村先生に心を開いたのだった。

この日は天気の良い日だった。五郎は市街から日進の沢に住む石村先生の家まで一里近い道を歩いて遊びに行った。五郎は石村先生とパッチで遊びたかったのだ。しかし、石村先生は畠で忙しく働いていた。五郎は、昼食を一緒に食べることにできなかったが、それだけでも嬉しかった。その帰り際、

「天気の良い日は、先生は畠だからなあ。すまんかったなあ。」

と石村先生は言ったのだ。

（先生とパッチをするために教室の机に大切な大きなパッチを二つ入れておこう）

と五郎は考えた。

一年前、石村先生が受け持ちになった時、五郎はいつも俯いてばかりいて、決まらなつこうとはしなかった。それが、石村先生も五郎と同じように母がいないと知ってからは石村先生が当直の夜には友だちと一緒に、学校に泊りに行ったこともある。

今日は雨雲が低く垂れ、十勝岳も雲の中、変に陰気暗い日だ。みんなが校門を出て行くとき、五郎は一人、廊下の板壁に背を押しつけるようにして立っていた。足もとにはマントが置かれている。

「何だ五郎、まだいたのか。どうした？」

五郎はニヤツと笑って、

「あんな先生、先生雨降りの日は、畠さでないもな。」

「ああ、こんな雨降りじゃ、畠仕事は休みだな。」

それを聞くと、五郎はこつくりうなずいてマントを着、

「先生、さいなら。」

と、元気よく雨の中に飛び出していった。

五郎は雨の中、一里以上も離れた石村先生の家まで歩いて行くことにした。五郎の父は数日前に中富良野へ出稼ぎに行ったので石村先生と遊びたいと思ったのだ。

（今日は雨で畠仕事は休みだから、先生とたくさん遊べる）

そう思いながら、五郎は歩いている。市街にある床屋や蹄鉄屋、柵屋や農機具店の前を通る。

糶屋がある。風呂屋がある。馬具屋、雑貨屋、飲食店、旅館、時計屋、文房具屋などいろんな店がある。同じ学校の若浜、松坂の家がやっている雑貨屋や質屋もある。深雪楼という店の横には石村先生の働いていた豆腐屋もある。五郎は只ひたすらに歩き続けた。花井菓子屋の前を過ぎる時だけは走った。理由はわからないが、五郎の通う学校の生徒はみんな、この店の前を通るときは走り過ぎるといふ伝統があるからだ。どうもここは花井先生の家らしい。

しばらく歩き続けて、ようやく日進の沢に着いた。石村先生の家がある日進の沢に着いてからも、雨の降りしづく沢の道を、一心に歩いた。

「ドドーン」

「ドドーン」

突如として異様な音が轟く。十勝岳が爆発した。雷鳴とも大砲ともつかぬ無気味なとどろきが、次第に近づいて来る感じた。

「ドドーン」

大音響が迫る。五郎の顔は恐怖に歪んだ。

数日後、石村先生が五郎の家に来た。

(おれに会いに来たのになあ)

と小さくなった五郎を抱きしめた。それを見た五郎の父もぼとぼと大粒の涙をこぼしていた。

襖も障子も破れ、天井の煤けた薄暗い家で、五郎は母の愛を知らずに育った。学校では誰にも馴染まず、家でも一人で米を磨ぎ、ストーブに火を

つけて、飯を炊いていた。米が炊けるまで、膝小僧を抱えて、ストーブの火を淋しく見つめていた。生味噌をつけて食べたりにしていた。

哀れな十年の生涯だった。

泥流

たかしま



皆さんは、三浦綾子さんを知っていますか？私は知りませんでした。今回授業で「泥流地帯」「続・泥流地帯」読んでどこがいいかというとき、大正十五年に十勝岳が大噴火して、突然の火山爆発、何もかも泥流に飲み込まれてしまった。ということがあったんだということがよくわかりました。

またいつか十勝岳は噴火します。その時のために避難訓練に真剣に取り組みます。

私はこの本を読む前は正直読むのがめんどくさかったです。途中からは登場人物の関係や時代背景が面白く、とくに石村耕作と曾山福子のわからないような関係が面白く感じました。

私はこれを読んで石村家の年収は二百七十円で今の金額にして約百三十五万円ということに驚きました。可哀想だと思います。普通に働いても百三十五万円は低すぎです。また中学の年間費用が百円、今の値段で約五十万円、年収百三十五万に対して年間学費が五十万円なのがとてもかわいそうです。これを見て私は今までの学校の費用は何円なのかになりました。だが親に聞いていないのでいつか聞くと思います。

果てしなき泥流地帯

ちよもらんまつばさ



みんな死んだ。祖母も祖父も妹の良子、姉の富も。なぜだ、なぜおれらなんだ、なにが悪かったんだ。行き場のない悲しみと憤りが耕作に襲いかかる。

「うおおおおおおお!!」

耕作の中で何かが切れた。

「なんだ!? 俺の中でいったい何が!?!」

耕作は自分の中で起こる異変に動揺を隠せなかったが、その変化の正体をすぐ知ることになる。「なんだ……? 頭の中に、知らない記憶が……力の名は『真実を見通す目・Truth Of Eye』だ……? だが一体これで何が分かるって言うんだ……うっ!?!」

突然の痛みが耕作を襲った。耕作はその瞬間、真実を見通す目で家を襲ったのが泥流だけではないことを知った。

「真犯人がいるということか……! とりあえず明日、家に行ってみよう、なにかわかるかも知れない」

翌日、耕作は家に戻る道中に体の変化に気づいた。なんと真実を見通す力以外にも受けた能力の恩恵がいくつもあったのだ。耕作の受けたもう一つの恩恵は体が強化されるというものだった。力も当然強化されていて山のようにある泥流もかきわけていけたのだ。

「たしかこの辺りが家だよ……泥流で埋め尽く

されていて大まかな場所しか分からない……そうだ! あの能力の出番だ!」

そう、耕作のもう一つの能力とは目で見た無機物が消滅できるというものだ。そして、耕作は山のようにある泥流を見た。

「はっ……!」

その瞬間、山のようにあった泥流が一瞬にして消えたのであった。

「山のようにあった泥流が一瞬にして消えた!」

だがその瞬間、耕作は異変に気付いた。

「なにもない……なんで……泥流で流されたにしては綺麗になくなりすぎている……」

目に入ったのは、見渡す限りの畑と十勝岳だけだったのだ。耕作が呆然と立ち尽くしていると、ふと聞き慣れた声が耕作の不意を突いた。

「なぜ……? 一帯の泥流がなくなっているんだと思えば……お前の仕事かア! 耕作ウ……!」

「深城!? なぜお前がここに!?!」

「なぜって? おかしな質問をするなよ、当然全部俺がやったからだ……!」

「じゃあ噴火もお前がやったのか!?!」

「噴火は流石に俺じゃあない、ただ噴火するのは知ってたから罫を仕掛けてたんだ、お前らが全員死ぬようにな、まあ運良く生き残ってしまったやつはいたがな」

「深城イイイイ……!」

「なんだ!? このパワー!?!」

「体の底から力が溢れてくる! うおおおおお

おおおおお……!」

「面白い……! かかってこい耕作……!」

「深城イイイイ……!」

二人の拳が空中でぶつかり合う

「お前も空を飛べたのか! 耕作ウ!!」

「お前以外と良く喋るじゃないか! 深城イ!!」

二人の拳は再び空中でぶつかり合う、二人の力が均衡する戦いの中、突如、聞き慣れた声が張り詰めた空気を切り裂いた。

「二人ともなにをしているんだ……!?!」

「兄ちゃん、」

その瞬間、深城の拳が拓一の心臓を貫いた

「兄ちゃあああああん!!」

「……さ……さ……く」

拓一が地面に滑り落ちた。そのときにはもう拓

一は息をしていなかった

「深城イイイイ……!」

とてつもない怒りが耕作を包み込んだ

「お前なんだ!? その姿は!?!」

その姿は耕作の見る影もなかった。

「こいよ! 強そうに見えるだけだ……ろ……い

ない?」

もう深城の目には映っていないかった

「どこだ……後ろか……!」

気づいた時にはもう遅かった

「ぐはあ……! お前……覚えておけよ……う

っ!」

怒りを原動力にしてパワーアップした耕作に深

城は殺されたのであった。

そして耕作は怒りを纏ったまま果てしなく続く空へ飛んだ。

その後、耕作を見たものはいなかった。数年後に現れるかもしれない、はたまた数十年後かもしれないがそれは誰にもわからないのであった。

静止した闇の中で

大きなツポの古時計



拓一は激怒した。十勝岳がまた噴火したのだ。十勝岳はおおよそ三十年周期で噴火しており、前回の噴火からまだ二年しかたっていないのだ。

拓一は村の皆に

「おい！ また十勝岳が噴火したぞ！」

と大声で叫んだ。

その時、村は停電していた。噴火の四日前に少し大きな地震があり、発電所が止まっていた。それが故に、村の警報も作動せず、誰も噴火に気づかなかったのだ。

「そんなわけあるか、前回の噴火からまだ一年しか経っていないんだぞ！」

町の皆は信じなかった。確かに大きな音がしたが、だれも噴火だとは思いつかなかったのだ。

「そんな嘘つくわけないだろ！ 外に出てみる、ひどいことになっているぞ！」

外に出た村の皆は十勝岳を見て、血の気が引いた。

「なぜ噴火したんだ!?!」

「地震の影響か!?!」

村の皆は混乱していた。周期から言って噴火するはずのない十勝岳が噴火したのだ。だが、今年はまだ秋頃だったため雪もほぼなく、そこまで大きな被害は出なかった。

しかし、倒木や岩なだれはそこまでなかったものの、火砕流が流れてきた。ようやく土壌が出来上がってきたところにそれが流れた。生えてきた草や木の苗をすべて呑み込んでいった。再び緑が

蘇ってきたというのに、すべてがゼロに戻った。

「俺らが血と汗を流して頑張ったのに…。」

村の皆の努力が水の泡になった。

「また復興するのか…?」

そんな声が聞こえた。

横にいた他の村民は、

（そんな事できつくない。畑もなにもかも火砕流に埋もれてしまった。）

畑の上には、噴火した際に飛んでくる石、噴石が飛んできている。大きいものでは一メートルを超えるものもある。過去には二十メートルを超えるものもあったそうだ。

そんなのんきな話をしている間に、火砕流は時速百キロメートルを超えるスピードで向かってくる。

「そんな話している場合ではない！ 自分の身を守るんだ！」

拓一が叫ぶと皆はハッとした。

あの高温、高速の火砕流にのみ込まれると、ただでは済まない。命を落としてしまうのだ。

皆逃げるのに必死だが、ここは山道。足場が悪く、下り坂なのでうまく走ることができない。早く走ろうとすると下り道が故にスピードが上がりに、つまずいてしまうかもしれない。このスピードで転べば無事では済まないだろう。だからといってスピードを落とせばどんどんと火砕流が近づいてくる。だがそんなことは言っていられない。火砕流にのみ込まれれば自分という存在が一瞬で消えてしまうのだ。そんな恐怖に足は止まることを知らないかのように早く動く。

途中、馬車を見掛けた。馬車の持ち主は既に

噴火には気づいていたが、腰が抜けてしまい動けるような状態ではなかった。馬車の持ち主を助ける代わりに荷台に乗せてもらえらることになった。そうして避難所まで無事に行けた。

だが、せっかく復興した上富良野は火砕流や降灰の下に埋まってしまった。

これから復興するかしないかを後日みんなで話そうとしていたがそんな気力のある人はもういなかった。なぜなら復興した町が見るも無残な姿になってしまったからだ。

しかし、そんな無気力な村民とは裏腹に、国や他の街の人々はそんな上富良野を応援しようといふまで意気込んでいた。

旭川に設置されていた第七師団の旭川連帯区から災害派遣がされたのだ。だが停電している村にそんな情報が入るはずもなく、村には地獄のような空気と硫黄の臭いが漂っていた。

その時だった。どこか遠くからドドドドという地響きとともに人の声が近づいてくる。

ついに軍が派遣されてきたのだ。壊滅寸前の村に希望の光が差したのだ。村人はそのチャンスをつかまないと、村の皆はもちろん、ボランティアの人々や軍人たちと力を合わせ、どんどんと上富良野を復興していった。

だが、建築物を建てるだけが復興ではなく、畑なども元に戻さなければ、いずれ飢餓でまた壊滅する恐れがあるのだ。しかし、そこは国が援助してくれることになった。

こうして上富良野は、順調に復興されていった。今ではラベンダーや豚サガリが有名な観光地になるほど、美しい町になった。これも、昔の人たち

ちが汗や涙を流しながら復興したおかげでこの町があるのだ。前回の噴火から現時点で四十年近く経っている。十勝岳はいつ噴火してもおかしくない。

自然の驚異とは、人間では予測が難しい所だ。いつ噴火するか分からない。噴火してからでは遅いのだ。だからこそ、事前の対策が肝になって来る。皆もこれを機に対策を見直してはいかがだろうか。

耕作が中学に進学していたら

おーすー



耕作は中学に行き、学校の先生になるために五年間必死に勉強した。姉の富は、耕作のために結婚を先延ばしにして、武井の嫁にすぐにならなかつた。姉は武井ともめていた。

武井のことがもちろん好きだったが、なんとか説得し、武井は理解してくれたが、耕作が進学することにながらう反対していた。だが、耕作が学校に通いながらも家族や姉のために、お金を少しずつためていることを知り、その姿に武井は心を打たれた。そのため、中学でかかるお金を武井も少し出してくれた。

問題は、かかるお金のことだ。耕作は、中学に通いながら、家の畑を手伝った。兄は耕作のために今まで以上に働いた。祖父の市三郎と祖母のキワも、寝る間を惜しんで働いていた。姉の富は硫黄鉱山で働き、僅かな給料を耕作の中学費用に充てた。それでも費用が少し足りなかった。耕作は学校で特に優秀で、町のためにたくさん貢献していた。そして家のことも考慮し、町や学校が足りない分を免除してくれたのだった。

耕作が通っている間、石村家の生活はギリギリだった。その日の食べるものがあるか、ないかというほど生活がギリギリだった。それでも、家族は文句一つ言わずに耕作のためにいろいろなことをしてくれた。そのお陰で耕作は、中学を通いけることができた。

その後、耕作は相手のことを思いやる立派な学校の先生になった。中学費用を免除してくれた学校と町に感謝と恩を返すために、上富良野の学校の先生として一生懸命に働いた。そして姉の富は、耕作の中学卒業を見届けたあとすぐに、武井と結婚した。

わたしが好きなのは……

堀田 漣



「しげじやないつてば!」

男の子が叫んでいる。その途端、私の額に何か当たった。男の子は父に向かって石を投げつけたのだ。その時の記憶は一瞬すぎてあまり覚えていない。痛いし、血が滲んでいる。

石を投げた男の子が、父に抱えられている私を見ている。私は泣かなかつたし、その子を恨むこともしなかつた。

それから時が経ち、ある年の正月になった。私は雪の積もる上富良野の街を歩いていた。

すると、目の前に私よりも少し背の低い男の子が現れたのだ。見間違ひなくあの時の男の子だった。その子は私を見るなり「あつ」と声をあげた。あの日から三年、耕作とは会っていないなかつた。少し話したい。少しだけ近づこうとした時、耕作は私から逃げるようにして走り出した。耕作が走った跡を踏むように数メートル歩追いかけた。

(あれ、これ……)

私は、落ちている三十五銭をえんじ色の被布のポケットにそおっと入れた。冷たい風が私の頬に当たった。

それから何カ月か経った時、豆腐屋の前で耕作さんに会った。

(あつー)

私は内心驚いた。耕作が私の横を通り過ぎようとしている。私は勇気を振り絞って声を出した。

「石村さん」

「あなた石村さんでしょ」

私は耕作さんを見つめた。耕作さんは顔を赤くして頷く。

「あんた、冬に会った時、どうして逃げたの」

「ね、どうして逃げたのよ」

強い口調で言った私に対して耕作さんは少し俯き、

「忘れたよ、そんなこと」

と、俯きながらぼそつと答えた。私はかつとなり、

「うそよ、忘れる筈ないわ。中学に一番入れる人が、そんなに簡単に忘れる筈ないわ」

「……」

「あんた、私を覚えてるんでしょ」

私はますます怒り口調になってしまふ。

「あんたの名前は知らん」

「名前は知らなくても、わたしに石をぶつけたことは知ってるんでしょ。だから逃げたんでしょ」

耕作さんは頷いた。

「わたし、すぐく腹が立ったわ。まるで熊にでも会ったみたいに逃げ出して……失礼よ」

まだ耕作さんは黙ったままだつた。

「ねえ石村さん、わたし、石をぶつけられたことを、いつまでも根に持つ人間だと思われるの、癪なの。口惜しいわ、わたし」

私は何故か涙が出てきそうになつた。

「誰も彼も、うちの父さんの悪口を言うわ。わた

しがその娘だからって、わたしのことまで悪く言うわ。あんたも、わたしのことを悪い人間だと思っただけでしょう」

「ちがう。それはちがうよ」

「いいわよ、悪いと思われたって」

私は帯の間から財布を出し、三十五銭を耕作さんに突き出した。

「あの時あんたが落としてったお金よ」

耕作がそれを受け取った瞬間、私は彼を背にして思わず走り出してしまった。

桜が降るある日のこと、私は耕作さんのもとへ学校に行った。彼のいる教室の戸を開けた。

「やあ、こんにちば」

快活に耕作さんは私に向かって挨拶をした。

「花井先生は職員室におられる筈ですよ」

私はいつも花井澄子先生を訪ねて学校に来ているので、花井先生を探していると思っただろう。

「いませんでしたか？」

耕作さんは眩しげに私から目を外した。

「わたし、澄子先生に用事があるんじゃないの？戸を閉め、耕作さんの傍へ歩み寄った。

「石村さん、わたしね、あなたに用事があるの」

「ぼくに？ ですか」

耕作さんは少しかすれた声で言った。

「じゃ、職員室に行きますか」

「馬鹿ね。職員室なんかでお話できることじゃないわ」

「じゃ、当直室に行きますか」

「いやよ。ここでいいわ。当直室には小使いさんや、ほかの先生がやってくるじゃないの」

「それはそうだけど……」

少し考えて耕作さんは口を開けた。

「用事って何ですか？」

そういいながら耕作さんは私に教師用の椅子をすすめてくれた。彼は出席番号一番の椅子に座った。

「……あのね、石村さん、わたし今、縁談があるの。

旭川のお医者さんなの」

「それはよかった」

「まあ！ わたしがお嫁に行くのが、石村さんにはいいことなの？ ね、石村さん正直に言っただけよ。あなたは、わたしがお嫁に行くことと行くまいと、そんなことどうでもいいと思うの？ わたしはね、本当のこと言うわ。わたしはどこにもお嫁に行きたくないの。医者であろうが、金持ちだろうが、そんなことどうでもいいわ」

「どうしてですか。どうしてお嫁に行くのがいやなんですか」

「まあ！ わからないの石村さん」

呆れたように私はまじまじと耕作さんの顔を見つめると、彼は頭をかきあげて言った。

「わからないなあ」

「あのね、わたし好きな人がいるの。だからどこにも行きたくないの」

「ああ、そうですか。好きな人がいるんなら……ど

こに行ったらどうですか」

「まあ！ 石村さんったら」

言った直後、涙が出てきてしまった。

「どうしたんです？ どうして……」

「石村さん……」

私は両手で顔を覆った。

「石村さんったら、年寄りみたいな、部員別臭い言い方をして、卑怯だわ」

手と足が一斉に震える。あの日、石が私の額に当たった日からずっと思っていたこと。

「わたしが好きなのは……石村さん、あなたなのよ」

耕作さんはいきなり立ち上がった。

柘太の冒険物語

クマの子



耕作と節子が結婚した。その間に元気な男の子が産まれた。その名は柘太、十二歳。すくすく育つて現在とても優しい男の子だ。

ある日耕作と柘太は、泥流に流された家の跡地に行った。

「ここは、じいちゃんの家があった場所だ。」耕作が言う。

「知っているけどどうしてここに来たの?。」と柘太が言う。

「お前に頼みがあったて来たのだ。」

「頼むじいちゃん、ばあちゃん良子を復活させてほしい。」

「え、僕ー。」

柘太の異世界ライフが始まる。

次の日、柘太は節子に起こされた。

「柘太おはよう。」

「おはよう母さん。」

「母さんはじいちゃんたちを復活させること知ってるの?。」

「うん知っているわ。」

「母さんは心配してる?僕が冒険するの。」
「もちろんしているわ。でも少し期待している。」
「柘太がみんなを復活させて、また楽しい日が始まるのを楽しみにしてる。」
「そっか僕がんばるね、母さん。」
「楽しい日をまた取り戻す。」
柘太が冒険の準備を始めたその時だった
「柘太君ー。」

と声が聞こえた。

「あ、由貴ちゃん。」
友達の由貴が柘太の家に来たのだった。

「冒険の準備?」
「うんそっだよ。」

「へー。」
「あの子柘太君、お願いがあるの。」

「お願い?」
「私を冒険に連れてって。」

と由貴が唐突に言い出した。柘太は、
「由貴は連れてはいけない。」
と言った。

「あなたの役に立ちたいの一人で抱え込まないで。」
と由貴が言った。

「わかった連れていくよでも危険がいっぱいあるよいいの?。」

「うん覚悟はできているわ」
「じゃ、よろしく。」

由貴が仲間になった。

柘太と由貴は家を出て近くの街に向かっていった。すると狂暴化したエゾシカがあらわれた。

「やばいどうしよう。」
「怖いよ柘太君。」

すると「バーン」と銃の音が聞こえた。
「大丈夫二人とも?」

と声が聞こえた。拓一と福子だった。
「おじさん、おばさんどうしてここに?」
「ちょうど2人で狩りに向かってた途中、人が襲われていて助けた感じだ」

「柘太君由貴ちゃん大丈夫?」
「大丈夫」
「大丈夫です福子さん。」

柘太は拓一たちに経緯を話した。

「そうゆうことだったか耕作のヤツ子供にこんな無茶を」

「耕作さんみんなを生き返らせるなんて」
「……」

「わかったおじさんたちも手伝う。子供だけじゃ心配だからな。」
「いいの。ありがとう。」

拓一と福子が仲間になった。

柘太たちが森に入って歩いていると、ダンジョンを見つけ、奥深くまで歩いた。するとある宝玉があった。

「なにこれ?。」
と柘太が言った。

すると拓一が、

「それ願いがかなう宝玉だなんでこんなものがあるんだ。」

「拓一さんこれを持っていけば生き返るの?」
「たぶんな。」

「よし持っていこう。」

柘太たちは宝玉を持って耕作の元に帰った。

「父さん母さんたたいま。」
「おお、お帰り」
「お帰りなさい柘太。」

「父さんこれ」
「これは願いがかなう宝玉すごいな柘太」
「うん」

「これで生き返らせよう。」
「うん、宝玉よ僕の願いをかなえてください。」
すると宝玉が光り出した。中から神が出てきた。

「願いを言え少年よ。」

「僕の願いは、泥流で死んだ人たちを生き返らせ
てくれ。」

「よかろうその願いかなえよう。」

すると周りに光があふれた。

「祐太、大丈夫か。」

耕作の声が聞こえて起きた。

「どうなったのお父さん?。」

「分らんみんな大丈夫か?。」

「うん大丈夫だ。」

すると「おい」と声が聞こえた。

そうみんなの前に死んだ良子やじいちゃん、ば

あちゃんが居た。耕作たちはみんなひとりひとりと

と抱き合った。祐太は「これがひいじいちゃんとい

いばあちゃん、良子おばさん」と手を取り合った。

「よかったねお父さん」

「うんお前のおかげだありがとう祐太」。

みんな祐太をほめたたえて宴が始まった。また

平和な日常に戻ったのだった。

完

終泥流地帯

ゴキジェット



節子は、父の深城から逃がすため福子を列車に
乗せ旭川に逃げた。

旭川の駅につき、福子の兄国男と合流する。

国男にかくまってもらい。その後佐野先生のお

宅に逃げ込むのだ。

その頃、草刈りをしながら耕作は、呟いた。

「兄ちゃん、福ちゃんは無事に着いただろうか?」

拓一は、その言葉を聞いて言った。

「福ちゃんなら大丈夫。」

耕作は、拓一の言葉を聞いて安心した。

そして、上富良野を復興させるために一生懸

命畑仕事をした。

その夜、深城が家にやってきた。福子を逃がし

たことがバレたのだ。

深城は、言った。

「うちの大切な金ズルを逃がしやがって。」

耕作は、

「知りませんよ、ぼくらは逃がしていませんよ。」

と嘘をついた。

それを聞いて深城は、

「逃がしたのは、わかっている。どう責任を取るん

だ。お前が、借金をかわりに払うか?」

それを聞いて、拓一は言い返した。

「借金があっても拘束はできなはずだが」

「……………」

深城は、何も言い返せない。

すると深城は、拓一に殴りかかった。

それを見て耕作は、深城に石を投げつけた。

深城にクリンヒットして深城にその場所を逃げ
出した。

旭川に逃げた福子は、借金を少しでも返すた

めに一生懸命仕事をした。

それから一週間が経ち福子は、節子に言った。

「拓ちゃんと耕ちゃんは、深城に何かされていな

いかしら? 町の復興は、順調から?」

節子は、これを聞いて言った。

「耕ちゃんと拓一さんならきつと大丈夫」

それを聞いて福子は、たしかに「拓ちゃんと耕

くんなら大丈夫」だと思った。

それから五年が立つ。ある日福子と節子は、

上富良野に戻ってくる。

上富良野の景色を見て福子と節子は、驚いた。

なんと、復興していて元の町のようになっていた

のだ。それから福子と節子は、耕作と拓一のとこ

ろに急いで向かった。

福子と節子は、耕作と拓一と五年ぶりに再会

して、福子は拓一に、節子は耕作に抱き着いた。

そこに、福子に戻ってきたと聞いて、深城の部

下が借金を取り立てにきたが、なぜかしら途中

で帰っていったのだ。

耕作は、深城の部下の逃げる姿を見て言った。

「なぜ、逃げて行ったのだろうか」

節子・福子・拓一も、不思議に思った。

それが気になり町の人に聞くと、深城ががんで

病死したそうだ。そのおかげで福子の借金は、な

くなったそうだ。

借金がなくなった福子は、これで自由になった。

まもなく福子と拓一は結婚して一人の子供が

いる。幸せになったそうだ。

耕作は、上富良野の学校で教員になったそう
だ。そして今、耕作はどう節子に告白しようと思
んでいる。

「どう節子ちゃんにプロポーズすればいいんだろ
う」

耕作は、いった。それを聞いて拓一は

「シンプルに自分の思う通りに言えばいい。」

それを聞き納得して、耕作は

「兄ちゃんありがとう」

と言いつつ節子のもとに行った。

節子のところにいき、耕作は

「僕と結婚してください。」

それを聞き節子は喜んで、

「はいー」

と言った。そして結婚した。

それから四人は幸せに過ごしたとのことだ。



【Twitter(ツイッター)】

多くのユーザーに利用される SNS(ソーシャルネットワークサービス)のひとつで、
140文字以内の短文(つぶやき=ツイート)投稿による高い拡散性が特徴です。

『泥流地帯』作文コンクールではこの機能(アプリ)を利用した投稿も審査対象とし
て募集しています。



橋宮香也子
(三浦綾子『果て遠き丘』)
@KayakoHashimiya

2026年、『泥流地帯』連載開始から50年。2026
年、『果て遠き丘』連載開始から50年。



神楽岡マイ
@mai_kaguraoka
「見えるぞ！私にも泥流が見える！」シ

ャア・アズナブルが上富良野を訪問した時の名言



うるおいおやつ
@banana_kskk

真面目に生きようとも、人

は多くを失い続ける。因果応報は、人間の掲げた都合の良い理想でしかないのだ。

しかし、苦難を試練と受け止めて、ただ前向きに進んで行けば……泥流の果てにも、鎌はきらりと朝日を弾き返す。

闘え。何よりも——自分自身と。



神楽岡マイ

@mai_kaguraoka

「開拓とは、常に二手三手先を読んで行うものだ。」拓一が耕作に伝えた名言(妄想)



うるおいおやつ

@banana_kskk

もう描くなと言われても、心に描かずいられない。それがきっと「懐かしさ」であり、それがきっと、人間を支えている。

「——復興せずにはいられないんだ！」
土地も、命も、人の心も。

故郷はずっと、胸に佇む。
帰りたいんだ。帰るんだ！



ちょっとおバカな哲学者

@darkish_chclt

本当に清らかに生きること。それはきっと、この世の何よりも泥臭い。



ちょっとおバカな哲学者

@darkish_chclt

日進部落だけでなく人々の心にも流れ込み、すっかり覆い尽くした真っ黒い泥流は、いわばあらゆる絶望のメタファーなのである。情景描写の天才が描く傑作。それが「泥流地帯」なのだ。



Tomomo

@tomomo_journal

【むらさき】

大正泥流を生き祖母、平成或る長月。

棺に母が「お母さん、この着物が一番好きだったから」と納めた色。

大正泥流を越え天へ広がる花を前に、令和国際文月。

わたしの頬張ったラベンダーソフトクリームの色。

同じ、とはたと気づき、
そのありがたさを刻み、
新た歩む。



まりあ

@hSIntJFX8q6sJwQ

上富良野へ行ってちょ

うど1年。

今度は日進の沢の方へも行きたいな。

あと、映画エキストラ希望です！

畑仕事をするおばちゃん。街中の八百屋のおばちゃんなんでも OK。

資料編

史実としての『泥流地帯』



「上富良野村、壊滅ス」
 「二度の開拓」を果たした奇跡の町・上富良野の
 壮絶な実話から生まれた『泥流地帯』『続泥流地帯』

小説『泥流地帯』が誕生したのは作者三浦綾子さんの夫であり口述筆記のパートナーである光世さんがきつかけでした。三浦夫妻の住む旭川と上富良野は一時間足らずの距離。近郊での出来事でもあり営林署勤務時代から関心の高かった十勝岳噴火災害について、聖書に記されるヨブ記になぞらえ、人間の苦難をどう受け止めるべきかをテーマとした作品の執筆を綾子さんに勧めたそうです。

執筆にあたり三浦夫妻は「悲劇と奇跡の地」上富良野町(被災当時は上富良野村)を幾度も訪れ、災禍の痕跡を巡り当事者から熱心な話を聞きました。執念ともいえる取材の果てに作品に織り込まれた現実の「上富良野」と「十勝岳噴火災害」についてご紹介します。



「泥流地帯」文学碑(草分地区)と三浦夫妻

■上富良野町(上富良野村)

上富良野町は北海道中央部、十勝岳をはじめ三方を山々に囲まれた盆地に位置する人口約一万人の町です。

入植開始は明治三十年。三重県の団体が草分地区

(物語中、吉田村長や移転後の石村家があった地域)

に足を踏み入れたことが始まりです。

初夏を彩る町花ラベンダー、盆地特有の甘み広がるメロン、ビール原料となるホップ、全国のホテルやレストランで愛されるブランドポークや和牛などの豊かな



上富良野町

な農畜産物、そして道内最高標高、雲上の温泉郷や色鮮やかなパッチワーク丘陵など、広大な火山帯特有の、大自然の恵み豊かな地域です。

■活火山、十勝岳

十勝岳(上富良野町ほか/二〇七七m)は大雪山国立公園園南部、十勝連峰の主峰です。日本百名山に名を連ねる秀峰であり、富良野岳、上富良野岳、美瑛岳などを巡る登山コースは多くの登山客で賑わいます。連峰ではもともと若い(新しい)山ですが、現在も数十年おきに火山活動がみられる活火山です。

■大正噴火(大正十五/1926年)

豊かな恵みを受取る一方で、大自然は時として人知を超えた脅威をももたらします。

物語の題材となったのは大正十五年五月二十四日夕方に起きた十勝岳の大規模な爆発です。山体崩壊とともに溶岩や熱せられた大量の地下水などが噴出し積雪を融かし、土砂や流木を呑み込みながら泥流となって麓の村を襲いました。



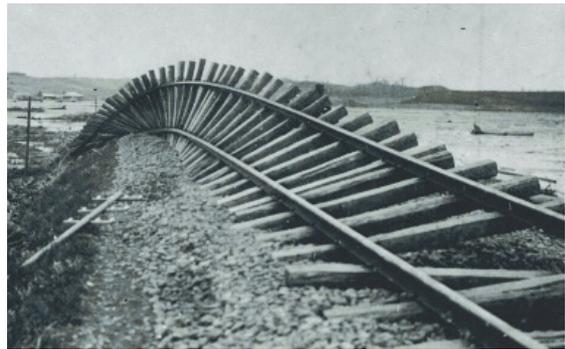
大正15年9月爆発時の噴煙



泥流の威力は凄まじく、七十トンに迫る巨岩が旧石村家よりやや下流まで流されました【写真①】。現在この巨岩は記念碑の土台として爆発記念駐車公園に



【写真①】 泥流に押し流された巨岩(草分地区)



【写真②】 捻じ曲げられた線路(草分地区)

設置されています。

さらに泥流の威力を象徴するのが捻じ曲げられた線路です【写真②】。作中にもあるとおり線路の土盛りはひとときわ高く、泥流の勢いを大きく弱めたときれています。

鉄路の損壊は著しいものでしたが復旧の勢いも凄まじく、被災翌日から数百人の工夫が動員され、四日後には貨客を満載した列車が仮運行されました。これにより各地から支援物資や救援隊が押し寄せ、応急処置のみならず復興の動きが大きく加速します。

また、作中で描かれるとおり田畑の復興作業は困難を極めました。1メートルを超える泥土に埋まったかつての美田には、近隣の丘や被災を逃れた農地から土を運搬し、上に敷き詰める「客土」という方法がとられました。さらに強い酸性の土地を中和し作物が芽吹く土に改良するための作業が何年も続けられ、ついに耕作が「死んでいる」と嘆いた泥海に再び青々とした稲を根付かせることに成功しました。

現在の上富良野の、豊穡な稔りと風光明媚な景観は拓一や耕作が思い描いた「百年後のふるさと」そのものです。

■石にかじりついても

上富良野村長 吉田貞次郎

物語に登場する吉田貞次郎村長は実在の人物であり、拓一や耕作らとの会話などを除き、作中では実際の言動や自身を巡る出来事などがリアルに記されています。

吉田村長は三重県一身田村(現津市)に生まれ、十六歳で家族とともに北海道に渡りました。二十五歳から村議会議員などを歴任し、大正八年、三十四歳で初代村長(一級町村制)に就任し、四期十六年に渡り近隣に名を轟かせる名村長として村政をけん引しました。

奇跡と称される泥流災害からの復興を果たした後、昭和十七年の衆議院議員総選挙で初当選。衆議院議員を一期務め、昭和二十三年、六十三年の生涯を閉じました。



吉田貞次郎村長

〈参考文献〉

『十勝岳噴火泥流災害90年回顧誌』『郷土をさぐる (第三号、二十号)』(上富良野町郷土をさぐる会)ほか



(大正14年ごろ撮影) 開拓農家の住宅。牧場主、牧場の支配人、そして小作人の三者が写る非常に珍しいショットです。

泥流ギャラリー



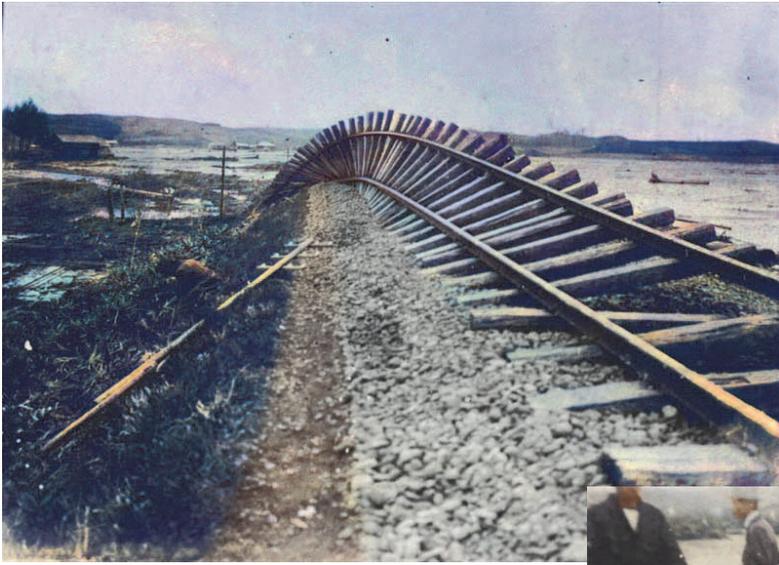
百年を経てよみがえる上富良野開拓時代の温もりと息づかい。
上富良野町郷土館所蔵のモノクロ写真に、AI(人工知能)によりカラー彩色を施しました。



(大正4〜5年ごろ撮影)
上富良野村で最初の商店「幾久屋」。現在も上富良野町内で事業を営む老舗です。



(明治末ごろ撮影)
早期から上富良野に入り、16戸分とされる大規模な開墾に挑戦。苦難の果てにそれを成し遂げ大きな財産を築いた開拓農家の一族の写真といわれています。
(参考:「上富良野志」119頁「田中亀八」の項)



(P.62再掲)
泥流の威力で捻じ曲げられ、めくれた線路。泥流は大人の背丈ほど小高い線路を越え、市街地の西側に広がっていききました。

上富良野橋附近。減水後も木材を敷き詰めたかのような景色が広がっていました。



罹災から続々と集結した救助隊には日本赤十字社看護婦の姿もありました。



泥流災害直後、市街地の野天に設けられた応急の救援本部。不眠の一夜が過ぎ、近隣から青年団や消防組、上川支庁、北海道庁や上川支庁、旭川警察署、医師会、陸軍第七師団など続々と救援隊が到着し、未曾有の大災害に立ち向かいました。



2022 第3回泥流地帯作文コンクール



村人が腰かける大木の下には4尺(約 1.2メートル)を超える泥土。その更に下に30年かけて作り上げた美田が今も埋もれています。

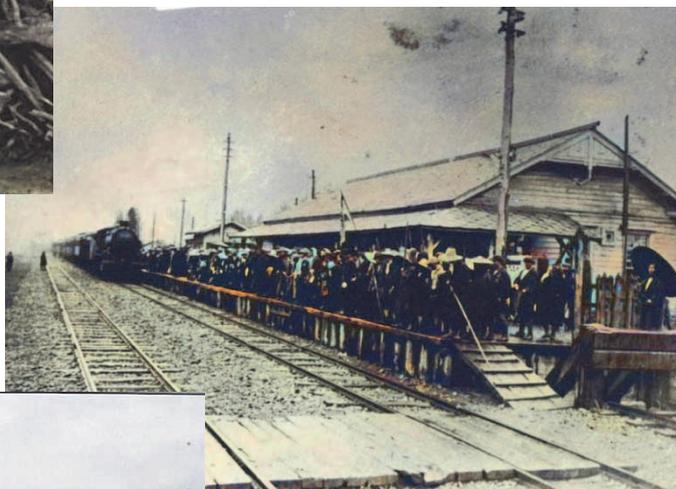


上富良野～美馬牛間が不通となった富良野線。美馬牛から徒歩(約 10km)で、或いは滝川から富良野を経由して続々と救援隊が到着。さらに、各地から莫大な量の支援物資が寄せられました。





作中で拓一らが取り組んだ流木除去。集められた流木は正に「山のように」積まれるほどの量でした。



特に鉄路の復旧の勢いはすさまじく、各所から集まった作業員が昼夜を問わず復旧作業に取り組みました。



水も引き切らない災害4日目、不通であった上富良野～美馬牛間の列車が貨客を満載して仮運行を行いました。





農地の復興は旭川の第七師団より借用した軍用トラック等を用いて、泥土の上に近隣の畑や山から削り出した表土を重ねる「客土(きゃくど)」によって行われました。

『続泥流地帯』冒頭で描かれた「村葬」。正面でこちらに視線を向けているのは吉田貞次郎村長です。

吉田貞次郎村長



昭和5年、災害から4年を経て三重団体(現草分地区)に広がった黄金色の景色。



第3回『泥流地帯』作文コンクール作品集
2023年1月発行（WEB 公開版）
発行：『泥流地帯』映画化を進める会
事務局 北海道空知郡上富良野町大町 2-2-11
上富良野町企画商工観光課内